

聖剣を抜いた親友と、 抜けなかった俺

雷神デス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界転生だヒヤッホー！

前世ではボッチやったけど親友できたでw

なんか魔王いるらしいやんけ、よっしや勇者にしか抜けん聖剣ワイが抜いたろ！

聖剣親友が抜いたんやけどw

は？（マジギレ）

だいたいこんな感じ

目次

親友が聖剣抜いた	1
その剣握るは誰のため	20
君と僕は友達	43
受け入れられた者	73
僕に任せて	96
居たはずの誰か	121
この世界であなた、ただ一人	151
謁見	176
勇者の記憶	202
勇者じゃなくなった日	229
魔王討伐戦前夜	257
なんともまあ、つまらない物語	271

あなたが無くても生きていきます

293

楽しそうに笑いましょ

313

結構楽しかった

342

後始末

367

なんか生きてた

387

親友が聖劍抜いた

転生者、というジャンルのアニメや漫画があるのはもう皆知つての通りだろう。

クソみてえな現代社会の鬱憤を晴らすために都合のいい設定やら才能やらを持った主人公に自己投影させて非現実を楽しむ一般的な娯楽小説。

俺も結構好きだったし、それらの小説の主人公になれたらいいなんて妄想を楽しむこともあった。

だから、実際に俺がそうだった時は歓喜したもんだ。

明らかにファンタジーと分かるような世界に剣と魔法、そして明らかなメリツトとなる前世の知識と経験。

幼少期はそりゃ優越感に浸れまくった、何せ他の同年代の奴らに比べ、俺は才能も経験も何もかもが上だったから。

どうやら俺は前世の記憶に加え、異世界基準でも恐ろしいほどの戦闘の才能があったらしく、十歳にも満たぬ歳で大人を喧嘩でボコボコにできた。

そんな俺に対し他の奴らがついてくるのは、とても楽しかった。

まるで自分が世界の中心にいるかのような、主人公であるかのように思えたからだ。

ただ、戦いの才能はあっても、前世の記憶なんてものがあるから、人格は元のままのわけ。

最初は俺を慕って後ろをついてくるガキ共も、段々と俺の性格に勘づいたらしく、離れて行った。

前世からボツチだったので寂しいわけでは無かったけど、惨めなのが嫌だったので適当な奴とつるもうと思つて俺と同じようなボツチを探した。

以前の俺ならまあ間違いなく無理だったろうけど、無駄に自信がついてたその時は自然と友達なんてすぐできると思つてた。

そして、目的の人物は意外とあっさりと見つかったのだ。

皆が遊んでる広間の片隅でポツンと座つてる明らかなボツチ、こりや行けるなど思い声をかけた。

なんか顔に変な痣があり、忌子なんて呼ばれて育ての親にも嫌われてたらしいし、村八分にもなつてたらしい。

前世の感覚が尾を引いて呪いとか信じてなかった俺はちよつと優しくしたらすぐに懐き、俺のことを褒め称えるそいつのことを気に入つてた。

割とそいつとは感性が合っていたらしく、長いこと一緒にいたが、喧嘩などはするこ
となく割と楽しかった時期を過ごした。

あの頃はそんな実感無かったが、あいつとの関係性は『親友』というやつだったんだろう。

十三才の頃、どこか遠くの地で魔王が復活したということを知った。

そしてその魔王を倒せるのは聖剣に選ばれた勇者のみである、と。

何のイベントも娯楽も無い村で過ごし、退屈してた俺は、自分であればその聖剣を使えるのではないか？と思った。

自分が転生者であること、神に愛されているかのごとき闘いの才能を持っていたこと、それらが自分がこの世界の主人公なんじゃないかという考えに至らせた。

親友にそのことを話し、親友もその考えに賛同したことで俺の自信は更に増長した。

親に頼んで聖剣があるという地に連れて行ってもらうとしたが当然反対されたので、俺と親友二人で勝手にその場所に行こうとした。

簡単な荷物だけ集めて行われた馬鹿な計画は、困ったことに驚くほど上手く行ってしまう。

危険な魔物も俺の剣技にかかればどうとでもなったし、前世の知識でキャンプとかのやり方もある程度知っていたので軽々と旅を続けられた。

道中で立ち寄った都の武芸大会で優勝し、優勝賞金と名誉を手に入れたこともあった。

親友の顔の痣を侮辱した奴らをぶん殴り、面倒ごとを起こしたこともあった。

親友が女装に手を染めようとしたのを見て少し引いたりもした。

かつこいい武器を買って、一緒に笑い合い、時には辛いことがあってもそれを乗り越え、そして――

「ついにこの時が来たね、エンヴァ君」

「ああ。ようやく辿り着いたぜ、この場所に」

感慨深くそう呟くが、聖劍が突き刺さつてた場所は聖なる森の奥とかではなく、王都の広場の中心だった。

当然沢山の人でごった返しになってるし、神聖な空気もクソも無く、ごついおっさん達が並ぶ列の最後尾に俺達二人はいた。

我こそは、と聖劍を抜こうとする者は多く、そしてその全員に劍を抜かせるのは酷く時間がかかる。

それ故に聖劍を抜くのに挑める時間は一人一分とし、順番を守らなければいけない決まりになっていた。

なんだか聖劍という割にはひどく俗物的なようにも思えるが、案外簡単に聖劍を抜く

機会を貰えたのはその時の俺達にとっては都合が良かった。

「ひ、人がいっぱいいて緊張するね……！」

「おいおい、今そんな弱音言つてどうすんだよ。これから俺は世界中から注目されることになるんだぜ？勇者エンヴァアとしてな！」

「わー……！楽しみだなあ！エンヴァア君が勇者になって、人気者になったら僕も誇らし
いやー！」

「ワハハ！勇者になって魔王を倒した暁にや、ルストも勇者の親友として大注目だぜ！」

二人で馬鹿みたいに笑いながら、列を進んでいく。

他の奴らがそんな俺達のことを嘲り笑つていたとしても、俺達はもうそれを気にしないほどに胸が高鳴つていた。

交通機関なんて無いこの世界で、子供二人が何も無い状態で旅をしたのだ、当然ここに着くまで時間はかかり。

一年以上の時間をかけて、ようやく王都に到着し、そして聖剣を抜くことに挑戦できる。

初めて、たった一つの目標のために全力で頑張れた。

だから、この旅の行き着く先はハッピーエンドだと信じていた。
そして、そして。

当然のように、台座に突き刺された剣は抜けなかった。

「ちつくししょう！なんで、抜けねえん、だよー！」

「……よし、終わりだ。さて、どいたどいた。後がつかえてるんだ、子供の相手してる時間はないんだよ」

幾ら力を込めても、工夫しても、一人の挑戦者に定められた一分の時間の間に、聖劍が抜けることは無かった。

今まで努力して、ようやく辿り着いた果てにこんな無様を晒してしまった。

俺達二人の旅は完全なる無駄だったと示すように、無情にもタイムアップを告げる衛兵。

目の前が真っ暗になり、目の涙が溜まった。

「エ、エンヴァア君……」

「……畜生!!」

涙を振り払い、聖剣から背を向けて歩き出す。

自分は勇者ではなかった、自分は別に特別でもなかった、ルストの期待に応えられなかった。

それまで幸せだった記憶が全て価値の無いものにならなくなってしまふような感覚を覚えた。

「ほら、次の奴。さっさとしてくれ」

「え?あの、僕は」

「並んだ奴は挑戦する決まりになつてんだよ。ほら、早く」

親友が後ろをついてこないことに気づき、後ろを向く。

そこにはおどおどと剣の柄を握り、こちらを見るルストの姿があった。

親友の不安げな顔に気づき、涙を拭って、むすつとした顔を作る。

「さっさと終わらせて、王都の観光でもして帰ろうぜ。なんかもう色々疲れたし」

「う、うん！分かった、すぐ済ますね！」

分かりやすいくらいに笑顔になって、うんしよと力を入れる親友の姿に少しだけ平静を取り戻す。

よくよく考えれば、別にルストは俺が勇者にならなくても大して問題は無かったのだろう。

友人と一緒に長い時間を旅できた、それだけで良かったのだろう。

俺はそれに気づかず、勝手にルストは俺が勇者になることを期待していたのだと思い込んでいた。

まだどんよりとした心は晴れないが、せめてこの旅が楽しい思い出終わるよう、この後一緒に王都で遊びつくそうなんて思っている内に。

「……………あ、れ？」

「……………は？」

「これは、まさか……………！す、すぐに王にお伝えするのだ！」

『勇者が現れたと！』

選ばれた人間
ルストは、あつさりとして聖剣を引き抜いた。

☆○☆○☆

『田舎からやってきた少年が、聖剣を引き抜いた』

それはすぐに国中に伝わった。

誰もが勇者の誕生に心を躍らせ、魔王を倒し平和な世を築いてくれるのだと歓喜し、勇者の名を称えた。

そう、『勇者ルスト』の名を。

「エンヴァア君！」

「よお、久しぶりだな。いやー、色々大変だったみてえだなあ」

あの後、すぐにルストは城に連れられて勇者の称号を与えられ、あれよこれよと魔王を討つための旅に出ることになった。

再び出会ったのは、王都の片隅、所謂スラムと呼ばれる人間の掃きだめが集まる場所であった。

俺は相も変わらず田舎臭い恰好で、ルストは見たこと無いような煌びやかな服を着て。

会うつもりなんて無かったのに、この勇者様は俺を探すためにわざわざ城から抜け出して来たらしい。

今頃は大騒ぎだろう、まったく俺なんかのために騒ぎなんて起こすなよ。

「ずっと、ずっと探してた！なんであの時居なくなっちゃったの？エンヴァ君がいない間、僕……」

「話しかけてくんよ、主人公」

自分でも底冷えするような声が、俺の口から発される。

ダメだと思っても、心の底から湧き上がるこの感情を抑えることなどできなかつた。

可愛さ余って憎さ百倍なんていう言葉があるが、なるほどこういふことなのかと納得

した。

今まで親友だと思っていたこいつの顔が、声が、思い出が——今はどうしようも無く憎かった。

「え……？何を、言ってるの？」

「勇者就任おめでとう、すげえよまさに主人公だ。ああ、最初の頃から気づくべきだった。ずっとお前の生い立ちに同情してきたけど、ああ、そうだよな。辛い境遇は主人公の特徴だもんな」

「主人公……？ど、どうしたの……目が、なんだか怖いよ……？」

勇者様の声が震える、それでも俺は構わず続ける。

今まで特別だと思ってたが、俺なんて前世の知識を除けばどこまでもありふれた存在だった。

人より優れた才能があり、夢見がちな子供であり、両親の手で健やかに育ち、そして今は自身が特別ではないと痛感してしまった。

嗚呼、そうだろう、そんなありふれた奴は主人公になんてなれやしない。

主人公になるのは、そう。

「お前のその痣、先祖返りの証なんだって？かつては凄まじい魔力を持ってて、魔王すら恐れさせた凄い奴らの末裔。魔王軍からも危険視されて狙われまくって周囲の奴らも巻き込んだりやったから忌子の証って呼ばれたって」

自分でももう感情を抑えることが出来なかった。

声が震える、目の涙が溜まる、目の前のこいつを殴りたくなる、勝手に裏切られたと思ってしまう。

裏切ってるのは俺で、裏切られたのはこいつのはずなのに。

自分の勝手な嫉妬心で、こいつのことを憎んでいる、ただそれだけだと分かっていたけど。

心の底から湧き出るこの感情の処理の仕方が分からなくて。

「かわいそうだと思つて付き合つてて損したぜ！何が忌子だ！何が勇者だ！何が、何が

——」

この先を言うと戻れなくなると本能が告げる、それでも尚吐き出そうとして、ルスト

と共に居た旅の記憶を思い返す。

あんなに楽しかった思い出を、今までの全てを否定してしまうことを俺は恐れてしまつて、その先を言えなかつた。

中途半端だ、憎んでる癖に憎み切れず、ただただ八つ当たりしかできない自分に苛立つ。

その苛立ちを誤魔化すように、俺は腰に下げていた剣を抜いた。

聖剣のレプリカ。ルストと一緒に、いつか聖剣を抜くと誓つたあの日に買った、旅の途中に何度も助けられた聖剣の紛い物。

それを見て、ルストは泣きそうな顔になつた。

「なあルスト。前に言ったこと、覚えてるか？ほら、旅に出る前にした、英雄譚のおとぎ話」

精神年齢は良い大人な癖して、大興奮して読み漁つた数々の英雄譚。

どんな困難にも挫けず進み、勝利を勝ち取り、最後には皆に称えられ祝われハッピーエンドを作り出す、そんな物語。

俺はそんな幼稚な物語の主人公になりたいと、なれるはずだと思つてしまつた。

前世ではロクなことができずに、ただ死んでいくだけだった俺でも、この世界なら、なんていう幻想を抱いてしまった。

「覚え、てるよ。君と何度も読んだ、あの本を」

「ただその夢が破れるだけなら、死ぬほど泣いて落ち込んで、それで済ませられたかもしれないけどよ。なあるスト。なんでお前が勇者なんだ？」

「……分からないよ。今でも、僕自身も納得してない」

「ああ、だろうな。お前とは何もかもが正反対だった。照れくさいけど、俺はお前のこと自慢の親友だと思ってたんだぜ？料理洗濯勉強、全部できて一人でも生きていけそうなくらい色々やってくれた。お前のおかげで、旅はすげえ快適だった」

「けど、僕は戦えなかった」

「だな。だから俺が剣を握って、襲ってくる魔物共を全員ぶっ倒した。正直なところ、俺は前からお前のことを羨ましく思ってた。なんでもできて、顔も俺なんかよりずつといいし、肌も綺麗でき。あとイケメンだし」

「……イケメン？」

「あ、こつちの世界じゃイケメンって無かったっけ？忘れてくれ。それでもまあ、お前のことを羨みはしても、悪く思ったことなんて一回も無かったんだ。お前はなんでも出来

たけど、戦いは出来なかった。だから俺が戦ってお前を守ってることで、俺達は対等なんだって思えたんだ。今は違うけどな」

「今でも、僕らは対等だ」

「勇者様と田舎のガキでか？馬鹿言うなよ」

戦うことが、勇者になれることだけが俺にとってこいつと対等でいられる唯一の条件だと思っていた。

前世の経験合わせてもルストには他のことでは勝てないけど、戦いだけはルストに勝てる唯一のことだと思いついていた。

けど、今はもうそれすらない。

「聖剣を抜いた勇者様と、棒切れ持っただけのガキンチョが戦えば、どっちが勝つかなんて誰でも分かるだろ？」

「僕は、君に勝てるなんて思ったことは無いよ！だって、君は」

「そう思うなら剣を抜けよ、勇者！お前だって本当は分かかってんだろ!?俺じゃお前に勝てないってのはよー！」

叫ぶ俺に、ルストは何も言わずに俯き、震え、動かなくなる。

聖劍の力があれば、きつと俺なんかを殺すのはいとも容易いのだろう。

それだけの力があることは、俺なんかでも分かってしまふ。

ただどこいつは剣を抜こうとせず、ただ立っているだけだった。

知っていた、こいつが俺と戦うような真似をしたくないなんて知っていたけど、それでも。

「エンヴァ君と、戦いたくない」

「それじゃ俺は納得しない！本気のお前を倒さなけりや、俺はずっとお前に全部負けたままなんだ！お前に勝たなけりや、俺は——！！」

剣を構え、突撃する。それでも奴は聖劍を抜かない。

剣を振り上げ、奴の頭を叩き斬ろうとする。それでもこいつは、聖劍を抜かない。

ルストの頭を、剣が真つ二つに両断しようとして。

「勇者様！」

キン、と鉄同士がぶつかり合う音が響き真つ二つに折れた俺の剣が地面に突き刺さる。

眉目秀麗びやくしゆうれいな容姿をしたいかにも騎士然とした男が、勇者の前に立ちふさがり俺を睨む。

気づけば他にも美しいエルフの女と、竜人らしい男が俺を囲むように立ち、武器を構えていた。

三人の顔に見覚えのある、王都でふと見た新聞に書かれていた、勇者の旅に同行すべく集められたこの国屈指の実力者達。

勇者を守る、そのためだけに集められた英雄譚の登場人物。

「勇者様、お下がりを。こやつめは我々が」

「勇者様の首を狙う蛮族め。魔王軍の刺客ですか？」

「国の希望を刈り取らせはしねえ。勇者の首を獲るつもりなら、俺達を倒してからにすることだな」

勇者を守るために並び立つ、国最強の戦士達。ああ、畜生。

憎たらしいほどに、絵になるなあ。

「違う！あの人は僕の——」

「聖劍を抜かなかったな、ルスト」

折れてしまった剣を鞘に納める。他の奴らは不審気に俺を見るが、ルストは俺が逃げようとしていることに気づいたのか走り出す。

だが、俺の逃げ足はお前が一番よく知ってるはずだろう？

事前に購入しておいた転移石を割ると、体が青い光に包まれる。

「待って、待ってくれ！僕は君の！」

「じゃあな、ルスト。俺はもう」

最後の一言を、拒絶の一言を告げるのに一瞬の間が空いて。

「お前を親友とは思わない」

勇者になってしまった元親友に向けてそれだけ言って。

俺は転移した場所で、ただただ自分の醜さに怒り、泣いた。

その剣握るは誰のため

「……」

俺は、何をしているんだろうか。

あいつから逃げた後、故郷に帰ることもせず、それでいて何か行動を起こすわけでも無く、傭兵団に入り魔物を殺し金を得ていた。

魔王討伐の旅に出た勇者は既に幾つもの戦果を出し、魔王討伐の切り札として世界から称えられる存在となっている。

俺は強くなるために傭兵として増えていく魔物と戦い剣を磨き、団の中では最強と言われる程度には強くなっている。

一度も負けたことは無いし、十四歳の若さで俺程に強かった奴はいなかったらしくそこそこ噂になる程には俺は強いらしい。

団長からは稼ぎ頭として気に入られ、多分他の奴らからも強さは認めてもらっているだろう。

それでも、俺の心は満たされなかった。

今は魔物達との闘いの最前線となる砦で、国からの依頼を受け防衛戦に参加していた。

何度も戦場に参加し何匹もの魔物を殺し、その報酬として団長から酒を貰い真昼間から酒を飲む。

この異世界基準でも子供である俺の舌では酒の美味さなど感じることは出来なかったが、それでも酔っている間は全てを忘れることが出来た。

だが、今日だけはどうにも酔うことが出来そうにも無かった。

「おい、聞いたか？この砦に千を超える魔物の軍隊が攻めてくるって話」

「ああ、畜生魔物共め。本気でここを落としかかる気だな」

「何度も負け戦が続いてるだろうからあちらも必死なんだろうよ。ここが正念場だな」
「死ぬまでに一匹でも多く、魔物共をぶっ殺してやる！」

もうすぐ魔物の大群が攻めてくる、それ自体はそれほど大した問題でもない。

有象無象の魔物なんぞ幾ら来ようと負けはしない、俺一人が生き残るだけならとても簡単だ。

問題は、この砦は魔王軍との戦争に重大な意味を持つ砦ということだ。もし落とされ

でもすれば本国が受ける被害は計り知れない。

そしてここは既に何度も魔王軍の襲撃に合い、兵士達の数も少なく苦肉の策で雇い入れた俺達傭兵もあまり信頼はできないだろう。

ならば、国の王が下す選択は一つだ。

「おい、魔物共が来たぞ！とつとと武器持つて外に出ろ！」

「もう来たのか!?おいおい、あのでかい影はなんだ！」

「ドラゴンだ！でかいドラゴンがいるぞ！魔法を使える奴はドラゴンを殺せ！絶対にこの砦を守り切れ！」

この先で起こる展開を確信しつつ、ゆっくりと剣も手にせず外に出る。

もし俺が主人公であるならば、たった一人で魔物の軍勢を殺戮して称えられ、英雄としての第一歩を踏み出すかもしれない。

それを出来る程度の力量はあり、空を飛ぶ巨大な竜を落とすなど今の俺ならば容易いだろう。

だけど、そうはならないだろう。

「ん？おい、なんだあの光は。砦の天辺で、何かが光ってるぞ！」

「あれは、剣だ！剣の形をした何かが光ってやがる！すげえ綺麗だ……なんだありや」
「おい待てよ、ありやもしかして！」

どうやら、既に到着していたらしい国最強と謳われる四人の男女が光を背にして現れる。

眩い光を放つ剣を天に掲げた勇者は、閉じていた目を開き告げる。

『聖剣よ。清浄なる光を以て、我らの敵を打ち払え』

——聖剣が振り下ろされる

たったそれだけの動作で、砦に迫っていた100mを超えるであろう巨大な竜達は光に飲まれ消滅する。

骨すら残さぬその光が収まった後、残っていたのは10分の1にも満たぬ魔物達の残党のみ。

暫くの間起こった事態に理解が追い付かない様子であった魔物達は、すぐに悲鳴を上げ逃げていく。

「勇者だ！勇者が助けに来てくれたんだ！」

「すげえ、なんだありや!?一発であの大群を消し飛ばしやがった！」

「流石は、人類の希望！勇者と聖剣がある限り、人類の負けはねえ！」

その出鱈目な力を目にした傭兵や兵士達は次々に勇者を称え、崇める。

しかし勇者はそれに興味も無いように踵を返し、小さく何かを告げると空間に門が出現する。

「どうやらもうお帰りのようだ、勇者というのも忙しいらしい。」

「……ほんと、ふざけた力だ」

聖剣に選ばれただけで、これほどの力を得れるならばなんともまあ不公平な話だ。

努力や才能で辿り着ける領域などではない、神の御業のような絶対なる力。

それは勇者というよりかは、まるで――

「――あ」

勇者が、何かに気づいたかのようにどこかを見る。

今まで何の感情も無かったような目に焦りの感情が浮かぶ、まるで何かを探すように視線を彷徨わせる。

そしてその目がこちらを向く一瞬間に、俺はその場から消え去っていた。

☆○☆○☆

岩から離れた森の中を死んだように歩く。

改めて見た勇者の、聖剣の力が頭の中でこびりつき離れない。

伝承でも知っていたはずだった、勇者の力はあらゆる魔法や剣技を超越する物であると。

あんな魔物達などほんの数秒で片付けてしまうような、人類の枠組みを超えた何かである。

それでも、親友の姿を知っていた俺は考えてしまった。

例え勇者であつても、本気で鍛えればいずれたどり着けるのではないかと。

「無理に決まつてんだろ」

幾ら筋肉を鍛えた所で、あの閃光の前には意味を成さない。

幾ら魔法を覚えた所で、あの閃光を真似することはできない。

幾ら剣技を磨いた所で、あの聖剣と打ち合えるような剣は存在しない。

幾ら頑張つても、俺はあいつに敵わない。

「……」

何故俺は、勇者などと張り合おうとしているのだろうか。

所詮俺は前世の記憶を持っていて、多少剣に覚えがあるだけのクソガキだ。

世界の希望たる勇者と競おうと思うことすら不敬な卑しい身分だ。

それでもあいつに勝ちたいと思うのは、何故だろうか？

分らない、俺が何故あいつを超えたいと思うのか、自分でも分らない。

悔しさか？羨望か？怒りか？殺意か？

俺は――

「えーん、えーん」

「……子供が泣いている？ いや、それにしては……」

あまりにもその場に似つかわしくない音に、思考を止め周囲を見渡す。

子供の声を真似て相手を混乱させるという卑怯な魔物も多い、俺も何度か戦ったことがある。

しかし、これはあまりにもわざとらしすぎるし、声色も泣いているというよりかは笑っている。

こんなものではむしろ不意打ちの機会を逃し自分の位置を知らせるだけだ、一体何のために？

「えーんえーん、悲しいですね」

「ツツ!？」

いつの間にか俺の背後に立ち、俺の手を掴む小さい手を思わず振り払い、剣の柄に手

を当てる。

初めての経験だった、まったく気配を感じなかった。

生物は大なり小なり何らかの気配を示すものだ、例え気配を薄めようと、生物として最低限生きている者が放つ気のようなものは出すはずだ。

しかし俺の背後を取った何者かは音も気配もほぼ完全に消し、こうして触られるまで一切俺が知覚できずにいた。

一体どれほどの達人なのだと言がした方を見ると。

「いたっ!?ちよつと、弱小貧弱雑魚魔物の私に力を加えるなんてひどいじゃないですか！思わず転んでしまいましたよ、いたた」

「……魔物?」

「はい、魔物ですよ。と言ってもほんとに弱っちい、ありんこにすら負けちゃうような強さしかないですけどね!」

どれほどの存在かと思えば、目の前にいる自称魔族からは一切の危険さを感じなかった。

子供のような身長、病人のように青白い肌、ボロボロのフード。

雄々しく強い雄の魔物とは似ても付かぬ、儂げな少女のような格好。

魔物と相対した時に感じる威圧や魔力、肌がぴりつくような敵意などは感じられず、人形みたいに壊れやすそうな印象だった。

「魔物がこんなところで何を泣いている」

「あなたの事を思つて悲しんでいたんですよ。なんて可哀そうなんだ、と」

「喧嘩を売っているのか？それとも、自殺しに来たのか？」

「いえ、死ぬのは痛いし怖いし勘弁です。ただ、あなたと私は似ていると思つたんですよ。それであなたに同情して泣いてしまつたんです」

「ふざけるな、俺は魔物等ではない。あまり変なことを言っていると、この場で叩き切るぞー！」

「種族のことなんかじゃないですよ。それに、私にとって同じ種族の奴らなんて皆、私とはまるつきり違う別の生物です。私は特別、オンリーワンです。悪い意味で、ですけどね」

「つまり、他の奴らに比べても特別弱いと？」

「そうそう。けど闘いの強さに関してはあなたと私じゃ正反対ですね。だってあなたは、人間の中でも特別強い。いずれ勇者さえも超えかねないほどに」

「ほざけ。鍛えた程度で届くのであれば、俺は今頃こんなところに来ちゃいない。幾ら鍛えた所で無駄なのさ」

かつて幾人もの剣豪、賢者、英雄が歴史に名を記したが、その中のただ一人として聖剣を持つた勇者に勝てはしない。

憶測ではなく歴史が証明している。魔王が現れる度に勇者は現れ、そしてその度に勇者ではなく自分が魔王を倒そうとする人間が現れた。

それらは当たり前のように魔王に傷一つすら与えられず死んでいった。

聖剣を持つ勇者にしか魔王が倒せない理由は魔力だ。

魔王にはどんな攻撃であろうと防ぐ最強の盾にして全てを滅ぼす銚、滅びの魔力を鎧として纏っている。

そして聖剣は、その滅びの魔力を正面から吹き飛ばす程の聖なる力を小さな刀身に蓄えている。

当然魔王の魔力すら打ち破る聖剣の力に対応できる人間などいない。

故に、今も昔もこれからも、人類最強は勇者であり、それらは決して不変であろうと言われていた。

だから今更俺が努力したところで、あいつには勝てない。

「そうですか？けどその割には顔が歪んでる。今でもまだ、人類最強の勇者様に勝ちたいと思ってるんじゃないですか？」

「……」

「ほら、また揺れ動いてる。あなたは届かないはずのものに手を伸ばしたいのでしょうか？分かりますよ」

「お前に何が分かるって言うんだ！」

頭に血が上り胸倉を掴み、苦しそうにしながらも笑みを浮かべる魔物を睨む。

俺の心を見透かしているかのような態度のこいつに腹が立ち、無抵抗なのを良いことに斬り殺そうかと考えて。

「怖いんですよね、必要とされなくなるのが」

頭が、真つ白になる。

反論を出そうと口を開けても、そこから言葉は出てこない。

「誰からも必要とされず、意味のない人生を送るのが怖いのでしょうか？」
「何を、言っている」

「私はずっとあなたに目をつけてました。あなたが旅をしている途中に見かけたあなたとあなたの友人のことを、ずっと見ていました。勇者になれなかった、選ばれなかった者、体と技は至高の領域に達しているというのに、心はこの世界の誰よりも弱いあなたのこと」

ニコニコとほほ笑む目の前の少女に、思わず掴んでいた胸倉を離す。
彼女は小さく咳き込み、苦しきで滲んだ涙を拭い取って言葉を続ける。

「分かりますよ、分かりますとも。孤独は怖いですよ？ましてやここはあなたの価値観が通じない未知の世界、一人ぼっちで進む暗がりほど怖いものなんてありません」

「お前は、どこまで知って……」

「私とあなたは同類であると同時に同郷です。私も前世を持つ、あなたと同じ転生者。違いは魔物に転生したことと、魔物なのに人間よりも弱い体と才能を持つてしまったこと」

「俺と、同い年」

「はい、あなたと同じですよ。弱いのが故に誰とも一緒にいられなかつたあぶれ者。誰か
らも必要とされなない一人ぼっち」

少女は俺に近づき、ぎゅつ、と小さい体で抱きついてくる。

しかしその肌からは熱を感じられず、少しでも触つてしまえば壊れてしまいそうな、
氷のような冷たさだった

「あなたも薄々感じていたでしょう？この世界の人たちは強さを尊び、弱きに目を向け
ることは無い。今あなたの周囲に誰も仲間がいないのは、あなたが弱いから。どこにも
あなたの居場所は無く、あつたと思つても薄氷のように罅割れ壊れていく。あなたの村
の子供達も、あなたの親友のあの人も、あなたの今いる傭兵団も。皆強いあなたを求め
てる。弱いあなたは求めていない」

苦い思い出が脳裏の浮かぶ。

子供の頃は強いからと皆から慕われ、大人からも褒められて、皆俺と遊びたいと、助
けてほしいと言つてくれて。

自分でもこの世界では誰かのためになれるのだと、そう思っていた。

けれど、ある日現れたちっぽけな弱い魔物に、それらすべては壊された。子供達と一緒に遊んでいる時に現れたそいつに、俺は怖くて腰抜かして、一目散に逃げ出して。

大人を連れてきたときには、すでにそいつは他の子どもの手によって殺されていて。殺した奴はヒーロー扱い、俺は臆病者として誰からも構われなくなつて。

その時に、俺は故郷の村での居場所を失つた。

その後に出会つた、俺と同じような一人ぼっちのあいつ。

話しかけたらとても嬉しそうに笑うあいつに、俺は救われた気がしたんだ。

「だから自分の力を褒めてくれるあの人と一緒にいたのでしょうか？自分が必要とされていることが嬉しくて、役割があるのが嬉しくて」

「……俺、は」

「けどあの人は勇者であり、あなたの助けなんて必要なかった。あなたがいなくても生きていける、あなたの居た場所には既に他の人が居座っていますね。今いる場所として、あなたが本当は臆病だと知れば、きつと離れて行きますよ。だって危険を前に逃げてしまふような奴に背中なんて預けられません。そして捨てられた後も、あなたはまた同じようなことを繰り返すのでしょうかね」

「やめろ……やめてくれ」

「ほら、現実から目を背けるような弱い人、誰からも必要とされませんか？ 頑張れ頑張れ！ここで立つて私を殺して、また傭兵団で頑張らしましょう！大丈夫、彼らと同じようにすればあなたは捨てられませんよ！命の危機があつても怯えず逃げず剣を取り、負け戦だと分かつていても文句ひとつ言わずに命を捧げましょう！そうすればきつと、あなたが死んだあと仲間はあるあなたのことを覚えていてくれますよ！」

「できない……そんなこと、できるわけが無い……」

「けどできないければ誰からも覚えられません。誰からも大切な人だと思われませんか。誰からも必要とされませんか。——それでもいいのですか？」

「いいわけ無いだろうおが!!」

最後の一言で、せき止めていた心の枷が外れてしまう。少女の抱擁を振り払い叫ぶ。出しちやいけないと分かっていた、ずっと心の奥底で眠らせていたそれが吐き出される。

「けどうしろつて言うんだよ！死ぬのが怖いなんて当たり前だろ!?なんで皆揃いも揃って命賭けられるんだよ馬鹿じゃねえのか！死ぬのは怖いんだよ、目の前が真っ黒に

なつて何にも無くなつて、自分が消えて行く感覚なんてもう二度と味わいたくないくらいに怖いんだ！幾ら力が強くても、自分を殺せるかもしれない奴になんで平気で立ち向かえる!!」

俺はこの世界で一度だつて、一人命を懸けた闘いなんてしたことは無かつた。

初めて魔物を倒した時だつて、ガタガタ震えてみつともなく戦つて、結果的には傷一つつかずに倒せたのに、肉を抉る感覚が忘れられずにいて。

それでも、ルストと一緒に震えも止まつて守らなくちやつてなつて、俺もあいつに助けられながら旅をして自信をつけることもできて。

ようやく聖剣の元に辿り着いて、これからも一緒に助け合いながら魔王を倒して伝説になるんだと思つて。

そして、俺は聖剣には選ばれず、あいつが聖剣に選ばれた。

「ようやく俺がすべき役割を見つけられたと思つた！主人公みたい活躍できると思つてた！守るべき存在が出来て、夢が叶つて！憧れてた何かになれると、こんなに苦しい思ひしてきたんだから報われると思つてたんだよ！聖剣を抜いて、魔王を倒して、皆から認められて……！なのに、全部全部全部、俺が欲しかつた声は全部あいつに向けられ

てる!!」

あいつが知識で俺を助けて、俺はあいつを力で助ける。

そんな関係が、一緒になんでもできるような関係が、ずっとずっと続くと思ってた。

勇者になつてからも関係は変わらず、魔王との闘いであいつに助けてもらつて魔王を倒して、一緒に皆に称えられて。

「あいつが力まで身に着けたら、俺は何をすればいいんだ？俺にあつてあいつに無かつた物は、他に何があるんだ……？」

前世でもそうだった、俺は何にも出来なかつた。

皆俺の手助けなんて必要無くて、俺だけ皆から助けてもらつて、いずれ呆れられ嫌悪され何もできずに忘れ去られ。

この世界でようやく皆にはないものを見つけて、そしてその役目さえ奪われて。

「俺は一体、どうすればいいんだ？」

「では、私に乗り換えませんか？」

彼女の小さい手が俺の手を優しく包む。

少し叩けば壊れてしまうような硝子のようないや、真実硝子のような手に包まれ、俺は思わずビクリと震える。

魔法で隠されていた肌が露わになり、魔物の真の姿が露わになる。

水晶で出来た身体、光を反射する髪、虹色の瞳。

おおよそ人間とも魔物ともかけ離れた透明色の少女は、これまで見たあらゆる全てよりも美しかった。

「私の名はソフィート。魔王の第十二子であり、滅びの魔力を宿せぬ魔力を拒絶する身体に産まれた出来損ないの娘」

「魔王の……娘？」

「ええ、これでもあなたよりずっと年上ですよ？ですけど、見ての通り私の身体は脆い。魔法には絶対なる耐性を持つてる代わりに、転べば罅が入る程に」

そう言いながら、背中を見せる。そこには僅かながら小さな罅が痛々しく残っている。

それが最初に転んだ時のものであることはすぐに察しがついた。

「こんな体で更に魔力も使えませんので、私はどんな奴にも勝てません。箸より重いものなんて持てませんし、多分小動物にも負けます。ほら、ほら」

彼女はニコリとほほ笑むと。

「あなたが求めてた、理想の守られ系ヒロインですよ？」

それは、きつと俺が求めていたものなのだろう。

結局のところ、俺はきつと彼女のような存在を求めていたのだ。

都合よく自分に守られ、笑いかけ、そして自分を求めてくれる存在を。

「私にはやりたいことがあります。けれどそれを私がやり遂げるにはあまりにも困難で、誰かの助けが必要になります」

その言葉は甘い蜜のように心を溶かす。

「魔物は強い者に従い、私のような弱者には見向きもしません。人間は魔物である私を殺そうとするでしょう。私を助けてくれるかもしれない存在は、『あなたしかいないんです』」

この魔物に、ソフィートに従うということは人間を裏切るということだ。

それはかつて自分が目指した勇者というものにはあまりにも遠い行為だ、だけど。

「あなたが私を助けてくれるのであれば、私はあなたに居場所を。そして、聖剣を打ち破るための力を預けます」

「聖剣を打ち破る、力?」

「勇者に勝ちたくありませんか? 最強になりたくはありませんか? 自身の存在意義を取り戻したくはないのですか?」

「……」

「であれば、私に仕えてください。私を助け、そして私に導かれてください。あなたはただ戦うだけでいい。難しいことなんて考えなくていい。ただ私のために剣を振るえば

それでいい」

「俺の剣が……あなたの役に立つのか？」

「いいえ。あなたが私の剣になるんです。もし私に仕える気があるのであれば、私の欠片を飲みなさい。そしてあなたは今日よりこう名乗るのです。人間エンヴァではなく、勇者の親友エンヴァでもなく。私に、魔王の娘に仕える魔剣士エンヴァと」

魔物の身体を食べてしまうと、その人間は魔物になってしまう。

古いおとぎ話の話であり、実際に魔物になることは無い、ただの言い伝え。

魔物の肉は美味しくなく、腹を壊すからと先人が子供に食べさせなくするために作っただけの創作。

けれど、彼女が文字通り身を削って出したであろうその欠片を飲めば、俺はきつと本当に人間ではなくなるのだろうか。

身体は人間であろうと、心は人間を裏切り堕ちた魔物となるのであろう。

それでも答えは決まっていた。

彼女の——自身を必要としてくれた魔物の姫に傅き、答える。

「誓おう。俺はあなたの剣になろう。あなたが俺を必要としてくれる限り、俺はあなた

のものだ」

「ならば私も誓いましょう。あなたが私を助ける限り、私はあなたの居場所であり続けると」

少女の口が怪しく歪み、三日月のように吊り上がる。それを見て尚、俺はこの方の傍にいたいと思ってしまうた。

ルストに勝つため、そして己の居場所を得るために。

俺はその日から、世界のためではなく彼女のために剣を握ることを誓った。

君と僕は友達

『ああ、なんておぞましい。私達の子供が、災厄を引き起こすとされる忌子だなんて！』
『だが、忌子は高く売れる。こいつが大きくなった時に売ることができれば、俺達は一生金に困らない』

私は売られるために育てられたらしい。

五歳になったときから親が何もくれなくなったので、自分で食べ物を探しに行っていた。

虫やキノコは不味くて、何度もお腹を壊して死にたくなつた。魔物は不味いけど、一杯食べられたから好きだった。

『あれは忌子だから、近づいちゃダメよ？ 周囲に災厄をもたらすとされる呪いの印を持っているの』

『忌子め、俺達の子供に近づくんじゃねえ！ 次話しかけに来たらその程度じゃ済まさないぞ！』

楽しそうに遊んでいる子達が羨ましくて、ぼくも入れてよと話しかけたら気味悪がられて駆けつけてきた大人達に棒で叩かれた。

何度も何度も叩かれて、血だらけになって逃げだした。

自分を殺そうとするあの目が怖くて、けど皆が羨ましくて眩しくて。

話しかけることも近づくことも出来ずに、皆が遊んでいる広場の片隅で座ってた。

『な、なあ！お、おま、お前も一人なのか!？』

『え……?』

急に話しかけてきたあの人は、とても変な子だった。

魔物が現れた時、他の子は皆怯えて何もできなかったのに、一人だけすぐに大人を呼びに行くって言って行動した。

結局その時は私が一人で魔物を倒したけど、私と違って誰かを頼れて皆を守るために何かをできる凄い人だと思った。

けど、その日からその子が誰かと遊んでいるのを見たことが無かった。

その子はとても緊張している様子で、私に話しかけてきた。

喋り方がおかしくて、少し笑ってしまったらその子は顔を真っ赤にした。

『……ふふっ!』

『な、なに笑ってんだよ!?!』

『えと、ごめん。けど、私と喋らない方がいいよ? 私は……忌子だから。私と関わったら、君も嫌われるよ?』

自分でも、忌子が何なのか分からなかった。

けど、私が皆に叩かれたりする原因はそれのせいで、私と関わると皆不幸な目に合うって言われていることだけは知っていた。

だから、私が忌子だと知ってその子もすぐに離れて行くと思ってた。

『忌子?なんか知らないけど、お前何か悪いことしたのか?』

『え……?』

『人から嫌われるような悪いことしないと、誰かに嫌われるようなこと無いだろ?』

『……』

何か悪いことをしたか、と聞かれて私はどう答えようか迷った。

親には存在自体が罪だと言われて、大人達には子供に近付くと言われて、動物や魔物を殺して食べた。

皆から気味悪がられて、どうにもできないからそれを受け入れてた。

けど、私は悪いことをしてただろうか？

『何もしてないなら、そんな渾名どうでもいいだろ。自分が悪いことしてないって思うなら胸張れって！それにこの村の奴ら嫌な奴ばっかだから、遊んでて楽しくねえんだよな！』

『え……？あの、けど』

『遊び方知らねえの？なら俺が教えてやるよ！とりあえず名前教えろよ！俺の名前はエングアな！人から羨望されるような人間になるように、って意味でつけられたんだってよ。お前は？』

『……忌子ってしか呼ばれてないから、名前分かんない』

『はあ？』

親からはずっと忌子とだけ呼ばれて、他の人から名前なんて聞かれたこと無かったか

ら、名前を答えることが出来なかった。

それに、誰かの名前なんて初めて聞くのも初めてで、
たった数分で、色んな初めてを体験した。

『なんだそりゃ、呼びづらいじゃねえか。……あー、それじゃお前の名前が分かるまで、
仮の名前でもつけておくか?』

『仮の名前?』

『まー、そうだなあ。どうせ親に聞けば本当の名前分かるし、ルストとか?特に意味ある
名前でもないけど』

『……ルスト』

何度もその名前を繰り返し返し呼んで、嬉しくて思わず口角が上がってしまう。

親からは気持ち悪いからやるなど言われた笑い方をしてしまったけど、その子、エン
ヴァ君はそんな僕を見て同じように笑った。

『なんだ、お前俺と同じような気持ち悪い笑い方してるな。やっぱお前俺と同類だな!
同じぼっちだし!』

『ルスト、エンヴァア……。ルスト、エンヴァア……。ふふっ』

『いつまで笑ってんだよ、日が暮れちまうぜ？ほら、俺友達出来たらやりたかった遊びあるんだよ！缶蹴りって言ってな？』

『うん！うん！同類……。友達……。ふふふっ！』

『おかしな奴だな』

ずっと一人だと思っていた私に、初めて仲間が、友達が出来た。

世界で一人だけだと思っていたのに、私は初めて他の人を見つけることが出来た。

彼にはなんてことなかったかもしれないけど、私にはそれがどんなことよりも嬉しかった。

初めて、自分が自分であつてよかったなんて思えた。

それからずっと、私とエンヴァア君は毎日のように一緒に遊んだ。

一緒に川魚を釣ったりしたし、エンヴァア君が考えた面白い遊びは毎日のようにやっても飽きなかった。

あと今になって思えばすごくやらかした思い出もあつた。

『そういえば、お前って男と女どっち？胸が小さくてちよつと分からん』

『……? エンヴァ君ってどっちなの?』

『え、なんでそこで俺に聞くの? いやまあ男だけ』

『それじゃあ、私はエンヴァ君と仲間だから男だね!』

『お、おう? それじゃあ、お前のその喋り方変えた方がいいんじゃない?』

『え、なんで?』

『男なのに私なんてしゃべり方、オカマっぽいし。僕とかにした方がいいんじゃない?』

『なら、俺にするよ! エンヴァ君と同じ喋り方だし!』

『それだとなんか分かりづらいし、僕にしとけ僕に!』

『え〜?』

後から知ったことだけど、僕は女の子だったらしい。エンヴァ君の両親に性別に関して教えてもらったときは顔から火が出る程恥ずかしかった。

結局エンヴァ君にそのことを伝えられなかったけど、彼が自分と同じだと思ってくれるのが嬉しかったからそのままにしておいた。

エンヴァ君の両親は厳しいけど優しい人で、エンヴァ君はよく口うるさいって言うけど、エンヴァ君のためを思って叱ってくれてるのが傍目から見てもよく分かった。

それに、僕のことを忌子として見ずにルストとして見てくれた。とても居心地が良かった。

僕がエンヴァ君の家族になれた気がした。

『こら、エンヴァ！ルストちゃんみたいに行儀よく食べなさい、みつともないわよ！』
『うるせえなあ、食べ方くらい自由でいいじゃん！』

『ルストちゃんなんてたった数日でスプーンの持ち方覚えたってのにあんたは！ほら、ちゃんと食べれたらおやつにワッフル作ってあげるから』

『ほんとか!? よっしや、見とけよお！』

『ハハハ、騒がしくてすまないねえルストちゃん』

『い、いえ！……むしろ、とても楽しいです！』

料理を教えてもらったり、片付けのやり方や礼儀作法、薬草の見分け方、色んなものを一緒に勉強した。

本当に、本当に楽しい日々だったんだ。

『ルストちゃん、エンヴァは色々とそそっかしい子だから、支えてあげてね？』

『ルストちゃんみたいな子がいれば、エンヴァも安心だ!』
『——はい! エンヴァ君とは、ずっと友達で仲間です!』

十三歳になる時に、親が奴隷商人と話をしているのを聞くまでは。

『ふむ、十三の忌子、それも女ですか。容姿に関しても申し分なし。素晴らしい、これなら金貨三百枚は固いですな!』

『おお、そんなに高値で! 今まで育ててきた甲斐があったというもの。それで、引き渡しは何時に?』

『三日後に街からの使いが来ます、そこで受け渡しを——』

両親が僕を愛してくれる日が来るんじゃないかと希望を抱いていた。

エンヴァ君のお父さんやお母さんを見て、あの人たちもいつか、私のことを愛してくれるんじゃないかと勝手に信じて。

それを裏切られた気がした。

気が付けば、周りには両親だったものが転がってた。

家は血みどろで、血がついていない場所なんかなかったはずなのに、私の手は汚れて

いなかった。

両親の死体はとても人間がやったような殺し方ではなく、魔物でもこんなことはしないというくらいぐちゃぐちゃになっていた。

その時私は初めて、忌子の意味を理解した。

親を殺したというのに、私は悲しいとも思えずに淡々と死体を森に投げ入れた。

その後家の中を漁って、使えそうなものを持って家から出た。

家の中には一枚のメモが、恐らくは自分が生まれる前につけるはずだった名前が書かれた紙が親だった奴らの部屋から見つかった。

僕はその紙をすぐに破いて窓から捨てた。

それから僕はフラフラといつもエンヴァ君と遊んでいた川に向かった。

真夜中だったので当然エンヴァ君はいない、それでもそこにいればほんの少しだけ落ち着くことが出来た。

今でも手が自分の両親を殺した時の感触を覚えている。

これからどうするか、ぼんやりと考えながら座っていた、その時だった。

ガサリと森の方から音がして、魔物が唸り声を上げながら現れた。

僕に対して尋常じゃない殺意を向けていて、以前広場に現れて、私が殺した奴と似ているな、となんとなしに思った。

殺意を向ける魔物に対し、それでも私は動くこともせず、それを受け入れようとした。私みたいな奴にはお似合いの末路だと、そう思つて。

『ル、ルストから離れろテメー！』

誰よりも見知つた、誰よりも大事な人の声が、エンヴァ君の声が聞こえた。

エンヴァ君はガタガタと震えて、目尻に涙を溜めながらも長い棒を持つて魔物と対峙していた。

子供が魔物と戦うにはあまりにも貧弱なその棒切れで、エンヴァ君は襲い掛かつてくる魔物と戦つた。

僕ならすぐ殺せただろう、エンヴァ君が戦う必要ななかつたはずだ。

けれど。

『か、勝つた……？勝つた、勝つたぞお！ワハハ、どうだルスト！これがエンヴァ様の実力だあ！』

エンヴァ君が震えて怯えながらも、必死に誰かを、僕を守るために戦っているのを見

て。

おとぎ話に出てくるような剣技で、魔物にトドメを刺しているのを見て。

どうしようもなくそれが輝いているように、おとぎ話の主人公のように見えてしまった。

自分のためにしか誰かを殺せず、誰かを守るために戦ったことも無い僕にはその光景がとて眩しく見えた。見えてしまった。

僕に希望なんて、輝きなんて無いのに。

『……すごいね、エンヴァ君。僕には、こんなの出来ないや』

『だ、だろ!? そうだろ! やっぱ俺って才能あるよな!』

エンヴァ君は初めて倒した魔物に一通り喜んだ後、ガサゴソと鞆から何かの本を出した。

その本は勇者の聖剣について書かれた本で、いつもエンヴァ君が読んでいた、有名なおとぎ話だった。

僕はあんまり好きな話じゃないのに、エンヴァ君はこの本が好きだった。

『な、なあ。俺、勇者になれるって思ってるとか言ったら、笑うか?』

『……ううん、笑わないよ』

『そ、そっか! 実はよ、俺お前を誘いに来たんだ! 一緒に王都に行かないか!』

『王都に?』

『おう! 俺は聖剣を抜くのに挑戦してみてえんだ! だから親にそれ言ってみただけど、絶対行くな、お前にや無理だとか言われたんだぜ!? 酷いよな、まったく! だから、俺母さんと父さんに内緒で行こうと思ってるんだ! そんなで勇者になって帰ってきて、あの二人を驚かせてやるんだよ!』

『……』

故郷の村から王都に行くまでの道はとても険しく、馬車も転移魔法も使えないような人達が行けるような場所ではない。

村を出て街に行くのすら危険だというのに、子供を連れて行けるような旅ではないだろう。

もし辿り着けたとしても、聖剣を抜けなければ徒労になるし、自分の大切な子供をそんな危険な旅に出したくないのは当然のことだ。

ましてや、十三歳の子供二人で辿り着ける可能性は果たしてどれほどのものか。

エンヴァア君のためを思うなら、断るべきだったのだろう。けれど。

エンヴァア君の希望に満ちた、年相応の笑顔を見て、私はこう答えてしまった。

『……エンヴァア君なら、きつとできるよ』

『だよな!? よっしや、自信出てきたぜ!』

エンヴァア君の親を裏切ることであると知りながらも、僕は彼の言うことを肯定した。

死ぬことだつてあり得るのに、聖剣を引き抜けなければ無意味な旅になると分かっているはずなのに。

僕が彼を止めなければならぬと分かっているのに、私はそれをしなかった。

『けど、僕は忌子だよ? きつと他の街に行つたつて、僕と一緒にだと苦労しちゃうかもしれない』

『なんだ、まだそんなこと言ってるのかよ! 勇者の仲間かつ親友になりや、そんな変な肩書無くなるつて、安心しろつて! それに、もし旅の途中でそんなこと言う奴がいたら俺がぶん殴つてやる! なんせ俺は強いからな! それに——』

『俺とお前が揃えば、どんな困難だって打ち破れるだろ！』

自信満々に、まるで当然のようにそう言う希望に満ちた笑顔のエンヴァ君。

その自信は、その希望は、王都に着いた時に打ち砕かれた。

僕はいつも後悔する。

なんであの時、僕はエンヴァ君を止めなかったのか。

きつと彼を止めれば、あんなことにはならなかったはずだ。彼は誰かに肯定されないと自信を持ってない人だった。

だから、僕がそれは無理だと言えば、簡単に諦めてくれただろう。それでも僕はそれをしなかった。

彼が勇者になった姿を見たかったから？

彼と一緒に旅をしたかったから？

両親を殺してしまって、村から逃げ出したかったから？

「違うだろう？」

エンヴァ君が聖剣を抜こうとしている光景が見える。

幾ら頑張ろうと抜けず、希望を打ち砕かれた姿を一番近くで見ている誰かがいる。口だけでは心配しつつも、その内心で歓喜していたおぞましい何かがいる。

希望が砕かれた彼の姿を見て、かつて親に裏切られた姿を重ねてしまった誰かがいる。

悲しんでいるふりして口を押えている私がいる。

嬉しさを抑えきれない、親に気持ち悪いと言われた笑みを隠している私がいる。悲しみではなく、嬉しさの涙を流している私がいる。

「お前が後悔してるのは、止めなかったことじゃないだろう？」

ああ、そうだ。私はこうなることを望んでいた。

だって、あの時私とあなたは同じじゃなかった。

私は希望を失って、あなたには希望があつて。

私にはあなた以外なくて、あなたには私以外があつて。

だって、それじゃあ、あなたがそんなに輝いていたままじゃ。

「ああ、気持ち悪い」

私とあなたが、同じじゃなくなるでしよう？

私とあなたが、友達じゃなくなるでしよう？

あなたが友達になってくれた僕は、あなたと同じだから。

あなたが同類だと言ってくれた私は、あなたと同じだから。

それなら、同じことを経験しないと。私だけじゃズルいでしょ？あなただけじゃズルいでしょ？

私が希望を無くしたように、あなたも希望を無くさないで。

私にはあなたしかいないように、あなたには私しかいなくならなきや。

大丈夫だよ、大丈夫。あなたが希望を無くしても、私があなたにしてもらったようにちやんと救ってあげるから。

君が生きる意味をくれたように、僕も君に生きる意味をあげるから。

ずっと二人でなんとかなるって、この旅で分かったでしよう？

あなたと私が揃えばどんな物だって乗り越えられるって分かったでしよう？

勇者なんかなくていい、私と一緒にいてくれるだけでいい。

他の人なんて知らない、誰に馬鹿にされたって、あなたが私を褒めて、私があなたが褒めてればいい。

私とあなた以外にこの世界で仲間はいらない、友達はいらない。

名誉なんていらない、他人からの評価なんかいらぬ、勇者なんていらない、聖剣なんていらない。

あなたと私が一緒に買った偽物で十分だから、本物の聖剣なんていらないでしょう？
君と僕はずっと一緒に、ずっと友達、ずっと似た者同士。

ああ、私達はようやく、同じになれた！

はずだったのに

『話しかけてくんよ、主人公』

主人公って、何？

『勇者様と田舎のガキですか？馬鹿言うなよ』

僕と君は、同じだよ？

『聖剣を抜いた勇者様と、棒切れ持っただけのガキンチョが戦えば、どっちが勝つかなんて誰でも分かるだろ?』

やめてよ、僕と君が違うようなこと言うの、やめてよ

『じゃあな、ルスト。俺はもう』

やめてやめてやめてやめてやめて

『お前を親友とは思わない』

その言葉だけは、言わないで

「勇者様!」

ハッ、と目を開き、僕を覗き込んでいる傷一つない綺麗な顔をした、プリプリと怒る少女——エルフの魔導士リージエは、馬車の中でうたた寝していた僕を覗き込んでいた。

そんなリージエの様子に苦笑している人間の騎士ジャステイト、やれやれと肩を竦めながら食事を取っている竜人の拳闘士イヤル。

勇者になった時からずっと共に戦ってきたこの三人と共に、僕は魔物の大群が発生したと報告を受けた廃村に向かっていた。

「まったく、いけませんよ？勇者様とあろうものが、目的地に向かう途中で寝てしまおうなんて」

「……ああ、うん。ごめんごめん。懐かしい夢を、見てたんだ」

「夢を見るのはいいが、襲撃に遭った時はちゃんと起きてくれよ？あんたは俺らの最高戦力なんだからな」

「分かってるさ。迷惑をかけてごめんね？」

「こら二人とも。勇者様は連日の戦闘で疲れているのだ。こんな時くらい身体を休めていても良いだろう。勇者様、見張りは我らにお任せを。あなたは身体をお休めになつて

ください」

「……そうも言ってもらえないさ。丁度寝起きの相手には良さそうな奴らが来てるみたいだしさ」

馬車の外から感じる魔物の気配に三人も遅れて気づき、それぞれが武器を構える。

いつものような雑魚とは違う、強力な魔力を持った気配。

その魔物は馬車に向け赤黒い魔力の塊を放つが、その程度でやられるほどこの三人は弱くない。

攻撃はリージェの作った障壁に難なく防がれ、すぐに皆が反撃に転じる。

「皆さん、私が攻撃を防ぎます！皆さんは攻撃を！」

「今回は結構骨のある奴だ、気をつけろよ！」

「この魔力……まさかとは思いますが、滅びの魔力か？」

「それって魔王のやつ？けど、それにしても弱いけど」

「滅びの魔力は魔王の血を持つ子にも受け継がれると言います。恐らくはその類かと思いますが、この程度であれば勇者様の聖剣も必要無いでしょう。我らだけで十分です」

「そっか。滅びの魔力を見るのは初めてだしね。僕がすぐ決着つけちゃうと何も分から

ないから、暫くは皆に任せるね。三分経ったら僕が出る」

「了解しました。では、行ってまいります！」

私が戦うとすぐに決着をつけてしまうので、馬車の屋根に飛び乗って空を飛ぶ魔物の姿を観察する。

魔物は荒い息で赤黒い魔力を纏っているが、奇妙なことに既にかかなり消耗しているようであり、その表情から余裕の無さを伺えた。

「問おう！ 貴様らは聖剣を持つ勇者の一行か!？」

「……うん、一応そういうことになってるよ」

「我が名はマモン！ 魔王の第四子に産まれた、滅びの魔力を持つ者なり！ 勇者よ、お前に勝負を挑む！」

「魔王の息子が、なんでこんなところで僕らを襲うのさ。それに、随分と余裕がないようだけど何があったのかな？」

「黙れ！ 我は貴様を殺し、戦果を挙げなければいけぬのだ!!」

滅びの魔力が形を成し、数十を超える魔力の槍となりその場にいた全員を襲う。

地面に命中した槍は爆発し、クレーターを作る程の威力を持つ、そんな攻撃をこれ程の規模でできる時点でこの魔物は強いのだろう。

こいつ一匹街に放り込めばものの数分で壊滅させられる程の危険度だ、しかし。

「弱つちいなあおい！」

「なっ……!?!」

イヤルが飛び上がり、魔力を纏う拳の連打を放ったことにより大量の槍が消え去る。

魔力を身体に纏わせやすい特性を持つ竜人だからこそできる、超スピードと超パワーの単純なごり押し。

それでも普段であればそのまま本体を仕留めるイヤルが舌打ちしながら迫りくる槍を躲しているあたり、やはり滅びの魔力とやはらは一筋縄ではいかないのだろう。

「おいジャステイ、あの魔力は面倒だぜ。鎧とか貫通して空間ごと消滅させるみてえだ、当たればただじゃ済まねえ」

「問題は無い。魔力を纏わせた拳で打ち砕ける程度であれば、私の盾で防げる」

「んじゃ、時間はかけちまうがなんとかかなりそうだな。……ま、今回は諦めるとするか

ね」

しかし、その程度の強敵であれば何度も潜り抜けてきた猛者たちだ。

一対一ならともかく、三人が力を合わせて戦えばマモンに負けることはまずないだろう、それ程までに力量の差がはつきりしている。

本気でこちらを倒すつもりであれば夜まで待つて夜襲なり、誰か一人になった時を狙う等の手段が必要だったのだろう。

「……何を焦ってるんだろ？」

マモンはまるで何かに怯えるように、一心不乱に私達に向け無造作に魔力を放つ。

勿論それだけでもかなり脅威となるが、他にも色々と手段があるはずなのに正面から勝負を挑んできた理由が分からない。

何かそうせざる得ない理由があったのか……？

「ふん縛って聞いてみるかな」

時間になったので、剣を抜いて立ち上がる。

それに気づいた三人が武器を下ろし、巻き込まれないようにすぐにその場から離れる。

「あーあ、タイムアップかよ」

「しょうがないですよ。こんなところで消耗するわけにもいきませんから」

「鍛錬不足か。不甲斐ない」

魔王の息子、マモンは輝く聖剣を見て冷や汗を流しながらも退く気配は無い。

普通ならこの時点で怯えたりするものだけど……何かそれ以上の恐怖で抑圧されている？

だとしたら、一体どんな奴が魔王の息子に恐怖を与えている？

「う……うおおおおお!!」

「叫ばなくていいよ。もう終わってる」

「……はっ」

剣を鞘に入れ、翼がもがれ地面に落ちたマモンに近付く。

暫くの間茫然としていたマモンだが、自分の状況に気づき絶叫しながら、全力である魔法を唱えるため詠唱を始めた。

「魔物はこういうところが楽でいいね。ちよつとやそつとじゃ死なないから、多少乱暴に扱っても良い」

だがその詠唱は僕に頭を蹴られたことで強制的に中断され、逃げようと足掻くマモンの頭を踏みつけ固定する。

「それじゃ、教えてもらえるかな？君が何故こんなことをしたのか、そして君の後ろにいる何かは誰なのかを」

マモンは暫くの間足掻き続けるが、無駄だと分かったのか歯ぎしりをしながら負の感情をありつたけぶち込んだような声色で話す。

「おのれ、おのれおのれおのれえ!!何故我がこんな目に合っている!?!我は魔王の第四子、

滅びの魔力すら使えぬ出来損ないにこんな……!!」

「出来損ない？」

「全て、全て全てあの魔剣士のせいだ！あの魔剣士がいなければ全ては順調に進んでいたのだ！我が地位を追われることも無く、魔王の後継者の一人として存在できたのだ！！」

「おい、要領を得ない話はやめろ。もつと明確に」

「どうせ我は死ぬ！あの魔剣士に殺されてな!!ハハハハハハ！ほら見るがいい！もうすぐそこに居るぞ！醜き隻腕の魔姫、出来損ないの妹！その右腕が！」

ストーン、と間抜けにも思える音が響いて、マモンの首が切り離される。

その後に感じた一瞬の殺気に身を震わせて、咄嗟にその場から離れた瞬間、マモンの身体が細切れになり地面に落ちる。

そしてそれを実行した何者かは、マモンだったものを見下しながら僕を見る。

黒い甲冑に身を包み、透き通る透明な剣を持つその騎士を見て、僕は何故だか今まで感じたことのないような悪寒を感じた。

まるで、取り返しのないつかない何かを見てしまったような。

「……君は、一体」

「勇者ルスト」

心底冷たい声で僕の名を呼ぶその騎士は、剣を僕に構え、言った。

「貴様は、俺の敵だ」

超高温の炎の球が、避ける隙間等ない拳の連打が、殺気を隠そうともしない刃が、三方向から騎士を襲う。

しかしそれを一瞥もせず振るった剣はそれら全てを返り討つ。

火球は跡形もなく消え、拳は血を吹き出し、刃は根元から折れ地面に刺さる。

「馬鹿な、これほどの実力を……!?!」

「お前達じゃ役不足……あーいや、役不足は誉め言葉だったか? まあいい、邪魔だ」

もう一度剣を振れば、たったそれだけでイヤルとジャステイを吹っ飛ばし、気絶させる。

ほんの一瞬で二人を無力化してしまった騎士に長らく感じなかった危機感が生まれる。

まず間違いなく、この騎士は今まで戦ってきた誰よりも強いと分かった。

しかし騎士はそれ以上何をするまでも無く、やることは終わったというように踵を返して去っていく。

「……戦わないのかい？」

「決着はここではつけない。俺の主の前でつけてこそ、価値のある勝利となる。それに、仲間を庇ったまま戦うお前に勝っても意味はない」

それだけ言い、マントをたなびかせ消えて行く黒い騎士。

それになんだか嫌な既視感を感じたが、ひとまず敵がいなくなったことに安心し息をつく。

「勇者様！無事ですか!？」

「……うん。僕より、二人を回復させてあげて。幸い重傷ではないみたいだから」

「は、はい!……あの、勇者様」

「ん？どうしたの？」

「顔色がとても悪いのですが、本当に大丈夫なんですか……う？」

ビクリと震える、まるで誰かに叱られてるように、心細かった。

いつものように胸を張って、答えることができなかつた。

まるで、まるで——

「……大丈夫だよ。大丈夫、きつと大丈夫……」

悪いことした、報いに怯えてるみたいに。

受け入れられた者

「——何が、起きています？」

父である魔王の元から姿を消した、滅びの魔力を扱えぬ出来損ないの愚妹。

もう見ることは無いだろうと思っていたその女は、ある日突然一人の人間の騎士を連れ自身が治める領地にやってきてこう言った。

『マモンお兄様、この領地を私にくださいますか？』

何を馬鹿など嘲笑し、蟻を潰すように自身が育て上げた最高の兵隊達で愚かなことを宣った反逆者を圧殺する——はずだった。

だと言うのに、なんだこれは？

「その男は、何なのだ……!?!」

騎士が剣を振るう度、冗談のように精銳達が首を落とされ屍を晒す。

城を守る堅牢な鉄の扉は魔力を纏わぬただの斬撃で両断され、魔法使い達が放った魔法すらその剣の前に何の意味もなさなかつた。

魔法を剣で切れる訳が無い、そんな常識が目の前の男により打ち砕かれた。

「何、と言われましたも。この騎士は私の右腕でございます。実に頼りになるでしょう？」

「ふざけるな、そんなことを聞いているのではない!!何故その男は人間でありながらそこまで強い!?何故魔法を斬れる!?何故それ程の男がお前に仕えている!?あまりにも道理が通らんだろうが！」

人間にも強い存在がいるのは知っている、勇者等その最たる例だ。そこはまだ看過できさる。

しかし、魔法を斬る等聞いたことは無い。魔力を纏わせているのなら別だが、それをする様子も無くただ剣を振るだけで魔法を斬っている、意味が分からない。

何より、一目見ただけでも分かる程の才と強さを持つ魔物から見ても規格外なこの男が、魔力も持たず力も無い、ましてや王の器すらないこの女に仕えていることこそが最

も納得がいかない。

「まあまあ、お待ちになってください。一つずつ答えて上げましょう。まず、この騎士がここまで強い理由ですが」

無駄話をしている間に後ろ手に滅びの魔力を圧縮させ、騎士を殺すための隙を伺う。

この男と正面から戦って勝てないのは今までの戦いを見て分かっている、故に狙うはほんの一瞬の隙を突いた不意打ち。

そうまでしなくてはならぬほど追い詰められたことにプライドを傷つけられるが、今はそんなことを言っていられる状況では無い。

「これに関しては才能としか言えません。世界はあまりにも残酷ですわね？ 私には何の才能も与えてはくれなかったというのに、マモンお兄様はこの領地を治められる程の器を持ち、私に仕える騎士はそんなあなたを殺せるほどの剣才を持っている。ほんの少しでもその才能を分けてもらいたかったくらいです。おおよ」

わざとらしく泣き真似をする腹違いの妹に気色の悪さを感じながら、無言でその時が

来るのを待つ。

「そして魔法を斬ることに關してですが——実はそれには私のおかげなんですよ。」

「なんだと?」

妹が発したその一言に思わず反応してしまふ。

自分は妹に負けたのではなく、この騎士に負けたのだと思い込み自分のプライドを守っていた。

故に、自身が妹に負けたとでも言うようなその発言に苛立つてしまった。

「何を馬鹿なことを! 貴様は何の力も無いはずだ! 力が無い故に父は、魔王アスタロトは貴様を捨てた! それが今更になって力を持って帰ってきた? そんな都合の良い、夢物語のようなものがあるはずもあるまい!」

「ええ、そうですね。私は一人では何もできません。故にこの力は私には使いこなせぬものでした。ですが、お兄様も知っているはずでしょう? 私が生まれ持つて魔力を持たない理由を」

「ああ、知っているとも。貴様は魔力を拒絶する身体に生まれ、魔力に触ればそれが霧散する。故にお前は、魔法を使え、ず……」

そして、気づく。

ローブに隠れて気づかなかったそれに今ようやく気付いてしまった。

妹の重心は以前見た時と違い明らかに左に偏っていた。

まるで右についてあった重りが外れたかのように、まるで、そうまるで。

自身の右腕が無いかのように

「ああ、気づいてくれたのですね！良かった、私の頑張りをマモンお兄様に見せられて
！」

「貴様、正気か……？」

信じられない、理解できない、何がお前をそうまでさせる？

その女は、そう、右腕を自ら切り離したその女は、文字通り。

自分の右腕を剣にしたのだ。

「ずっと考えておりました。自分だけが持つこの力は、どうすれば上手く使えるのかと。お兄様達が馬鹿にし、蔑んだこの身体はどのようにすればあなた達に、お父様に認められるのかと！あなた達の元からいなくなった後、ずっとずっと！身を削って研究して、魔法についても気が遠くなるほどの時間調べ続けて！」

分からない、なんだこの女は、何のためにこんなことをしている？

復讐か？嫌悪か？憎悪か？怒りか？いいや、そのどれでもないだろう。

その目は光に満ち溢れている。自分達を見てすらいない、まるで何か希望溢れる未来でも見るように、身の毛がよだつ程の正気を持っている。

ずっとそうだった、そんな体に産まれて何故そこまで笑えるのか不思議な程に、その女から笑顔が消えたのを見たことが無かった。

「私の体は魔力は持たない代わりに魔力を通さない、魔法に対して強い防御力を持ちます。けどこれだけじゃ不十分だった。だって私は叩けば壊れるほど脆いです。私が人間なんか殴れば、逆に私が壊れちゃう程に私のこの身体は脆く弱い。魔法限定の盾くらいなら使い道があるかもしれませんが、けどそれだって欠点があります。魔力は消せても魔法によって生じた他のエネルギーは防げない。例えば魔法により爆発が発生した場

合、魔力を伴わない物理的現象であるそれに私は成すすべもない。故に私自身が戦うのは到底不可能」

その生き物であるかすら疑わしい何かは、どこまでも笑顔で、無邪気に、嬉しそうに。まるで親に褒めてもらおうことを強請る幼子のように。

「だから私は他の人にこの身体を使ってもらおうという方向性に切り替えました。けれど見ての通り私の体は一つ。それに乱暴に扱えばすぐ壊れちやう欠陥品です。例え剣にしたところで少しでも衝撃を与えてしまえば、すぐに役立たずになってしまう。だから見つける必要があつたのです。そんな脆い剣でも折らず壊さず、爆風も風も骨も鉄も鋼も人も、全てを両断する最高の剣士を。私の右腕に足りる存在を。そして見つけました！」

気づく、いつの間にか騎士がいないことに。

嫌な予感と共に振り向こうとして、ぐらりと手足に力が入らず倒れてしまう。

四肢に感じる激痛、自身の関節が斬られたと気づくのに時間がかかった。

「どうですか？お兄様。私だって使い道はあるでしょう？」

「正気か貴様は!?このようなことをしてかしたのだ、父上が貴様に報復するぞ！」

「はい、それが今回お兄様を襲った目的ですから！」

ダメだ、こいつはダメだ。

まともではない、正気ではない、父上は何故こんな奴を殺さずに捨て置いたのだ!?

「魔物の王たる父上に反逆するつもりか!?貴様には親への情が無いのか!？」

「……?これは異なことを仰りますね、お兄様」

心底不思議そうな顔で、その女は首を傾げる。

まるで何を言っているのか分からないと言っても言うように。

「これはお父様のためにしていることですよ？」

「なんだと……?」

「私がしたいことはとても素敵なことなんです」

その未来を思い浮かべ、精練に整った顔を紅潮させる。

それこそが最高の結末だとしても言わんばかりに幸せそうな表情を浮かべて、そいつは言った。

「私はお父様とお母様を再会させたいんです。お父様が最も愛したあの人と！そしてお父様とお母様と皆で楽しく暮らすんです！ああ、それはきつと——」

針のようなものを首筋に突き立てられ、脳を無数の言葉が支配する。

『勇者を殺せ』

どれだけ逆らおうとしても無駄だった、体が再生し動けるようになってもはや自分の意思で動くことは叶わなかった。

自分は既に、この悪魔に。

「世界で一番美しいハッピーエンドなんですから！」

もう何も聞こえない、喋れない、見えない。

「だからマモンお兄様も手伝ってくださいませんか？お父様のために、その身を挺して」
その言葉を最後に、我の意識は消滅した。

☆○○☆☆

『○○は凄いねえ。きつと将来、凄い子になるよ』

『うん！俺、おばあちゃんが天国で自慢できるような大人になるよ！』

人生とは、『こんなつもりじゃなかった』ことばかりだ。

『あいつ、付き合い悪いよな』

『俺らのこと見下してるんだぜきつと。喧嘩強いからつてよ』

『剣道部の顧問からも嫌われてんだろ？世渡りつてもん下手だよなあ』

中途半端に正義感を持っている癖に、それに見合う程の強さも経験も持つてなくて。

『君、そんな気持ちで社会人やっていけると思ってるの?』

『ここでやっていけないやらどこ行っても無理だよ!』

『お前みたいなのを雇ってくれるの、ここだけだよ?』

きっと辛いのは自分だけじゃない、皆がそれに耐えて生きている。

その先にある幸せを掴むために足掻いて這い上がって、そして諦めず頑張り続けてようやく普通の人並みの生活ってもんを手に入れることができる。

誰だって、俺だってそんなことは分かっている。

『困ったことがあれば相談してもいいんだよ?』

『君は一人じゃない』

『辛くなったら逃げていい』

自分に手を差し伸べてくれた人も、助けようとしてくれた親もいた。

きっと自分はまだ恵まれていたんだろう、自分より辛い人も一杯いたんだろう。

けど俺はどうしようも無く馬鹿で要領悪くてクソ野郎で、誰かに助けを求めること

も、夢を持つ勇氣も、楽しく生きる方法も知らなくて。

後ろから来た人に追い抜かれて、その人に手を伸ばすことも出来ずに転んで動けないままで。

約束した凄い大人になる方法も分からずに、ただただ人生を浪費して。
ある日、ふとしたきっかけ一つで全てを捨てて逃げ出したくなって。

ロープと台を持って、自分の部屋で――。

『おお、僕達の子が産まれた！元氣な泣きっぷりだなあ！』

『ちよつと泣きすぎな氣もするけどね。けど、私達の子供はこれくらい元氣な方がいいんじゃないかしら？』

氣づいたら、知らない女の人に抱きしめられて泣いていた。

自分が転生したと氣づくのに長い時間がかかった。

それまでは訳も分からず、そもそもまともな思考すらできないまま赤ん坊時代を過ごした。

母さんの乳を吸った記憶とかも覚えてない、覚えてないったら覚えてない。

知識も才能も経験も、全てが強くてニューゲームなイージーモード。

夢見たはずだ、異世界に転生してやること成すこと全部上手く行くそんな人生を。けれど、俺に微笑んでくれる両親を見る度に思ってしまった。

それじゃあ、体の持ち主エンヴァは一体どこに行つた？

俺は本当にこの両親の息子なのか？だって俺には前世の記憶というべきものがある。前世の俺にも家族はいて、今世の俺にも家族がいる。

だとすればどちらが俺にとっての家族だ？

そもそも俺はエンヴァを名乗っていいのか？

本当にこの身体は俺が持っているべきものなのか？

俺は——エンヴァという才能溢れる人間の人生を奪ってここにいるんじゃないか？

『ハツハツハツ！馬鹿なこと考えるなあ、この子は！』

泣きながら俺のことを両親に伝えたら一蹴された。

信じられてない!?とショックを受けたが、両親は信じた上で俺の言ったことを笑い飛

ばしていた。

『そんなものがあつたとしても、君はずっと僕らの子供さ』

『ええ。だつて大人ぶろうと背伸びしてる所や褒めてもらおうと頑張ってる所なんて、子供そのものだものね。それに幾ら言つても食事中にご飯こぼすし、注意したら不貞腐れるし』

『片付けも未だちゃんと出来てないしね』

『それに。それで悩んで、傷ついて。いたかも分からない誰かのために涙を流し続けたんだらう？夜中にすすり泣く声はずつと聞こえて少し怖かつたくらいだよ』

『そんな涙を流せる優しい子、他の誰かやあなたがなんと言おうと私達の息子に違いない。だつて私の夫はとっても優しい人で』

『僕の妻は誰かのために涙を流せる人なんだから』

ずっと、ずっと泣いて、涙が出なくなる程泣きはらしたのは初めてだった。

その時初めて自分がこの世界にいていいんだと、エンヴァとして生きていいんだと肯定された。

その日から俺は、二人を自分の両親だと胸を張って言えるようになった。

今度こそは、必ず。

この二人が胸を張って自分の息子だと言えるような。

名前の通り、皆から憧れられる、誰かから目標にされるような。

そんな、立派な奴に。

誰かの期待に応えられる、そんな奴に。

なれなかった

「……」

どれだけ身体や技を鍛えても、結局の所自分は前世と変わらぬままで。

楽な方に逃げて、逃げて、逃げて。

自分の弱さに目を背けて、誰かの強さに羨望して、それに手を伸ばすことも出来ず。

弱いままで良いと、自分に居場所をくれた人にまたしがみついて。

「あら、エンヴァ。そんなところでどうしたのです？……随分と年季が入った本」
「ソフィート様……」

かつて両親に買ってもらった誕生日プレゼント、俺が勇者を目指す切っ掛けとなった聖剣を手にし魔王を倒した勇者の自伝。

それを読んでいた俺の隣にちよこんと腰かけたソフィート様は、十年以上持ち歩き読んできた本を物珍しそうに眺めていた。

「大事な物なんです。見ただけでも分かるくらいに大事に読んでましたもん」
「はい。昔、両親に買ってもらった大事な宝物なんです」

ピクリ、とソフィート様の肩が揺れた。

ソフィート様はマモンに『母親と父親を再会させたい』と言った。
けれど、その方法が具体的にどのような物かはまだ聞いていない。

そもそも、ソフィート様が何故それをしたのかも、俺は知らない。

勿論何度も聞こうと思った。

「……そうですか。それはとても大事でしょうね」

「はい。……結局、二人の期待に応えられず、ずつと反抗してばかりでした。あの時も、二人の言うことを聞いていれば——」

自分が聖剣を抜きに行きたいと言ったとき、二人からは猛反対を食らった。

理由は単純明快で、『勇者は辛くて大変だからお前には無理だ』という、親としては当然の反論だったし、そもそも距離とかを考えれば簡単に行けるはずが無い。

けれどあの時の俺は、両親から期待されていないと思つてムキになつてしまった。

『勇者以外にも、色々とやれることはあるはずだろう？ 憧れるのは分かる、けど他にも前がなりたいたいものが見つかるかもしれない。まだ決断するには早いんじゃないか？』

『子供の内から行く必要なんて無い。もう少し色んな経験を積んで、大人になつてから改めてどうするか決めればいい』

その言葉を素直に受け入れられず、書置きだけ残して家を飛び出して行つた。

家を出てから、もう一年と半年程が経つ。

二人は今どうしているだろうか、なんて考えて、それを自分が思う資格なんて無いだろうと自嘲する。

「そんな親のことを思えるなんて、エンヴァの両親はきつととても素晴らしい方だったんでしょね！」

「……そうですね」

ソフィート様の目が一瞬だけ変わったのを、俺は見逃せなかった。

黒く濁った、何を考えているのか分からない不気味な目。

俺が彼女の親について、魔王について聞こうとする度に浮かべるその目を見て、俺は今まで何も言えないでいた。

——けれど、そろそろ向き合わなければいけないだろう。

「ソフィート様の両親は、魔王とはどんな人だったんですか？」

「……私の両親、ですか」

思ったよりソフィート様に変化は無く、いつも通りの笑顔で語り始める。

「誰よりもお互いを愛し合った二人でした。お父様は魔物であり、お母様が人間であつた以上、別れが来るのは当然でしたけど」

「母親が人間だつたんですか!？」

「はい。珍しいことではありますが、あり得ない話ではないでしょう？魔物の中には人間と同じような姿と機能を持つ者も少なくは無い。私自身、こんな体ではありませんけど人間との間に子供を産めますし」

「そ………そうですか」

「そんな二人の間に産まれましたので、お父様は最も愛する妻との間に出来た私を次の魔王にしたいと考えていたようなのですが、ご覧の通り私はこのような体。滅びの魔力も持たず、体も弱い。だからお母様が死んだ後、すぐに殺されかけて捨てられました」

「………自分の子供を、ですか?」

「魔物とはそういうものですから。けれど、お父様は母上がいた時は私を傷つけませんでした。だから私はお母様がいたからこそ私は受け入れられたのではないか、と思つてお母様とお父様を再会させようと思つたんです。これが私のやりたいことです」

「………」

話をし終わってから、ソフィート様は立ち上がった。

「そろそろ勇者達が来る頃ですね。エンヴァ、手筈通りに頼みますよ?」

「……はい。行きましよう、ソフィート様」

——多分、俺に話してくれた話は殆どが嘘なのだろう。

人の顔ばかり見て生きてきたからか、無駄に発達した観察眼がそう導き出す。

けれど、そんなことを思いながらも何の迫及もせず、関係を壊したくないからただ黙ってついていくだけの俺はやっぱ昔と何も変わっちゃいないのだろう。

☆○☆○☆

「……到着しました、勇者様」

「うん、ありがとう。皆、気を付けてね」

「おう。次はあいつに後れを取ったりしねえ!ぶん殴ってあの悪趣味な鎧剥ぎ取ってそ

の面拜んでやらあ！」

「イヤル、あなたは少しは落ち着きなさい。そんなだから毎回勇者様の手を煩わせるのよ」

「んだとお!?!」

目的地の廃村に到着したが、魔物の姿は未だに見えない。

奇襲を仕掛けてくるのかと思いい周囲を警戒するがそんな様子も無く、不気味な静寂だけが広がっていた。

「……勇者様、少々違和感が」

「分かってる。君たちは周辺警戒と援護をお願いね？基本戦うのは僕がするから」

「おいこら！俺達もあいつと——!」

「ごめん、多分邪魔になる。だから、ね？」

「ツツ！……ツツ、分かったよ」

煩いイヤルを黙らせ、意識を集中させ聖剣を抜く。

「そこにいるんだろ？出てきなよ」

そう言うと、廃屋から一匹の女の魔物と、先ほど戦った騎士が現れる。

騎士は相変わらぬ威圧感で私を睨み、おそらくは魔法のアイテムで変えられているのであろう声を出す。

「来たか。魔導士リージェ、騎士ジャステイ、拳闘士イヤル。そして……。……勇者ルス
ト」

「君には幾つか聞きたいことがある。けどその前に——君が言っていた主とやらはどこだい？」

「あら？もしかして私、部下とかその辺りで見られているのでしょうか？悲しいです、お
よよ」

わざとらしく泣く仕草をする女の魔物。

何故だか分からないが、こいつが行う仕草一つ一つが腹立たしく、そして傲慢に見えるた。

「こいつが？……胡散臭さの塊みたいな人だね、君の主」

「……貴様が、貴様がそれを言うのか、貴様が——！」

「はい、ストップです私の右腕。まだ自己紹介が済んでいないでしょう？」

水晶の身体をした魔物はまるで貴族が行う礼のように優雅に頭を下げた。

「初めまして、勇者とその一行様。私の名はソフィート。あなた達に話があつてきました」

そう言つて、魔王の娘は微笑んだ。

僕に任せて

『エンヴァ君ならきつとできるよ』

彼は何時だつてその言葉に伝えてくれた。

強大な敵と戦う時はその一言で奮い立つてくれた。

都の武芸大会にも出場して、賞金をかつさらつてくれた。

どんな時だつてその一言で立ち上がり、勝利する彼はヒーローのようだった。

僕はそれを素敵な言葉だと信じて疑わなかった。

彼の背中を後押しして、不可能だと思ったことさえ成功させる魔法の言葉。

だから、何度言つたか覚えていなくらいその言葉を口に出した。

その言葉にどれほどの重みがあるのかを理解せずに。

『勇者になんて、なりたくない』

そう言つた時、皆は激しく狼狽えた。

勇者以外には聖剣が使えず、聖剣以外では魔王を討ち倒せないというのだから当然だろう。

けれど、色んな報酬や色んなことを約束されてもとてもやる気になれなかった。

『あなたが戦ってくれなければ、大勢の人が死んでしまうのです！』

『あなたが魔王を倒してくれなければ、この世界が魔王に支配されてしまうのです！』

『沢山の人が不幸になるのですよ!?!』

『どうか世界を救ってください』

『ならなんで僕を助けてくれなかったんだ？』

ずっと忌子と呼ばれ、産まれたのが罪と言われ虐げられた。
こんな痣があるだけで皆僕のことを罵倒した、親にすら人間として扱われなかった。
忌子と呼ばれ、種族の名前すら消された遠い過去の誰かたちは何も悪いことをしていないのに、助けてきた奴らに裏切られた。

そんな仕打ちを僕らに与えてきたお前達が今更僕に自分達を救ってくれと言うのか？

そう言うと、彼らは何も言い返せず黙り込んだ。

王都や他の街でも、忌子が虐げられているのを見てきた。

色んな街で、忌子だからという理由で理不尽な罵声を浴びた、誰も人間として見なかつた。

そんな国の奴らを今更救えと言われても、やる気等出るはずがなかつた。

王が連れてきた、私と同じ痣を持つ子供達を見るまでは。

『勇者ルストよ、お主の言葉を聞いて我らは心を改めた。忌子と呼ばれた彼ら彼女らを、国が保護することにしたのだ』

王は笑いながら、そんな空っぽな言葉を吐き出した。

『ルスト様が勇者になってくれたから、私は奴隷から解放されたの！ありがとう、ルスト様！』

親に売られ奴隷となった少女が感謝の言葉を私に向けた。

『あなたに助けられるまで、僕はずっと皆に虐められていました。けど、あなたが勇者になつてくれてから皆僕に優しくしてくれるようになったんです！ありがとうございます、ルスト様！』

私が勇者になつたことで、友達が出来た少年が笑つた。

『ねえねえルスト様！私に名前を付けてくれませんか？親にも名前を付けられなかったら、私達を救つてくれた勇者様に名前を付けてもらいたいのに！』

名前を付けられなかった少女が名前を付けてほしいと僕にせがんだ。

『勇者ルスト。お主が勇者になつたことで、これ程の人間が救われたのだ』

つまりは、王は私を勇者にするために人質を用意したのでらう。

この子達をまた地獄に落とさくなくれば、勇者として戦えと。

僕と同じような過去を持ちながらも、エンヴァ君では無く僕に救われた子供達がキラキラとした目で僕を見る。

『勇者様エンヴァア君なら、魔王に勝てるよね?』

その期待が僕の肩に重くのしかかる。

『勇者様エンヴァア君なら、皆を救ってくれるよね?』

彼らの瞳に宿る希望を失わせるのが怖くて、否定の言葉を口に出来ずに黙り込む。

どうしようもなく自分とこの子達を重ねてしまう。

自分が勇者になる以外にこの子達が、僕と同じ忌子が救われることは無いと理解して
しまう。

彼らにとつての僕が、僕にとつてのエンヴァア君だと分かってしまう。

初めて受けたその視線に吐き気がする程の重圧を感じた。

自分がやらなければこの子達が救われないと、自分が逃げなければこの子達の期待を
裏切ってしまうことに。

この子達を置いて逃げれば、この子供達の笑顔が消えてしまうことに。

そして——そんな期待をいつも、彼に向けていたことに。

その様子に不安を感じているのではないかと勘違いした彼らは、励ますために、背中を押すために、元気づけるためにある言葉に僕に向けた。

なんてことは無いその言葉は、そう。

かつて誰かが常日頃言っていた言葉、そっくりそのまま。

『勇者様なら、きつとできるよ！』

その時初めて、その言葉の重みを知った。

「さあ、お前は勇者だろうか？魔王を倒す者だろうか。なら頑張らなくちゃ」

数え切れない程の魔物を殺した、時には命を落としかける程の激戦があった、痛かった。

誰かを守るための戦いというのは、こんなにも痛い物なのかと実感した。

いつも傷ついている彼は、震えながらも戦っていた彼はこんなにも辛かったのかと考へてしまい、その度に自分がやったことの重さを理解してしまう。

「聖剣を抜いたんだろう？なら皆を救わなければ」

勇者とは希望の象徴でなくてはならないらしい。

例えどれだけ傷ついても、逃げることも泣くことも弱音を吐くことも許されならしい。

苦しんで悶えて、けれど進まなくてはいけないらしい。

「エンヴァ君の夢を奪ったのだろうか？なら代わりにやれよ、勇者を」

皆が高らかに言う、『勇者様は希望だ』と。

子供達は僕に言う、『ルスト様は僕らを救ってくれた』と。

こんなに辛いなんて思わなかった、こんなに大変なんだと思わなかった。

ごめんなさい、今まで頼ってばかりでごめんなさい。

自分がずっと友達だと、親友だと思っていた関係はただの一方的な依存だった。

ただ『頑張れ』と、ただ『君ならできる』と言っていただけで何もしなかった、何もできなかった、何も分かつた、何も分かつた。

幾ら助けてと願ってももう遅い、彼はもう僕を見限った。

仲間達は言う、『無理をしないで』『俺らに頼れ』『あなたを守りたい』。そんな立派なことを言う彼等を見て、どうしようもなく後悔する。

「なんでお前は、エンヴァ君にそう言わなかったんだろうね？」

たったそれだけで、ほんの一言だけで未来は変わったかもしれないのに。

救われることだけを望んで、救う側の気持ちなんか考えず。

友達という関係に固執して、それ以上を望まずに、彼を助けようなんて思わずに。

相手が自分に合わせてくれることだけを望んで、自分が相手と合わせることなんて考えず。

だからきつと、これはそんな僕への罰なのだろう。

僕はもう救われちゃいけない、彼はずっと救われなかったんだから。

沢山彼に救われたのに、僕は彼の救いを奪ったんだから。

沢山傷ついて、沢山心が折れて、沢山の人を救って。

きつと、それでようやく僕は彼と同じになれると思うんだ。

その時初めて、君にその言葉を贈る資格を得られると思うんだ。

拒絶されたって良い、罵倒されたって良い、僕に、たった一言だけ君に贈る言葉を言

わせてくれ。

☆○○☆○○☆

「話だと？魔王の娘が勇者様に一体何の話があるというのだ」

ジャステイが私の前に出て魔王の娘を名乗る少女を睨む。

戦いなら間違いなく私の方が強いのだが、こういう交渉事はジャステイの方が上手だ。

未だに強烈な敵意を放つ騎士に警戒しながら、僕はジャステイの後ろに下がった。

「あなた方は魔王を……我が父を殺したいのでしょうか？であれば、私と目的は同じです」
「ほう？貴様も魔王を殺したいというわけか。だが理由は何だ？半端な理由では信用できぬぞ」

「私は父に出来損ないと罵られ育てられたのです」

目を伏せ、悲しみに満ちた顔をしながら彼女は言葉が続ける。

その間にもリージェはすぐに魔法を放てるように詠唱を始め、イヤルは拳に魔力を纏わせる。

何かあればすぐに戦闘に参加しているように準備をしているが……果たして彼らの実力で、あの騎士を相手にどれだけ持ちこたえられるか。

それでも何の役にも立たない兵士達よりも数百倍マシなのだが。

「父は私が滅びの魔力を持たず、脆く弱い私に失望し、私を出来損ないと呼び続けました。他の魔物が私にどんな危害を加えようと見て見ぬ振りをしていました。幾ら父の為に働こうと、あの方は私に見向きもしてくれなかった……。やがて親への愛は憎しみへと変わり、私は父を討つたためにある計画を立てることにしたのです」

「ほう。その計画とは？」

「人間と、勇者と協力し魔王を倒す。それが私にとって最も勝算のある方法だと考えたのです」

「つまり、魔王軍を裏切り人間の味方をするつもり、というわけか」

「ええ、そういうことです。もし魔王を討てた暁には、協力の報酬として誰も訪れぬ森の

奥で余生を過ごさせてくれれば他に何の報酬も求めません。私は魔王を、憎き父を倒せれば——」

「つまらぬ嘘ばかり吐くのはやめろ」

饒舌に過去と理由を語っていた魔王の娘がピタリと止まる。

「貴様はまるで人間のように嘘を吐くのだな。目線や手の動き、声の抑揚。驚く程簡単に嘘かどうか判別できるぞ。小賢しくも真実を混ぜて語っていたのは多少褒めてやるが……貴様には詐欺師の才能は無いようだ」

「……そうですか。信じてはくださらぬのですね」

「お前が語った魔王から受けたという所業は信じよう。だが、それ以外がまるで信用ならない。貴様が父の憎悪を語っている間にもその目には闇は宿っていない。肉親への愛を感じることは出来たがな」

「凄い。そんな簡単に嘘って見抜ける物なのですな」

「我が身は代々王の身を守る、そして王の地位を守る盾として、数々の教育を幼き頃から叩き込まれた家の長子。謀略もできずにそれを名乗ることも出来まいよ。それに、貴様はこういつた交渉事の経験は無いと見た。聞きかじった知識だけで相手をするには私

は少々手ごわいぞ?」

ニヤリと悪い顔を浮かべる、名前とは似つかわしくもないその姿にイヤルがげんなりとした顔を浮かべる。何度か仕置きを受けたトラウマを思い出したのだろう。

直接的な攻撃力はこの中では弱い方だが、代わりに防御力と駆け引きは私達の中でも随一だ。

イヤルが良く口八丁で騙され、色々ひどい目に合ったのを見てジャステイはなるべく怒らせないように僕が気を付けるくらいには、こうなった時のジャステイは怖い。

魔王の娘は少し悩んだ後、また口を開いた。

「分かりました。真実をお話しましょう。私は父様を救いたいです」

「救う、だと?」

「はい。私の父様は母様と相思相愛の仲でした。けれど、母様は人間であり、魔物である父様と結ばれたことで人間達から裏切り者と呼ばれ殺されたのです。もう何百年も前の話になります……」

そう語る彼女の言葉の嘘があるとは思えなかった。

ジャステイもそう判断しているのか何も口出すをする様子は無い。

「最愛の人を失ってしまった父様は、狂ってしまったのです。愛する者を奪った人間に復讐するため、魔王となり人類を滅ぼそうとその力を振るい始めたのです。……最早彼を止めるには、言葉では足りません。彼には死しか救いが無いのです」

「……」

「それを成し遂げるため、あなた達に協力してほしいんです！父様のことは未だに愛しています……けれど、もう狂い泣く彼の姿は見たくないのです！」

ジャステイは無言で続きを促す、それを信用されていると取ったのか、魔王の娘は更に語り続ける。

「協力していただけるなら、あなた達には私が持つ城へと来てほしいのです。その城はかつて魔王軍の重役であった者の城。それをこの騎士の力により奪い、魔王を誘き出す餌とします。魔王軍にとっても要所であるその城を奪い返すには相応の戦力を送ってくださるはず。それらを撃退し続けられれば、いつかは魔王本人が城を奪い返しに来るでしょう。その時に、私達とあなた方で……！」

「魔王を倒した後、貴様はどうするつもりだ？」

「……どうもいたしません。私は——」

「分かりやすい嘘ばかり吐くな、貴様は。その先に貴様の真の目的があるのであろう。ならば、それを吐け。吐けぬのであればこの話は無しだ。余程の危機的状況であればともかく、我々人類には未だ勇者と聖剣は健在であり、魔王軍との戦いでも優勢を保っている。わざわざ相手の策略に乗り危機を晒す必要も無い。貴様が本当に魔王を倒したいだけというのであれば考えないことも無いが……どうにも、貴様にはそれ以外の、いやその先にある何かが本命であるように思える」

ジャステイの追求に対し、魔王の娘は一瞬黙り込んだ後、ニチャリと何かを堪え切れぬように口を三日月のように歪め、言う。

「ハッピーエンドですよ」

「……何？」

「私は、父様を倒した後、ハッピーエンドを迎えたいんです。その言葉に嘘はありません」

「……嘘は無い。だが……改めて理解した」

ジャステイが合図すると同時、リージエの詠唱が完了し魔王の娘の足元に魔法陣が描かれ、彼女を中心に大爆発を起こす。

自分達をまきこむ程の威力、ジャステイが大盾を構えなければ、後ろにいたイヤルとリージエもただでは済まなかつただろう。

それなのに躊躇なく自身すら巻き込む魔法を撃てるリージエの度胸と、それに誰も文句の一つも言わない事にジャステイの信頼度の高さを改めて認識する。

これだけの期待を受けて尚、それを当然の義務として背負える彼は立派な人間なのだろう。

「貴様の目を見て確信した。貴様は壊れている。貴様のような目の奴を何人も見てきた。そしてその目をした奴は一様に、常人では理解できぬ理由や論理で行動する阿呆共だ。それが人間ならまだしも——下手に力を持った魔物であれば、ここで殺さねば危険だ」

「話は終わったみたいだね。それじゃ下がって皆。こいつの相手は——」

爆炎が真つ二つに切り裂かれ、私を仕留めようと刃を振るう騎士。

その姿は、やはりかつて見た彼の剣技と似ていて。

もしそうだとすれば、彼は僕を憎んでくれているのだろうか？

もしそうだとすれば、彼は僕を殺すことで救われるのだろうか？

だとすれば、それはどれだけ簡単で、素晴らしいのだろうか。

僕の命一つで、彼が救われるのだとすれば。

「僕に任せて」

そんな、都合の良過ぎる妄想を振り払って。

僕はいつも通りに聖剣を抜いた。

☆○☆○☆

剣戟が鳴り響く、二つの剣が交差し火花が散り、水晶の剣と聖なる光を放つ剣がぶつかり合う。

光の魔力を纏う聖剣はいつも通りならどんな剣だろうと一振りで折れ、どんな物であろうと切り裂くが——この水晶の剣はどれほど打ち合おうと折れることは無かった。

それどころか聖剣を打ち払い、受け流し、痛烈な反撃をして来る。

すぐにその剣の特性に気づく、水晶の剣は魔力を消失させる効果を持っているのだと。

勿論そんなことを可能にする鉱石など聞いたことは無いし、魔力を纏わせている様子も無いので普通に考えれば有り得ないことだ。

だが、先ほどの爆炎を切り裂いたのもそう考えれば納得できた。

この騎士は、いやこの剣士は魔力を使わず、己の技量だけで戦っているのだと。

「その程度か!?何故あの光を出さない!何故手を抜いている!?!」

それに加えて、今までの戦い方を見てその剣士が背負うハンデにも気づく。

この剣士が扱う剣はとても脆く、壊れやすいのだと。

剣に負担をかけぬよう受け流し、極力剣を衝突させず、衝突したとしても剣が壊れぬよう力の流れを瞬時に理解し剣を動かす。

それに比べて僕の剣は聖剣、言わずと知れた世界最強の剣でありどれだけのダメージ

を受けた所で瞬時に再生し、その刀身が折れることは有り得ない。

だからどれほど粗雑に扱っても折れることは無いし、折れたとしてもすぐ直るから安心して振れる。

だと言うのに、互角——どころか、押されている。

「ぐっ……!?!」

「何故聖剣の力を使わない！俺にはそれを使う必要が無いとでもいうのか!?!」

使わせる隙を晒してから言え、と心の中で悪態をつく。

これまで戦ったどの敵よりも速く、そして鋭い連撃。

反撃の隙を伺おうにも攻撃を捌くだけで手一杯、逆にこちらがほんの僅かにでも隙見せればこちらの首が容易く刎ねられてしまうだろう。

「僕も頑張ったんだけどなあ……!」

やはり、僕は彼のようにはいかないのだろう。

もしここに彼がいれば、傷つきながらも苦しみながらも、例え誰の助けが無かったつ

て頑張つて、叫んで、勝つてしまふのだらう。

やっぱりエンヴァ君は凄いい、僕でも到底届かぬほどに。

「それでも……!」

まだ彼に何も言葉を伝えられていない。

まだ彼に謝罪の言葉も、言いたいことも言えていない。

子供達の期待に応えなければ、彼らにとつての希望でなければならぬ。
だから。

「諦めるわけには、いかない!」

「ツツ!」

剣士の振るう刃が僕の頬を切り裂きながらも、懐に飛び込んで魔力を纏わせた拳で殴りつける。

必要以上に聖剣ばかり目で追っている剣士は意表を突かれたようで、まともに一撃を食らい腹の鎧が砕け、後ろに吹っ飛ばされる。

追撃に繰り出した聖剣の一撃はすぐに態勢を整えた剣士により防がれる。

「貴様……!」

「聖剣ばつかに頼っていると思ったら大間違いだ!」

パワーと技術では間違いなく僕の方が弱い、けれど他は別だ。

短く魔法を詠唱し、周囲に何本もの魔力の矢を作り上げる。

「魔法まで……!?!」

「得意な奴が仲間についてね、そいつに教えてもらった!」

と言っても、リージェと違って大雑把な術式なので毎度怒られるのだが。

それでも彼女以上の魔力を持つ私が使えば、威力だけは超一級らしい。

一本だけでも人体を抉るには十分な質量を持つ魔力の矢を剣士の全方位に展開し一気にそれらが剣士に襲い掛かる。

「本当に、すごい奴だなお前は!!」

「なっ……!?!」

しかし、氷の矢は怒声と共に放たれた一振りと共に纏めて薙ぎ払われる。

明らかに空間とか位置とかを無視したそれに思わず驚きの声を上げる。

魔力は相変わらず使われていない、つまり奴、あの剣士は魔法でもなんでも無く、ただ剣技のみで逃げ場がない程に作られた氷の矢を切り裂いたのだ。

驚愕で隙を晒してしまった僕を見逃すはずも無く、一足跳びで僕の眼前に近付いてくる剣士に思わず一瞬死を覚悟する。

だが、感じたのは刃の感触ではなく固い足の感触。

どうやら、蹴りをまともに食らってしまい吹っ飛んだらしい。

剣を杖代わりに立ち上がる、それを見て剣士は笑う。

「ハ、ハハッ! ああ、そうだ! お前は勇者になつたんだろう! そうなる素質があつたんだろう!?! そうなる理由が、そうなる強さが、お前にはあつたんだろう!?! さあ、見せろ、見せてみる! 勇者の、いいヤルスト! お前自身の実力を!!」

—— ああ、やつぱりそうなんだ

彼の正体を、剣士の鎧の下にある顔を確認し、笑みを浮かべる。そりや僕が勝てないはずだ、そして強いはずだ。

エンヴァ君がどうしてあいつの部下になつてゐるかは、知らないけど、これだけは分かる。

エンヴァ君はきつと、あの時もこうして僕と戦いたかつたんだ

あの時の僕は、まだ彼に助けられるだけの人間だった。

だから拒んだ、だから出来なかつた、彼と戦うことに怖氣ついて、結局彼を救えなかつた。

ほんの少しの勇氣があれば、彼と一緒に剣を取り、魔王を倒していたかもしれない。

けれど、今は違う。

今の僕は、ほんの少しだけど、君に近付くことが出来たんだ。だから。

「ようやく」

君の心を教えて、君の強さを教えて、君のことを教えて。

そして、今までずっと守ってくれた彼に、僕がどれだけ強くなれたかを伝えたくて。

「君と同じ場所にいられる……！」

☆○☆○☆

聖剣が光り輝くの見ながら、俺は兜の下で笑みを浮かべる。

ああ、そうだ。それでいい。

「さあ来い、ルスト……！」

あらゆる不浄を滅ぼす聖なる光、世界を救う者のみが放つその一撃。

それが敵を滅ぼすのを何度も見てきた。

それを見る度に、『自分では勝てない』と思ってきた。

その光が今、俺に向けられている。

その事実にも、自身がその光に立ち向かえることに心の底から歓喜が湧き上がる。

そして何よりも——！

「ずっとずっと、お前と戦いたかったんだ。お前が勇者になったあの日から——！」

俺が聖剣を抜けなくて、あいつが聖剣を抜けた理由なんて分かっている。

あいつは凄い奴だ。

誰かのために努力して、こんな俺なんかのために辛い旅についてきてくれて。

親が自分を愛してくれなくなっちゃって、いつかは愛してくれると信じられる優しさがあつて。

ああ、畜生、俺とは大違いに出来た奴だよ、お前は。

俺が必要無いことを分かってしまうくらいに。

必要とされたかつたんだ、お前に。

お前が持たないたつた一つを埋められる、そんな奴でいたかつたんだ。

勇者になって、お前が俺を信じてくれたのは正しかつたって証明したかつた。

「これだけは、剣だけは。お前には負けたくねえんだよ……い！」

俺に新たな居場所をくれたあの人のために、そして自分の気持ちに踏ん切りをつけるために。

俺は、お前に。

「——!?!ソフイート様!!」

「勇者様、後ろに!!」

聖剣の輝きが増し、ついにそれが放たれる、そう思った瞬間に。
空から紅い太陽のような、滅びの魔力が俺達に降り注いだ。

居たはずの誰か

「クソツ……！」

「ぐう……！」

赤黒い隕石のような滅びの魔力が地面に着弾し、周囲一帯が地獄に変わる。

草一本すら滅び尽くし、廃村が跡形も無く消え去ってしまったている。

マモンと戦った時にも滅びの魔力の力は見たが、ソフィート様の右腕があつたこと、マモンの戦士としての力量が低かつたので問題は無かつた。

だが、滅びの魔力自体は脅威だつた。少しでも触れば空間ごと肉体を削られる、鎧が意味を成さない単純な破壊力は普通に相手取るには無理ゲー過ぎる。

初撃はなんとか切り伏せたが、無茶をした代償に鎧と兜がボロボロになつたので兜を脱ぎすて放り投げる。ルストは既に俺のことに気づいているだろうし、防具ももう意味を成さないだろう。

ルスト達を背に盾で攻撃を受け切つた騎士ジャステイも満身創痍だ。

「これ程の力を持つ相手に正面から戦うのは……！ソフィート様、すぐに離脱を！」

「いいえ、ダメですよエンヴァ。お父様はそう簡単に逃がしてくるような方ではありません。ほら、なんとかからは逃げられない、っていうでしょう？」

「お父様……？ではやはり、この攻撃をしてきた相手は……！」

「ええ、そうですよエンヴァ。あの人です。ずっとずっと会いたかった、ずっとずっと救ってあげたかった、あの人 came たんです」

「ソフィート様……？」

「もうすぐあの人を救うことができそうです。あの時は私には力がありませんでした。けれど、今はあの人に手が届く！あと少し、あと少しです。もうすぐ、私の願いは果たされる！」

狂ったように笑い、早口でそう捲くし立てた彼女は普段の姿とはかけ離れていた。

宙に浮かぶ翼と金色の角を生やすその男を見るその目は紅く、頬は紅葉色に染まっている。

対して、男は彼女をどこまでも冷めた、凍てついた目で彼女を見ていた。

「まさか、まだ生きていたとはな。相も変わらず、気持ちが悪い」

「はい、私は何も変わってはいませんよお父様。私はずっと、あなたの娘ソフィートのままです」

魔王の姿が消える。それに嫌な予感を覚え、すぐに後ろを振り向き剣を振る。

魔王が放った手刀が、ソフィート様の首を斬り落とす直前になんとかそれを受け流す。

何の魔力も感じぬ、ただの手刀のはずなのにルストが放った聖剣より重く、鋭い。

「その名を騙るな。その名前は、私の娘の物だ。貴様ではない。娘の形をした貴様に預けた名ではない。その姿で、その声で我に話しかけるな！」

「……そうですか。そうですね」

一瞬だけ、ソフィート様の目に悲しみが浮かぶ。

けれどそれはすぐにいつもの笑みに戻っていた。

魔王が再び、ソフィート様の息の根を止めようと腕を振るおうとし。

「隙あります！」

「俺ら無視してんじやねえよこの野郎！」

魔王の背に、魔導士リージェの炎の魔法と拳闘士イヤルの拳が突き刺さる。

しかし魔王は大して効いた様子も無く、鬱陶し気に滅びの魔力を台風のように周囲に展開する。

俺はソフィート様を抱え、拳闘士イヤルは魔導士リージェを抱えすぐにその場から離脱する。

「あら、私に協力してくれる気になったのですか？」

「んなわけねえだろ、むしろあいつよりてめえをこの場でぶち殺してやりてえくらいだ」
「ですが、ジャステイの防御力を一撃で吹き飛ばす程の敵を相手に、そちらの騎士も同時に相手取るのはちょっと分が悪すぎるので」

「あいつぶつ倒した後はてめえらの番だ。だが今回だけは——」

「ええ、分かりました。この場を乗り切るまでは、手を組みましょう。敵同士だったもの同士が手を組んで危機を脱するなんて、物語みたいで素敵です」

ニコニコと笑いながらそう言うソフィート様に警戒しつつも、一応は手を組む気なの

か攻撃してくる様子は無い。敵にしたら厄介だが、味方であれば頼りになる。そして、ルストは――。

「邪魔をするなよ」

滅びの魔力の中を突っ切り、聖剣で魔王に斬りかかる。

恐らくは聖剣の力で障壁を張っているのだろうが、それでもあの魔力の中を突っ切るとか控えめに言っただけで頭おかしい。

しかし、魔王は宿敵であるはずの勇者を相手にも興味を見せることは無かった。魔力を纏わせた腕が聖剣とぶつかり合い、衝撃による余波で突風が起きる。

「イヤル！君はジャステイの回復、リージェは僕と彼の援護！」

「応、任せとけ！」「了解です！」

「ジャステイは指示があるまで待機！」

「待つてください！私はまだ動けません！」

そう言いながらポロポロの鎧を脱ぎ捨て立ち上がるが、その足取りは明らかにおぼつ

かない。

魔王の一撃から他の仲間を守っただけでも大したものなのに、それでもまだ足りない
と立ち上がるとうする姿は、流石は勇者の仲間だと感心する。

「そんなボロボロの体で役に立つわけ無いでしょ！おとなしくイヤルに治療されてお
いて！回復した後はしっかり働いてもらおうからね！」

「くう……！魔王との闘いで、役に立てぬとは！」

「魔王の一撃を防ぎ切るとかいいう大健闘したんだ、暫く休んどけ。つうか俺もさつさと
魔王と戦いたいからちゃんとおとなしくしとけ」

しかしルストの一喝により、激情を抑えおとなしく仲間に治療をしてもらうため膝を
突く。

それ程までに仲間から慕われているルストはやはり勇者の器なのだろう。

僅かばかりに生じた嫉妬心がチクリと心を刺すが、今はそんなことを言っている場合
ではないだろう、と自分を律しソフィート様の方を見る。

「ソフィート様、魔王の弱点等に心当たりはありますか？」

「お父様は太陽の光を浴びると体が焼ける、吸血鬼みたいな特性を持っています。今は曇りですが、あの雲を吹っ飛ばせば分が悪いとみて撤退してくれると思います。ですが、流石にエンヴァでも難しいですね」

「なるほど。少し試してみます」

「え」

狙うは一点、ゆっくりと息を吐き頭の中に雲を切り裂くイメージを描く。

全神経をたった一つ、斬るということだけに集中させ、他の音全てを遮断する。

そして雲に向け斬撃を放った——のだが。

「クソ、ダメか」

雲に多少の切れ込みを入れることが出来たが、太陽が出る程ではない。

やはりそれほどの威力を出せる攻撃は、勇者の聖剣しかないだろう。

ソフィート様の役に立てないことが、なんとも歯がゆい。

「申し訳ありません、ソフィート様。今の俺では不可能でした」

「……今の技っていつ編み出したんですか？」

「今です、前世でそういう系統の漫画を読んでいて理論は知ってるので割と行けました」
「なるほど。才能とは不条理な物だと改めて思い知りました。……では、やはり勇者に頼むしかありませんね」

ソフィート様はなんだかいつもより冷たい目で俺を見た後、ルストに声をかける。

「勇者ルストさん。少々お願いしたいことがあるのですが、よろしいですか？」

「何？今忙しいし、あんまり君と話したくは無いですけど」

「フッフ、すいません。けれど、あなたにも益のある提案です。聖剣の力であの雲を消し飛ばし、太陽に顔を出させることは出来ますか？」

「……それをすれば、今の状況をなんとかできるんだね？」

「はい。どうか信じてください、私もこのような辺鄙な場所です、つまらない形での決着はつけたくないんです。物語の終わりは、壮大に行きたいでしょう？」

ルストは舌打ちを一つした後、魔王と距離を取り俺の隣に立つ。

久しぶりに近くで見た幼馴染の姿を見て、少しだけ背が伸び大人っぽくなってな、

とこの場にそぐわぬことを思ってしまう。

「久しぶりだね、エンヴァ君」

「……何も聞かないのか？」

「色々聞きたいことは有るし、言いたいこともある。謝りたいことも伝えたいことも。けど今は」

立場が逆なら、きっと俺はそいつをぶん殴っていただろう。

ぶん殴って問い詰めて、何故こんなことをしたのか問いたただすだろう。

そして、その答えを聞いた後ぶち殺してしまうだろう。

そうなっても仕方ない位の、自分でも最低だと思ふことをした。

どうせ元の関係に戻れない等分かってるし、戻る気も無い、俺は死ぬまであの方に従い、そしてこいつを超えて行くと誓った。

それに嘘は無い、けれど。

「雲吹き飛ばすくらい凄いのは溜めに時間いるから、その間守ってくれる？」

「どれくらいいる？」

「十秒くらい」

「楽勝だ。俺に任せろ」

「久しぶりに聞いたね、それ」

聖剣が光を帯びる、それに気づいた魔王が滅びの魔力で大量の槍を形成し、それらを一斉にこちらに向けた射出する。

幾つかは魔導士リージェが防いだが、圧倒的な物量差により押し切られる。だが、僅かでも減ってくればそれで充分。

触れれば即死、そんな攻撃が何百も、怖いし逃げ出したくもなる。

けれど、初めてルストと、勇者と肩を並べて戦える。

そのことが、何故か無性に嬉しく、そして同時に虚しくもなる。

こいつと肩を並べられるのは、きっとこれが最後だろうから。

『聖剣よ……』

殺到する槍を斬る、斬る、斬る。

マモンの数十倍はある量に加え、攻め方も巧い。

曲がり、速さを変え、時には槍が分裂し、時にはルストでは無くソフィート様に狙いを切り替え、確実にこちらに被害を与えようとする。

少しでも失敗すれば主も、自分も死ぬであろうこの状況でも何故かできる気がした。最後に残ったド太い槍が、ルストでは無く自分を貫こうと迫る。

稲妻のような機動を描き迫りくるそれを切り伏せ、ようやく終わつたと安堵し。

「……大した物だ。人間にしておくには惜しい程に」

「ツツ!?!」

いつの間にか接近を許してしまっていた魔王の爪が迫る。

避けようとして身体を捻るが、僅かに足りず肩を爪で抉り取られる。

滅びの魔力を纏っていたのであるう、肉片すら飛び散らず当たった場所ごと消滅している。

痛い、痛い痛い痛い。

すぐにでも剣を手放して、すぐに血を止めて、逃げ出したい。

こんな土壇場でもそう思ってしまう自分が嫌になる。

「う、があああああああ!!」

喉が張り裂けそうな程の叫び声を上げて、齒を喰いしばって痛みを追い出す。

大丈夫だ、俺の傷なんて大したこと無いと言いつ聞かせる。

片腕を失つてもまだ戦う奴を見た、死にそうになりながらもまだ戦えると言う奴がいた、死ぬと分かつてでもそれでも尚戦おうとした奴らを知っている。

そんな奴等に比べれば、多少の傷くらいで止まれないと自分を律する。

思わず動きかけたルストを目で制し、まだ使い物になる手で剣を握りなおし剣を振るう。

「……魔力を切り裂く剣。貴様の体が素材か」

「はい。なかなか面白いでしょう？あなたでさえも殺し得る、私の秘密兵器です」
「それは貴様のではないだろう」

避けられたが、距離を取らせることには成功した。

肩から大量の血が流れ落ちるが、それでもまだ立つことはできる。

そして——ようやく長い十秒が終わる。

『清浄なる光を以て、暗雲を打ち払え！』

ルストの聖剣が極光の魔力を放ち、雲を裂く。

出鱈目な、次元が違うと思つてしまう程の極大の一閃。

ただの一振りで、本物の太陽が姿を現し、光が降り注ぎ魔王の身体から煙が出る。

「潮時か」

魔王は溜息をついたあと、翼を広げ天高く舞い上がり俺達を見下す。

一瞬追撃しようか考えるが、今更に傷の痛みを認識してしまい苦悶の声を上げる。

これ以上戦うにしても、まずは傷を癒さなければよくて相打ちにしか持つていけない。

そしてそれは、魔王も同じようだった。

僅かずつではあるが身体が焼かれ、想像を絶する痛みを感じているはずだろう。

だと言うのに、魔王はその痛みを意にも介さず痛みに悶える俺を少し驚いたような顔で眺めて、そして口を開く。

「一つだけ貴様に聞きたいことがある。貴様に付き従っているその男。そいつはお前にとっての何だ？仲間か、主か、はたまた友人か。洗脳でもしているのかと思ったが、それならばわざわざ痛みを感じなくする必要等無い。何がその男をお前の隣に縛り付けている？」

「配下ですよ。私の右腕であり、私の忠実な剣です」

「……お前が、配下を持つだど？」

魔王は暫く考え込んだ後、俺を見る。

その目はさつきまでの興味を持たぬ冷めた目では無く、ほんの僅かではあるが俺に対し何かを期待しているような目だった。

意味も分からぬそれに少ししたじろぐ俺を他所に、魔王は笑う。

「ククツ、ハハハハハ！ああ、なるほどそういうことか！愉快だ、ああ愉快だとも」

「……お父様、何がそんなにもおかしいのですか？あなたがそんなにも笑う所、私は一度も見たことがありません」

「これが笑わずにいられるものか！ようやく貴様にも『それ』が芽生えたか！」

「何のことでしょうか？笑ってばかりでは分かりませんよ、お父様」

心なしか、ソフィート様は不愉快そう顔をしているように思えた。

魔王は今までとは一転、上機嫌に言う。

「分かっているはずだろう？分かっている目をそらしているだけだろう」

「……」

「まさかお前のそんな顔を見れようとはな。今ここで殺してやろうと思っていたが、やめだ。貴様の末路を見てやろう。貴様はもう自身が望んだ結末を辿ることは出来ぬ。貴様自身が、貴様がその男に抱いた感情が、それを阻むだろう」

「……話は終わりですか？」

「最後に——勇者達よ」

魔王は嗤う、それはソフィート様に向けた心底愉快そうに笑うそれでは無く、勇者達に、自身を殺そうとする挑戦者達に向ける王としての挑発的な笑みだった。

戦った時とは比にならぬ程に威圧的な迫力に、思わず悪感が走る。

「すべての決着は我が城でつけてやろう。決死の覚悟で来るが良い」

最後にそう言って、魔王は笑みを浮かべ消えて行った。

ソフィート様は溜息を一つ吐いて、いつも通りの笑みに戻る。

「用事は終わりました。行きましようか」

それに頷きかけて、ジツと俺とソフィート様を見る四人に気づく。

三人はまだ敵意を消してはおらず、ルストは深呼吸した後、重い口を開く。

「エンヴァ君は、そいつの手下になったの？」

「……」

何も答えず、ソフィート様の後ろについていく。

「もう、僕達は友達に戻れないの？」

返事はしない。話す舌など持てる筈が無い。

俺は結局のところあいつを裏切った裏切り者なのだから。

そんな俺が、一体あいつになんと返せば良いと言うのだろう。

「ごめんね」

耳に入ってしまった、勇者の、親友の謝罪の言葉。

ダメだと分かっているはずなのに、思わず足を止めてしまう。

「僕のせいだよ。僕が聖剣を抜いたから」

ルストは目に涙を溜め、今にも泣き出しそうな顔で俺を見ていた。

それを見て心の奥底から激情が沸々とこみ上げる。

情けない言葉が、それでも吐き出したい言葉が。

「頼ってばかりで、ごめんなさい。助けようとしなくて、ごめんなさい。エンヴァア君の夢を奪って、ごめんなさい」

最早涙を抑えきれず、ボロボロと泣き出すルスト。

最後に言おうとしたその言葉を前に、俺はついに我慢が出来なくなつた。

「エンヴァ君に付き纏つて、ごめんなさい」

「俺は！」

今までに無い程の大きな声で、ルストに向けて言葉を発する。

恨み言でも、罵声でも、どんなことを言われても動じないつもりだった。

けれど、お前がそれを言つてはダメだろう。

だつてそれじゃあ、お前が悪いみたいだろうが。

「お前がずっと羨ましかつた！物語の主人公みたいだつて思つてた！」

ルストは何をしても上手く行つて、俺は何をしても上手く行かなかつた。

俺は話すのが苦手で、旅に出た時もロクに交渉なんか出来なかつた。

けれどルストはまるで商人や詐欺師のような巧みな話術で相手を言葉巧みに操り、毎

回俺達が得をする結果を持ってきてくれた。

「母さんと父さんもお前のことを一杯褒めてた。俺も二人にいいところ見せたくて色々挑戦しても上手く行かなくて、お前ばかり成功してた！」

裁縫も調合も料理も文字も礼儀も、親が教えてくれることをルストはすぐに吸収していった。

最初の方は俺の方が上手かったけど、努力したルストはそんな俺をすぐに超えて行く。

俺だって多少は頑張ったつもりだけど、そんなちんけな物では追いつけない。

俺がルストに追いつかれることの無い物は、剣を振ることだけだった。

「違う、よ。だってエンヴァ君は、どんなことだって僕より上手くやれた。あの人たちだって知らない料理を作ったり、裁縫や計算だって僕より上手かった。それなのに」

「ああ、違うんだよ。そうじゃねえんだ。俺はお前が思うよりずっと、年だけ食ってるんだよ！」

ルストが訳が分からないような、混乱したような顔をする、当たり前だ。

こんな話を信じた両親の懐のかきの方が異常なんだと、そんな二人を裏切った自分にまた嫌悪しながら言葉を重ねる。

放出した言葉は止まらない。

「俺はな、ここじゃないどこかの世界で生きて記憶を持つてるんだ。その世界で俺は、クズだった。塾に行つても碌に勉強できねえ、友達なんて碌に作れねえし、何かをするような勇氣も持てない、何もできないクソ野郎だった」

本当に本当に、俺の前世は今世以上にどうしようも無かった。

何も出来ず、何かに挑戦する勇氣も失い、助けの手にすら怯え、沢山親に迷惑をかけた。

「そんな俺が、この世界でもう一度人生を歩めるのは奇跡だって、救いだって思った！何も出来なかった俺でも、前世の知識と経験さえありや多少はマシな人間になれると思つてた！けど、そんだけアドバンテージがあつても俺はお前に追いつけなかった」

自分よりもずっと年下な奴が、当然のように自分を超えて行く。

文字はこの世界基準だったので平等なスタートラインだと思うが、それ以外は学校で勉強したことがばかりだったから、ルストよりもずっと上手くできる筈だった。

なのにルストは、全部俺より上手くなった。

努力してるのは知っている、才能だけじゃないなんて百も承知だ。

けど、けど。

「いつもそうだった！仲の良い奴は皆、俺の手が届かなくなるくらいに上に行く！」

俺にだって、小さい頃は友達を作れたし、遊んだりもした。

けれど、俺は馬鹿だから友達が行くような良い学校に行けなかった。

そいつらは『ずっと友達だよ！』とか『お前のことは忘れない』なんて言っていて、俺もそれを信じてずっとそいつらのことを忘れなかった。

けれど、時の流れというのは残酷で。

久しぶりに会えた友達達は、俺を見て困ったような顔をしてこう言った。

『どちら様ですっけ？』

そりゃそうだ、自分より下の奴と関わる程無駄なことは無い。

人間というのは自分と同じ程の能力がある奴同士でつるむものだ。

無能は足切りして、有能と関わって生きて行く、そういうものだ。知っている筈なのに。

「なあ、ルスト。友達つてのは、能力が、立場が釣り合うような奴同士じゃないとなれないんだぜ。友達同士でいたければ、そいつと同じくらい凄い奴にならなきゃダメなんだよ」

「僕は、そんな風に思っちゃいない！どれだけ立場が違っても君のことを友達だと、親友だと思ってる！だって君は、僕のことを救ってくれた人だ！絶対に忘れてなんてしない！」

「ああ、そうだな。あいつらも、同じようなことを言ってくれた」

きつとルストは本気で言ってくれているんだろう、そんなことくらい分かる。

けど、あの時のあいつらだつて本気で言ってくれたはずだ。

どんなにそれを言ってくれたところで、俺はそれを信じられない。

信じるべきなんだろう、けどもうあの時の経験をするのが怖い。

だから俺は、一歩前に進めずに立ち止まる。

「分かってるよ、ルスト。お前は良い奴だつて分かってる、分かってるんだよ。それでも、お前の周りに凄い奴が集まつてるのを見て、ああダメだつて思つちまつたんだ」

勇者の仲間は、それに相応しい実績と実力がある奴で構成されている。

騎士ジャステイは代々王に最も信頼されている貴族の長子であり、世界最高の肉体と守りの手法を持つ、あらゆる騎士の憧れであり目標。

闘士イヤルは竜人族唯一の生き残りにして、失われた秘術とされる気功法を使う最後の担い手。

魔導士リージェはただでさえ魔力量の多いエルフの中でも最も多くの魔力を、そして最も多彩な魔法を使う魔法の探究者にして魔法使いの到達点。

世界を救う勇者の連れとしてはあまりにも相応しい。

そして、そんな奴らと俺。

果たして友達にするならどちらかと言えば、まあ答えは決まっている。

「そいつらが隣にいるのに、俺が入る余地なんてあるわけ無いだろ？知ってるよこんなもんだあの嫉妬だ。俺がお前を信じる事が出来ないだけで、全部俺のせいだつて分

かっている。けど……!」

「あの、すいません。話に割り込むようですが質問いいですか?」

「え、あ、はい」

ふと、話の途中で魔導士リージェがおおずと挙手し、口を出す。

急に話したことの無い人に話しかけられ思わずそれまでの雰囲気ぶち壊しにするように敬語になってしまったが、気を取り直して質問を聞く。

「えーと……あなたは前世の記憶がある、と仰ってましたよね?」

「……?ああ、そうだ。信じられないかもしれないが、俺は——」

「いえ、それ自体は信じます。幾つか前例があることですし」

「え、前例あるの?」

初耳だった、そして他の奴らも初耳だったのかびつくりしてる。

ソフィート様だけは何も言わず成り行きを見守っているだけだが。

「はい。この世界で転生者と自身を呼称する者が現れたのは、初代勇者が周囲の人間に

そう言ったことが始まりです。それから度々、自身を転生者であると語る者が出現してきました」

「……初代勇者が、転生者？」

「本人の意向により隠されていますが、調べれば分かるはずですよ。そして、勇者となる者は代々、ルスト様を除いて全員が転生者である、という特徴があります。これは転生者と呼ばれる者達が生まれつき普通ではありえない膨大な魔力を所持しているからです。聖剣は一定の魔力を持つ者しか抜けず、その一定のラインを超えられる魔力を持つ者は転生者しかいないからです。これは、神が魔王を倒すために膨大な魔力を持つ者を他の世界から連れてくるためと考えられています」

「……は？」

「え、そうなの？」

突然告げられた真実に、思わず茫然とする。

かつてルストと旅をしていた際、魔法が使えるのではないかと期待を抱きとある魔法使いに自身の魔力量を測ってもらったことがある。

その時は『ゴミみたいな魔力量』と言われ魔法を使う道を諦めた。

だと言うのに、転生者は全員膨大な魔力を持っている？

俺だけが、それに当てはまっていない？

「前々からの記録で、勇者にとつて転生者であるということは秘密にしておきたいものであり、それを暴かれた場合にはかなりの不快感を示すことが多いという情報から、勇者にはそのことを伝えずにいる、という方針になっていたのでルスト様に関して多しことを伝えずにいるつもりでした。幾ら忌子と、初代勇者の子孫が常人よりも遥かに多い魔力量を持つていたとしても、転生者には及ばないはずなのでルスト様が転生者だということ前提で考えてましたけど、ルスト様は前世の記憶等は無いのですよね？」

「う、うん。無いよ」

「であれば、これは異常という他ありません。ルスト様は歴代の勇者達と比べても明らかに強い。事実測定しただけでも魔力が過去の勇者と比べて五割程多い。これではまるで、本来転生者が……あなたが持つ魔力が、ルスト様に上乘せされたかのようです」

「……何を、いつているんだ？」

「過去に、何かがありませんでしたか？例えば、何らかの魔物に魔法をかけられたとか。何か恐ろしい物に接触したとか、何らかの異常事態が」

「そんなもの、何も——」

『ズルい』

「何、も——」

『何故あなただけが？』

「なんだ、これ……？」

何かが、蓋をしていた何かの記憶が蘇る。

目の前には、人間とは思えない程に口を大きく開けた女の子。

『一緒だって、思ってたのに』

『あなたは私を裏切ったのね』

『ああ、逃げるのね。あなたなんて勇者になんかなれないわ、臆病者』

『あなたなんて——世界で一番、大嫌い』

「ひ、あ、ああ……!？」

「エンヴァア君……？どうしたの、大丈夫……？」

何かにひどく怯えた記憶、何かに嫌われた記憶、何かに何かを食われた記憶。

それは何時だったか、そうだ、あの時、村に魔物が現れた時。

俺は魔物から逃げた、いやあれは魔物だった？

俺は何から逃げていた？

「うわあああああああああああ！」

あまりの恐怖に叫び出す、思い出すのも憚られる程、何か恐ろしい体験をした。

それが何なのか思い出したくも無くて、ずっと蓋をしていた。

ルストと出会う前に、それはあったはずだ。

何があった？何が起こった？

思い出そうとする度に、全身の身の毛がよだち頭が痛くなる。

「エンヴァア君?!リージェ、一体何が!」

「恐らくは何らかの記憶を思い出したショックで錯乱しています!このままでは自傷行

為や、周囲を手当たり次第に壊しだす恐れがあります！すぐに——」

何かが、冷たいけれど安心する誰かの腕が俺を抱きしめる。

泣きはらした目で見上げると、そこには笑みを浮かべたあの人がいた。

「大丈夫ですよ、エンヴァ。大丈夫。あなたが思い浮かべる化け物は、もういません」

「……………う、あ……………」

「さあ、今は眠りなさい。あなたは私を守るんでしよう？」

「……………」

意識がゆつくりと落ちて行く、安心感で身体が軽くなる。

「おい、なんか知らんが多分あいつ倒した方がいいよな!？」

「当たり前だ、さっさと行くぞ！」

「気を付けて、あの魔物何かがおかしいです！」

色々な声が聞こえるけれど、そんなものはもう気にならないくらいに。

その人の匂いは、ぬくもりは、どこまでも心地よくて。

「——お前、エンヴァ君に何をした!!」

最後に怒り狂う親友の声が、ほんの少しだけ意識を揺さぶって。
それでも眠りに抗えず、俺はゆっくりと意識を失った。

この世界であなた、ただ一人

『エンヴァ、友達と遊ばなくていいのかい？』

『たまには家の手伝いなんてやめて、他の子と遊んでもいいのよ？』

優しい二人は、僕の頭を撫でながらそう言ってくれる。

父は村で唯一のパン職人で、他の村人たちより裕福だった。

けれどその分他の村人よりも忙しく、ほぼ毎日のように生地をこね、大量のパンを焼き上げる。

集中力と体力を使う仕事だ、父も疲れているだろうに、僕のことを優先してくれる。そんな彼らの優しさに、僕は何時だってこう答えた。

『大丈夫だよ、二人とも。僕は二人の役に立ちたいんだ』

そう答える僕を、二人は嬉しいような、困ったような目で僕に微笑む。

そんな毎日が、そんな幸福が、何よりも代え難いものであり。

そしてそれをエンヴァという少年から奪ってしまった自分に、反吐が出た。

『パン屋の息子エンヴァは天才だ。まだ十にもなっていないのに、文字が読めるらしい』『最近じゃ、あの迷惑な不良達を素手で懲らしめたらしいぞ。戦いの才能もとんでもないらしい』

『いつも両親の仕事の手伝いをしてるらしいわね。出来の良い子供を持って、ご両親は幸せ者ね』

皆が僕を褒めてくれた、皆が僕のことを偉いと言ってくれた。

けれど、僕は皆には言っていない秘密が、ズルがあった。

僕の人生は二回目で、ほんとは子供じゃなくて大人であつて。

文字を読めるのだから勉強したわけではない。産まれた時から言葉も文字も分かっていた。

戦いの才能だつて、本来なら僕では無く『エンヴァ』という少年のものはずであつて。

「よお、元気にしてたか？」

寝る前にいつも夢を見る、快活そうに笑う『エンヴァ』の夢を。

真つ白い空間で、僕と彼だけが存在する不思議な空間。

本来産まれるはずだった彼は、その空間の中でだけ会話ができる。

「友達とか出来たのか？俺が作れない分、一杯作ってくれよな！」

「二人と食べた飯、おいしかったか？」

「空ってどんな色なんだ？太陽ってそんな明るいのか？」

「……なあ、俺とお話してくれよ……」

無邪気そうに笑い、質問してくる彼の前で、僕は何時だって何も答えられない。ただうずくまって、壊れたスピーカーのように同じ言葉を繰り返すだけ。

『いめんない』

彼が産まれるのが正しかったのに、彼が生きているのが正しかったのに。

自分はその奪ってしまった、そのどうしようも無い事実が心で軋んでしまう。

何も答えることも出来ず、ただ自己満足の懺悔の言葉を吐き出すことしか出来ない。彼はそんな僕を見て、寂しそうな顔をして。

そして目が覚めて、あんな夢を見た自分に失望する。

人生を奪われ、家族を奪われた彼が罵声の一つも浴びせてこないだなんて、都合のいい夢だ。

都合のいい妄想を作り上げて、自分を正当化しようとする。

そんな自分を嫌悪した。

もう臆げにしか自分の前世のことを覚えてはいない。

前世の親の顔も、自分の名前も、大切な人と交わした約束も。

それでいい、最後には自分が消えて、彼がエンヴァになればいい。

何度だってそう願っているのに、僕はまだ未練がましく生きていた。

『——疲れるなあ』

ああ、そうだ。結局の所、二度目の人生を貰ったって。

幾らこの世界がファンタジーで、僕の身体が才能に溢れてて、幸せに生きれたとして

も。

前世の記憶が、価値観がその幸せの邪魔をする。

他人の身体を奪ったって、平気な顔が出来ればどれほど楽だったか。

全てに見知らぬ振りをして、そのまま人生を謳歌出来ればどれだけ楽だったか。

『オエ……』

生きていて常に不快感が付き纏う、これが自身の身体であることに不自然さを覚える。

他人の身体を自分が使っているという事実はどうしようも無い罪悪感と嫌悪感を感じる。

前世では傷だらけだった腕は、今は綺麗に整った細腕で。

髪は赤に、目は金に、不細工な顔は日本では滅多に見つからない程の美形で。

彼が持つべきだったものを全て、僕は奪った。

気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い

胃の中の物が逆流する、けれどそれを外に出すわけにもいかずそのまま飲み込む。

この世界では食べ物貴重だ、二人が働いて稼いだ金で買った食べ物が無駄にたく

無いし、家の中を汚すわけにもいかない。

気分が悪くなる、思わず咳き込む。

『エンヴァ、大丈夫？何か物音がしたけれど……』

『大丈夫だよ、ごめん。ちよつと咳き込んだだけだから』

心配して見に来てくれた母を安心させるためにそう言つて、無理やり吐き気を抑える。

二人にいつも心配をかけて、二人にいつも守ってもらっている。

自分は実はもう大人で、ほんとはあなた達の息子では無いんですと言えば、二人はどんな反応をするだろうか。

恨まれるだろう、憤怒するだろう、殺意を抱かれるだろう、殺されるかもしれない。

それが正しいはずなのに、それが怖くて声に出せない。

結局現状を維持したくて、何も言えずに日々だけが過ぎて行く。

☆○☆○☆

皆が遊んでいるのを見ても、「遊ぼ」の一言すらかけられない。

声がどもって何も発せない、誰かの顔を見て喋れない。

話しかけて嫌な顔されなにかとか、迷惑じゃないかなんてどうでもいいことを考えて結局何もすることが出来ず、楽な方向に転がっていく。

両親の手伝いをしているのだから、そっちのが人と喋らなくていいからだ。

結局の所、僕は何一つ成長なんて出来なかった。

ある日、父さんと母さんが街に向かうことになった。

『母さんと父さん、今日は街にパンを買いに行くの。お留守番しててほしいのだけど、大丈夫？』

『大丈夫だよ、二人とも。いつてらっしやい、良い子で待つてるね』

『……あー、ちなみに、お父さんの部屋にはとても甘くいいお菓子があるけど、食べたらいけないよ。とらつても甘いし美味しいけど、食べちゃいけないからね？』

『そんなに言わなくても勝手に食べたらいけないって。それじゃあ、いつてらっしやい』

何度も『食べちゃいけないよ！』という父に手を振り見送った後、椅子に座りぼんやりと窓を見る。相変わらず空は前世の世界と変わりはない。

『……ほんと、二人とも優しいなあ』

父と母からの愛情は、全て僕に向けられていい物では無い。

本当なら、『エンヴァ』という少年が一身に受けるべきだった、子供に向けられた親の愛。

それを自分が受けていることに、相も変わらず心が重くなる。

『いい加減、返せって言ってくれてもいいんだよ』

いつも夢で話をする、妄想かもしれない彼に語り掛ける。

ずっと前から一緒にいるのに、彼はずっと僕のことを責めたりしない。

今日は何があったか、料理はどんなものだったのか、友達は出来たのか。

そんな、他愛も無い話ばかりしてくる。

きつと、絶対、彼は僕のことを恨んでいるはずなのに。

『……ああ、畜生。狂人みたいだな、僕』

独り言をぼやきながら、適当に外をぶらつこうと扉を開ける。

風が髪を揺らす、太陽の眩しさに思わず目を薄める。

早朝の風は肌寒く、二人が風邪を引かないか心配になりながら一步外に踏み出して。

『ツわあ!?!』

何か柔らかい物が足に触れる感触、思わず尻もちをついて後ずさる。

一体何が触れたそれに目を向けて、さつき以上の驚きで声が上がらず。

『——お、女の子?』

家の前で倒れている少女は見たことも無いほど華奢で、触れれば折れてしまうような儂さを持った不思議な雰囲気の子で。

傷だらけの身体は、思わず目を覆ってしまう程痛ましくて。

『一体、何が……』

少女の様子を見て、ただごとではないことは分かるが、それ以外にはまるで分からない。
い。

なんでこんなところで倒れているのか、そもそもこんな子が村にいたかとか。そんな疑問がぐるぐると頭の中を駆け巡る中、ふと視線を感じ森の方に注意を向ける。

木々の隙間から、赤い眼光が僕を見ていた。

グルル、と漏れ出る唸り声は狼や犬のようで、恐怖で息を呑み彼らの狙いに当たりを付ける。

何故なのかは分からないが、おそらくあの獣達の狙いは——彼女だ。

『……大丈夫だ、やれる、僕なら、いや。エンヴァならやれる——』

殺意に満ちた眼を輝かせ、一步、二歩とジリジリと近づいてくる獣達。

どうやら僕を警戒しているようで、威嚇するように喉を鳴らしながら僕を見ている。

おそらくこのまま女の子を放置して逃げれば、無事に逃げられると思うけど——。

震える身体を抑え込み、玄関に置いてあった箒を手に獣達の行く手を阻むよう、立ち

塞がる。

それはきつと、正義感からなんて綺麗な理由では無く、彼女が殺されたのが自分のせいになるということが怖かったからだろう。

自分が逃げて、戻ってきた後には、点々と森に続く血の道が出来ている——そんな未来を想像し、そうなったとき自分の心は耐え切れまいだろうと考え改めて自分の弱さを実感する。

獣達は僕を敵と認識したのか、先ず意識がある方を殺すことにしたのでだろう。

ジリジリと、ゆっくり僕と少女を囲むように三匹がにじり寄ってくる。

心臓の音が喧しく鳴り響き、自分の息を呑む音が妙に大きな音に聞こえる。

——森から鳥の羽の音が響く

三匹の内の一匹、僕の背後にいた狼が、僕の喉笛に向かって飛び掛かる。

今まで経験したことのない、喧嘩ではない本気の殺し合い。

だと言うのに、僕の身体と脳はその状況での最適解を導き出すために動き出す。

僅かに屈み、狼が頭上を飛び越えようとする瞬間に、箒の柄の先端が狼の喉笛に突き

刺さる。

鋭くも無く殺傷性も無い木製の箒だが、子供離れした『エンヴァ』の筋肉であれば、狼の意識を奪う程に威力を出すのは容易なことだった。

嫌な音が頭上から響くのに顔を青ざめさせながら、仕留めた狼を掴み盾にし別の狼に突進する。

避けようとする狼の動きがスローに見える、どこを叩けば相手を殺せるのかがはっきり分かる。

足が悲鳴を上げるのも無視して方向転換、盾にした狼を避けようとした狼に投げつける。

それにより体勢を崩し、無防備となった頭に向けて箒を思い切り振り下ろす。ボキリ、という音がして箒が折れたが、狼はその一撃で意識を失った。

最後の一匹は、数秒の内に二体の仲間が倒されたことに困惑しているようだ。どこか怯えた目で、まるで怪物を見るかのように僕を見ている。

その目を僕は知っていた、ほんの些細なことで難癖を付けられ、村の不良達を相手にした時に、同じように仲間を倒された最後の一人が僕をそんな目で見ていた。

最初の内は考えたことなんて無かった、自分が誰かの人生を奪ったなどと。ただ単純に、異世界に転生できたことを喜んで、目一杯に楽しんでいた。

容姿も声も、両親すらも違うが、それでも自分は自分なのだと思え、根拠も無く信じられて

いた。

けれど、初めてこの世界で、この身体で戦った時、自分がまるで別人のように思えてしまった。

殴りかかってくる身の丈が倍以上ある男を相手に、当然のように即座に対応する体と頭。

心底目の前の暴力に怯えていた、恐怖していた、逃げ出したいと思っていた。

そんな自分の感情とは裏腹に、機械的に相手を傷つけ、倒し、壊すことを考える身体と脳。

十にも満たない少年が、喧嘩慣れた大人達を相手に傷一つなく勝利した。

そんな漫画のようなことを達成した僕に芽生えたのは——恐怖だった。

あまりに自分が思い描いた自分とかけ離れたこの身体を、この脳を、そしてこの才能を。

それらを見てようやく自覚してしまった、考えてしまった。

『この身体はかつての自分の物ではないのだ』と。

それからだ、夢で彼が現れたのは。

それからだ、自分が彼の全てを奪ってしまったのではないのかと考えたのは。

それからだ——自分はエンヴァという名の少年では無いのかと恐怖してしまった

のは。

『最後の、一匹!』

震える声でそう絞り出して、残った一匹を威嚇するように睨む。

狼は狼狽えながら、気絶している仲間を口で啜えて、ゆつくりと後ずさる。

『そうだ、それでいい……早く、どっかに』

『いただきます』

グシヤリ

何かがつぶれるような音と共に、狼達はその場から消える。

その後に響く、何かを咀嚼するような音が背後から聞こえてくる。

早鐘のように脳が警告を鳴らす。

その後ろにいる何かを全力で殺せと、生かしておくなと訴える。

身体は即座にその命令を実行するため全身全霊の力を籠め後ろにいる何かを殺そうと動き出す。

そして全力で振りぬいた拳が、後ろに存在する脅威に突き刺さろうとして——
彼女を見て、ピタリと体が硬直した。

品性の欠片も無く、口を大きく開け何かをかみ砕き飲み込んで。

美味しそうに屈託の無い笑顔を浮かべ、開かれた目に宿るドス黒い瞳を僕に向け。

この世界では存在すらしていない、ある国の食後の挨拶、この世界に存在していた者では知る筈も無いその言葉を発し、手を合わせる青白い肌を持つ彼女に。

『いちそうさまでした』

ニコリと牙のように生え揃う歯を見せ笑う、危険な香りを匂わせ佇むその姿に。

確かな強い意思を感じさせる、その深淵を映すかのような瞳に。

自分には無い何かを全て持つかのような、そんな彼女に。

『さて、それでは——あなたのお名前、聞いてもよろしいでしょうか？』

エンヴァアの脳が殺せと煩く喚く、エンヴァの体が殺させると暴れ回る。

けれどそんな物等無視してしまうくらいに、僕は彼女に向けて言葉を発したかった。

僕の貧弱な語彙力では、ある一言以外に彼女に向けられる言葉は無くて。

前世も含めて初めて芽生えた感情に従うままに、その言葉を口に出した。

『好きです！』

『スキさん、と言うお名前なのです。私の名前はグラトニカと申します、よろしくお願
いしますね！』

こうして僕は彼女、グラトニカから『スキさん』と呼ばれるようになったのだった。

☆○☆○☆

グラトニカと名乗る彼女は、僕に身の上話を聞かせてくれた。

なんでも人間と魔物のハーフである彼女は人間に近い身体を持つことから父親から
忌み嫌われ、殺されそうになってしまったところをなんとか逃げのびその果てにここに
辿り着いたのだと言う。

ちなみに名前の誤解についてはなんとか誤魔化し、本当の名前はエンヴァであるということはしつかり伝えた。

四六時中僕に向けてスキと言われるとちよつと精神衛生的に良くない。

『助けていただき、本当にありがとうございます。けれど私は父から追われている身。このままここにいてはあなたにも危険が及びます』

そう言つて立ち去ろうとする彼女は、明らかに無理をしている様子であつた。

せめて傷を治してからのの方が良い、そう言つたと彼女は少し困つた顔をしながらも、申し訳なさそうにその提案に応じてくれた。

彼女のことを心配して、ということもあるが、何よりの理由は初恋の相手である彼女ともつと長く一緒にいたかつたからだ。

我ながら安い男だと思つたが、二度の人生で一度も味わつたことの無い恋心の赴くままに、彼女と一緒にいたいと言つた欲望に従うことにしたのだ。

勿論人類の敵である魔物をずつと匿うわけにもいかないもので、両親が帰つて来るまでの間、という短い期間だつたのだが、そのほんの僅かな時間でも、グラトニカという少女と同じ時を過ごしたかつたのだ。

彼女の肉体は、とても弱かった。

少し走るだけでも息を荒げて動けなくなったり、歩いている内にしよつちゆう転びそうになったり、ちよつと目を離すとすぐに危ない目に遭う彼女と一緒に過ごす時間は、とても楽しかった。

好きな人に頼られ、役に立てている。そう実感するだけで、今まで嫌いだった自分のことがほんの少しだけでも好きになれる気がした。

両親が街に行つて、その後帰ってくるまでの時間は四日程度しか無い。

初めて両親の帰りが遅くなることを願うほど、その時間は充実していた。

『エンヴァアさんは、私のことを不気味だと思わないんですか?』

『え、なんで?』

『私は魔物ですし、あなたは私があの狼を食^くべた時の私を見てるはずですよ。なのに、怖がらないんですか?』

『……僕自身が、化け物だからかもしれないから、かな?』

『エンヴァアさんは人間ですよ?』

『そもそもエンヴァアじゃないかもしれないんだ、僕は』

『……どういふことですか?』

ずっと秘密にしていた自分の秘密を彼女にだけは明かすことにした。

自分が別の世界で生きた記憶があること、自分がエンヴァという少年の人生を奪ったのではないかと恐怖していること、それが周囲に、そして何より両親に知られるのが恐ろしいこと。

それらの話を聞き終えた彼女は、優しく微笑んだ。

『エンヴァさんは、自分のことを許せないんですね？』

『……うん、そうだね。僕は、僕のが嫌いなんだ。泣き虫で、臆病で、誰かに嫌われることを怖がって何もできないでいる。そんな自分が、何よりも嫌いなんだと、思う』
『なら、そんなあなたを私が食べてあげましょう』

『え？何を……?!』

僕の手を掴んだ彼女は、それを自分の口に入れ、甘噛みし始めた。

いきなりの行為に混乱する僕を他所に、彼女はあむあむと可愛らしい音を立てて僕の手を舐め回す。

その光景にどこか背徳感を覚える中、彼女はようやく俺の手を口から離した。

『これでもう大丈夫。あなたが大嫌いな「僕」は、私が食べてあげましたから』
『急に何を言ってるんだ、よ……？』

自身の口調に違和感を覚える。

まるで今までそうであったかのように自然と言葉が出てきたが、俺は今までこんな口調で話していただろうか。

今までであったはずの何かが消えるような感覚に、思わず彼女を見る。

『もう大丈夫ですよ、エンヴァさん。ようやく見つけた、私の仲間。この世界で唯一の、私と同じ存在の人』

抱きしめられ、耳元で囁かれる。

思わず心臓が跳ね上がり、顔が真っ赤に染まる俺の事など見えていないように、彼女は恍惚とした様子で言った。

『あなたが私を裏切らない限り。私はずっと、あなたの嫌いなものを食べてあげますか

ら。どこまでも、どこまでも一緒に、傷の舐め合いをしましょうね?』

そう言う彼女はとても、とても嬉しそうだったのに。

俺には何故だか、彼女がとても寂しそうな、迷子の子供みたいに思えたんだ。

☆○☆○☆

「……あ、れ?」

長いような短いような夢から覚める、後頭部に感じる硬くひやこい独特な感触と、可愛らしい寝息の音。

まさかと思いい見上げれば、そこには俺の頭を膝の上に置いている状態、所謂膝枕をしてくれていたソフイート様の寝顔があった。

「――!?!」

すぐに起き上がろうとするが、下手に動くとも最も大事な人の眠りを邪魔してしまうの

ではないかと思ひ直し、ソフィート様が起きるまで待機する作戦に切り替える。

ソフィート様の膝枕を堪能したいとかではない、断じて無い。

「……グラトニカ、か」

何故忘れていたのかは分からない、けれどたしかに自分には、ルストより前に出会った、初恋の人が存在していた記憶がある。

何故今頃になって思い出したのか、彼女はどうなったのか。考えるべきことは色々あったが、何よりもきになるのは。

「……やっぱ似てる、よなあ」

グラトニカという少女と、ソフィート様の顔は、まるで双子のように瓜二つだった。喋り方も、性格も、そして雰囲気も。

最大の違いは、グラトニカは人間のような肉体を持つこと、ソフィート様は水晶の身体を持つことだ。

「……聞くべき、だよな」

「何をですか？」

いつの間にか起きていたらしい主が、ニコニコと笑いながら俺に問いかけてくる。思わず飛び起きそうになるが、その拍子に主に傷をつけてしまうかもしれないので何とか抑え、ゆっくりと深呼吸をして冷静さを取り戻す。

「おはようございます、ソフィート様。……勇者達は、どこに？」

「なんとか逃げてきました。恐らくは私達を見失いあの場所から撤退しているでしょうね」

「ソフィート様が一人で、勇者達から逃げ切ったのですか……？」

「ええ、あなたが気絶していたので、止む終えずあなたを抱えて逃亡しました。奥の手まで使われちゃいましたけどね」

「も、申し訳ありません。俺が、不甲斐ないばかりに。あなたを守ると約束、した、のに……？」

何故だか、彼女の、グラトニカの顔がフラッシュバックする。

頭がジンジンと痛み出す、何かの蓋がずれていく。

思わず頭を押さえる俺の手を、ソフィート様は優しく包み込む。

「もう少し休んでいて構いませんよ、エンヴァ。あなたは私の大事な、大事な右腕なので
すから」

「けれど……」

「あなたには、次の決戦で大いに力を奮ってもらう必要があるのです。あまり根をつめ
すぎて、また気絶されても困りますからね」

「……ありがとうございます」

安心したせいか、再び強烈な眠気が襲ってくる。

せめてソフィート様の膝からは離れようとするが、彼女が俺の頭を優しく撫で回すの
で、無理に離れるわけにもいかず、結局また彼女の膝の上で寝てしまう。

そんな俺を見て微笑むソフィート様は、ほんの僅かな声量で、何かを呟いて。

けれどそれは俺の耳に届く前に霧散して。

そうして俺は再び、夢の中に落ちるのだった。

「お休みなさい、エンヴァ」
「世界で一番、大^大好^嫌きですよ」

謁見

「勇者は何をしているんだ!? 早く魔王を倒してくれ、これ以上被害が出る前に!」

「魔王を倒すのがあなた達の役目でしよう!」

「今すぐにも魔王のいる場所へと行き決着をつけるべきだ!」

王城の外から口々に叫ぶ者達と、それを諫める兵士達。その争いを見下ろしながら、イヤルは大きく溜息を吐き不機嫌そうな顔で民衆達を睨んでいる。任務から帰った後、少しでも休息を、と思つた矢先のこれである。不機嫌になるのも仕方ない。

「なあ、ジャステイよお。俺達一応『魔王を倒して』って頼まれる側だよな? なんてこう、あいつらはあんな命令するみたいにかうでんだよ」

「仕方あるまい。王都とさほど遠くない位置にある都市セリティアが占領されたのだ。民衆が次は己達の番だという不安で多少気が荒くなるのは仕方あるまい」

「その癩癩に巻き込まれちゃう私達としては、勘弁してほしいものですけどね」

魔王と対峙し、魔王の娘を名乗る者には逃げられ、おめおめとそれらの報告のため王都に帰った後、事態は三つの出来事により急激に変化した。

一つ目は、魔王自らが出陣し、単騎で国の主要都市の一つを占拠したこと。

これまで復活したという情報だけはあったものの、姿を見せず魔王城に閉じこもるばかりであった魔王がついに動き出した。この情報は人々に恐怖を与えるには十分すぎた。

元より魔物と人類は長きに渡り戦い合い、殺し合ってきた。人類は一部を除き、魔物に比べ力も魔力も大きく劣る。しかしそれを補うために、集団での戦いを徹底して鍛え上げてきた。

一の魔物に十の兵士を殺されるのであれば百の兵士を、百の兵士が殺されるのであれば千を。

それが古くから伝わる人間の戦い方であり、その戦略は幾ら強くても仲間との連携を取ろうとしない魔物達を倒す数ある方法の一つだった。

そしてそれでも敵わぬのであれば知恵を、それさえ通じぬのであれば道具を。

そうやって魔物達に対抗してきた人間だが、ただ一つ。人類が束になっても勝てぬ物があった。

魔物達の指揮者、人知を超越せし魔物達の王。誰が言い始めたか、魔王と呼ばれたそ

の存在は、数百年も前に初めて姿を現した。本来であれば統率等できようはずもない魔物達を一つに纏め、人類のように策を練り、道具を使い、徒党を組む。

魔物にすら破られぬようにと人類が何百年もの年月を経て作り上げた絶対の要塞でさえ、魔王が放つ滅びの魔力により一日と持たず廃墟と化した。

今まで拮抗していた魔物と人類という種族間の戦争は、突如現れたたった一体の魔物により決着がつきかけていた。次々と人類の主要都市を占領し人々に絶望を与えた恐怖の象徴。もはや人類に成すすべ無し。

後に聖剣と呼ばれる剣を作り上げ、その剣にて魔王を打ち取った初代勇者が現れるまで魔王による恐怖は続いた。その意思を継ぎし後の魔王達に宿る人類に対する悪意と敵意、そして魔王の象徴である滅びの魔力を、今なお人類は恐れている。

今代の魔王は長い間人類に対し明確な敵意を見せず、僕が聖剣を引き抜くまでの間も何ら動きを見せなかった。魔物の動きは活性化し徒党を組みだしはしたが、それだけだ。魔王本人が戦場には出ようとせず配下の部下に任せきりでいたからこそ勇者がいけない間も持ちこたえることが出来た。故に人々は今までとさほど変わらぬ日々を過ごし、恐怖を感じずにいられたのだ。

しかし、ついに魔王は現れた。

明確な敵意を持って、人類に仇なす最悪の敵の出現に、人々は怯え混乱する。

『早く魔王を討つてくれ』

王都に帰ってきた僕達に、そう口々に言い放つ民衆達。

自分達は何もしていない癖に、魔王が現れようと何もせずにただ傍観し、自分達が危険が及ぶと理解した瞬間に早く助けてくれと要求する自称無垢なる人々達。

反吐が出そうな程に忌まわしい。相手のことを考えず、自分が助けられるのは当然だ
と思ひ込む。救いようがない奴等。

『君と同じだね』

「五月蠅い、黙れ」

ふと呟いてしまった言葉に反応して、皆が僕の方を見る。自分が口走った言葉に気づき、罰が悪くなつてそっぽを向いた。

最近は何に幻聴が酷くなっている。今までは夢の中だけだったのに、エンヴァ君と再会してからはずっとあいつが語りかけてくる。

不快だ。気にしないようにしてるのも限界だ。あのためきへの報告が終わったら、リージェに相談しなくては。

「……勇者様、あまりここにいては気分を害します。転移魔法で、適当に静かな場所に――」

「大丈夫。もうすぐ王様から話があるだろうしね。それに……」

部屋に近付いてくる、大勢の小さな来訪者達に気づいて口端を緩ませる。

自分が助けた子供達。かつては忌子と蔑まれ、今は私の従者として働いている、かつての私と同じ境遇を持った、私が勇者をしている限りは安寧な生活を約束された子供達。

彼等彼女等は、私が帰ってきたとみるや目を輝かせて駆け寄ってくる。

「勇者様！帰ってきて良かったですね！お帰りなさいませー！」

「お疲れですよね？お風呂用意しておきました！ゆつくりと休んでくださいね！」

「その、勇者様のためにお菓子作っただけです！休息中でお腹が空くことがあれば、良かったら……！」

騒がしいけれど、嫌いでは無かった。誰かが自分を慕ってくれているというのはそれだけでも嬉しいものだ。僕は子供達に勇者としての笑みを浮かべて言う。

「ありがとう、皆。けどこの後すぐに王様とお話しなきゃならないんだ。後で遊んであげるから、いつもの部屋で待つておいてくれないかな？」

「はい！お待ちしております、勇者様！」

子供達は嬉しそうに頷いて部屋を出ていく。仲間達はその光景を微笑ましそうに見つめている。

「勇者様は子供に好かれていますね」

「あの子達がいい子なだけさ。……本当に、良い子達だ」

きっと僕と同じか、それ以上に悲惨な過去があるはずだろうに。

世界を憎み、理不尽に怒り。人格が歪み、悪に身を落としてもおかしくは無かったはずだ。

けれど彼等は僕とは違い、真つすぐに育っている。

僕が勇者になり、あの子達が保護を受けたからでもあるのだろう。けれど、一番の要因は。

「あの子達は過去を許せた優しい子達だ。理不尽に負けず、いつか救われると信じ生き抜いてきた。僕のように自棄にならずに」

僕には救いがあった。彼の手により地獄の底から救い上げられた。そんな僕がすべきことは、僕も同じように彼を救いあげることだった。けれど僕は、逆に彼を地獄の底へと突き落とした。

両親が言ったことは正しかった。私は災厄を引き起こす者だった。

僕が産まれず、彼が、彼でなくてもあの子達の誰かが聖剣を引き抜けばもつと上手くやれたのだろう。少なくともこんなことにはならなかつたはずだ。

過去を誰のせいにもせず、救いの手には救いを返し。正義を確かに確認し、正道を歩みだす。そんな子供達の姿は、僕にとっては眩し過ぎる。

「僕はただの切っ掛けだ。あの子達ならきつと」

「あなたは他人に期待し過ぎです」

ピシヤリ、とリージェは僕の言葉を両断する。

思わず固まった僕に、彼女は厳しくも優しい声色で語り掛ける。

「あの子達はあなたが思う程強くも、遅しくもありません。あなたが勇者になったからこそ、あの子達は救われた。あなたがその境遇に負けず、旅を経て王都に到達し、聖剣を引き抜いた。それがどれほど困難なのか、あの子達は、私達は知っている」

「違う。僕は何も出来やしなかった。僕が王都まで辿り着いたのは」

「忌子と言われ、蔑まれたあの子達を救い、ああなるように導いたのは間違いないあなたです。それが偶然であり、あなた自身の意思で無かったとしてもあの子達は救われた。それを否定することは、あの子達を否定することと同じです」

「……そう、かな」

「そうです。自分がいなくても、等と言うのはやめるべきです。その言葉はきつとあの子達を傷つける。救ったという事実こそ胸を張りなさい」

「そう、だね。ありがと、リージエ」

リージエは真摯な目で僕を見る。諭すような、導くようなその言葉は彼女が人間とは違う長寿の種、人生経験が豊富であるエルフであるからこそできる物なのだろう。

まるで、エンヴァア君の両親のようなその目に僕は思わず頬を緩めて頷いた。

「よろしい。ではそろそろ行きましようか、皆さん」

「……お前つて時々ババくせーよな」

「ぶん殴りますよ?」

席を立ち、謁見の間へと歩みを進める。皆は顔を引き締め、まるで戦場に出るかのような出で立ちで僕の後ろについてくる。

あいつと会話するだけでも気が滅入るが、そうも言つてられない状況だ。魔王の介入。魔王の娘を名乗る魔物。そして、私と対等に戦える剣士——エンヴァ君の存在。自分達だけの判断で動くのは難しい問題ばかり。国王の指示を仰ぎ、慎重に動かなければならない。

「なあルスト、聞きたいことあるんだけどよ」

そも、何故彼があんな奴に手を貸しているのだろうか?

あの女は見るからに邪悪で、まともな風には見えなかった。彼もあの女の危険な気配には気付いているはずだ。考えられるとすれば……魔法を斬つたあの剣を交渉材料に仲間に引き込んだ?

「……おーい、ルスト？」

確かにあの剣の……あの女の体の特異性は常軌を逸する物だ。魔法を斬る剣など聞いたことも無いし、あつたとしても凄まじい速度で飛んでくる魔法を斬ろうとする奴なんていない。物によっては音を超えるような速度で飛んでくる魔法を剣で斬ろうという出鱈目なこと、出来るはずも無いししようとも思わないだろう。

僕との戦闘での彼の戦い方から見ても、あの剣の耐久力は恐らく鉄よりも脆い。魔法を完全に防ぐことに長けてはいるが、物理的な衝撃には弱いのだろう。そんな剣を受け取ったとしても、彼があの子の下に着く理由としては薄いはずだ。むしろ、彼女に渡されたからこそ使っている、と考えるべきだろう。

彼は義理堅い人間だ、昔僕と一緒に買った、出来の悪い聖剣のレプリカをずっと使っていた。思い出や思い入れを大事にする彼のことだ、あの剣には、あの女には相当の入れ込みがあるはずだ。

そう、恐らくは僕のことなどよりも。

「おいこら、聞いてんのか？」

あの女はエンヴァ君の何だ？

彼とあの女に何があった？

彼があの剣を握っているのを見るだけで、体が凍るように冷たくなる。

何故あの人の隣に、あんなのが——

「いった!？」

後頭部に走る痛みに思わず顔を上げると、呆れたような顔で僕を睨むイヤルが。

他の仲間も心配そうに僕を見ていて、ようやく自分が考え事に集中しすぎていたことに気づく。

「お前、あの後からずっと変だぞ。大方あの変な剣持つてた鎧野郎のことだろ？あいつとどんな関係があったのか、いい加減はつきりさせやがれ」

「イヤル！貴様勇者様になんてことを……!」

「顔は見えなかつたが、間違いねえ。あの剣筋はお前が親友だのなんだと言つてた、玩具みてえななまくらを使つてた奴の剣だ。あいつについてもお前、何も語らなかつたよ

な

ジーンと痛む頭を押さえながら、イヤルと向き合う。

「リージェもジャステイも言い出さないなら俺が言う。あいつは何だ？ほんとにお前の親友なら、なんでお前を殺そうとした。リージェが言つてたことについても気になるし、色々謎だらけだ。いい加減、情報のすり合わせくらいするべきだろ」

「……彼は僕の親友で、幼馴染だ。彼があんなになつてるのは……」

それ以上言葉が続かず、黙り込む僕に苛立たし気なイヤル、それを咎めるように睨むジャステイ。険悪な空気が漂うその場を、リージェが手を叩き諫める。

「そんなことやつてる場合ですか。今から王との面会ですよ。イヤルも、その話はこれが終わつた後にしなさい」

「わーつたよ。話はこの後だ。その時は絶対話してもらうからな」

「わかつてる。まずは、これを終わらせようか」

ひとまず落ち着き、王と会う覚悟を決めた僕達は玉座への扉を開く。扉を開き、無駄に豪華なカーペットと、煌びやかな燭台や高いだけの鎧を纏った護衛騎士達を一瞥しながら玉座へと進む。

相変わらず彼らは腫物を見るような目を向けてる癖に、形だけの賛辞を僕に送ってくる。それなりの期間を勇者として過ごしたが、彼等からの私に対する感情は最後まで変わらなかった。

忌子の勇者。

それが彼らにとってどれだけ面倒で、許しがたいものかは僅かな期間だけでもよく分かった。

彼等は怖いのだ、忌子達が力をつけるのが。

迫害し、排他し、縛り付け。力を付けぬよう、復讐など考えられないように、徹底的に苛め抜いた忌子の中にポツリと、その気になれば国を亡ぼせるような奴が現れた。

恐怖するのは当然だ、嫌悪するのは当然だ。何せ忌子達が復讐の刃を最初に向ける相手は、忌子達を迫害するよう仕向けた国そのものに決まっているのだから。

「勇者様、あまり不機嫌そうな顔をしていては……」

「分かつてる、分かつてるよりージエ。大丈夫」

形だけの賛辞に、手を振って応える。対応を間違えれば、また忌子は迫害される者達へと変わる。僕が勇者としての責務を全うしなければ、大勢の僕と同じ苦しみを味わう子供が現れる。

それだけは、絶対に許してはならないことだ。

だから愛想を振りまく。自分に害意がないことを証明するために。勇者として戦うと示すために。自分が敵でないことを伝えるために。

いつもなら、簡単に上手く行くのだが。

「僕の顔、ちゃんと笑ってる?」

「笑えるくらい目え据わってる。怖がらせるだろうから前向いとけ」

今日だけは、少し上手くいかないらしい。イヤルから指摘を受けて、僕は愛想笑いをやめて前を向く。トランペットの音と共に、膝を地につけ王を称える臣下達。仲間もそれに倣って礼を取る。

正直やりたくはないが、やらなければ面倒なことになるので僕もそれに従う。

僕は王が嫌いだ。嫌いな理由は幾つかある。けれどその最たる物は。

「よくぞ帰つてきた、勇者ルストよ」

空っぽ。何度聞いても、王の声は中身が無い。

僕は人の心を読み取るのが苦手だ。エンヴァ君のことを理解できなかつたが故に彼を傷つけたし、今だつて仲間のことさえよくは分からない。

でも、一つだけ僕にも分かりやすい感情がある。欲望だ。

エンヴァ君は昔から燃え滾るような英雄願望があつた。何かを成したい、何かを成し遂げたいという想いが言葉の節々からも感じ取れた。剣を向けあつた時でさえその炎は収まっていなかつた。

リージェは止め処なく湧き出る知識欲がある。自分の知らない、知ることが出来ない何かを、知つてはいけない何かを求めているような、そんな少しだけ危うい願望がある。ジャステイはああ見えて出世欲がとて高く、同時に民を守りたいという願いをいつも持つている。エンヴァ君に近く、されど遠い願望だ。

イヤルは、よく分かんないけど多分強くなりたいた願望がある。聖剣無しならば僕と互角に打ち合える位だし、今となつては彼一人しか扱えない特殊な技術もあるので必要とは思えないけど。

欲望の大きさに問わず、皆何かしらの欲を抱えているものだ。けど、ただ一人。この王には、それが何も無かった。

「本来ならば休ませてやりたいところだが、おぬしも知つての通りついに魔王が姿を現した。このままでは数多くの犠牲者が出てしまう。よつておぬし達にはまた、旅に出てもらうことになるのだが」

王は冷たい瞳を僕に向ける。ぞわり、と全身を駆け抜ける悪寒。

イヤルは僕の笑顔が怖いと言つていたが、これに比べればずつとマシだろう。向けられなければ分からないが、この男はいつも仮面をかぶっているだけだ。

親しみのある王を演じた方が平和な国が続くと知つているから、こうやつて笑つてるだけ。必要となれば民を容易く切り捨てるだろうし、家族だつて簡単に捨てられる。

そしてきつと、自分の命すら捨て駒にする。

「今のおぬしらでは、恐らくは魔王に勝てぬ」

ザワツ、と周囲に控えていた家臣達が動揺を露わにする。

認めたくはないが、事実だ。

「魔王の力は確かに想像以上でした。少なくとも僕一人では、魔王に勝てるかは分からない」

「にも関わらず戦いに挑もうとするのは、お主と互角に渡り合った黒騎士の存在故か？」
「……どこでそれを？」

敵意を漏らしながら、王に問う。普通ならば不敬罪もいとこだが、本来王を守るべき兵達は気迫に飲まれるばかりでなんら行動を起こさそうとしない。

しかし王はいつも通り、王としての最善を、誰もが求める王の姿を貫き続ける。

「ほっほっほっ。儂もリージェ程ではないが魔法の嗜み程度はあるのでな。おぬしの活躍はいつも見守っておる」

思わず出かけた舌打ちを引つ込めて黙り込む。イヤルも不快そうに眉を顰める。

見守っている等と通りのいいことを言っているが、要は監視だ。ジャステイとリージェは予想していたことなのか大して動揺する様子もないが、それでも良い顔はしてい

ない。

「そして、お主の考えることも多少は分かる。あの黒騎士と共闘することができるかもしれない。そう考えているのだろうか？」

「……」

凶星だった。

甘い考えであるのは重々承知だが、それでも彼が勇者になるのを諦めるとは、今でも思えない。愚直なまでに鍛えぬいたその剣は、全てが魔王を倒すため、勇者になるためと知っている。

だから、彼と戦うこと自体はずっと前から覚悟していた。いずれ聖剣を超える剣技すら身に着けて、僕を倒し聖剣を取りに来るなんてことは想像できた。

想定外だったのはただ一つ。彼の隣にいるあの怪物の存在だけだ。

「はい。魔王を倒す、その一点だけならあの黒騎士との利害が一致すると考えています。王も見たはずです。彼はあの時、私たちと共に戦ってくれました」

「たしかに、魔王を倒すだけならば協力できるかもしれない。だが、魔王を倒した後それ

らがどうするか？それはお主とて分からぬはずだ」

「もし彼が人間に害をなすというのなら、私が彼を倒します」

勿論、嘘だ。

おそらくは、その時僕は彼を倒せない。彼は今なお強くなっている。きつともう一度戦えば、聖剣の力さえ超えて僕の首に刃を突き立てる。

もし私が彼を倒せるとしても、私は彼を倒さない。倒せるはずもない。

私は、僕は。きつと、彼に倒されることを望んでる。

「できれば勇者であるお主のことは信じたい。だが、魔王との闘いで疲弊するであろうお主が、あの黒騎士を倒せるかは怪しいところだ。故にだ、勇者よ」

二度、手を叩く。訝しむ僕を他所に、どこからか現れた魔法使いの男が王に何かを手渡した。

それを見たリージェが目を見開いて立ち上がる。周囲の衛兵はその無礼を注意しようとして口を開きかけるが、王が片手をあげ制止する。

「なっ!?それは、まさか」

「やはりお主は知っているか、リージエ。お主の見立て通り、これは本来なら門外不出じや。代々王家にしか伝えられぬ、禁断の歴史が綴られた巻物。それを今、おぬしらにも伝える時が来た」

リージエの目が怪しく輝く。

彼女がまだ見ぬ発見をした時に発する、危険な予兆だ。普段は僕達を諫める立場のリージエが、一転暴走するときに見せる目。

もう止めても聞かないだろう。それに王からの提案だ、逆らうわけにもいかない。

「その禁断の歴史に、打開策があるというのですか」

「リージエがあゝの黒騎士に言った言葉、覚えているか?」

覚えている、忘れるわけもない。しかし同時に、忘れたくもある。

本来の勇者が、彼だったのかもしれないこと。そして、彼の勇者としての資格を僕が奪ってしまったかもしれないこと。

考えたくもないことではあるが、考えなくてはいけないことだ。

「本当の勇者が、彼かもしれないということですか？」

王と僕らを除く全員がざわめき立つが、王はそれを制するように片手を上げる。

「否、それは間違いじゃ。真の勇者はお主をおいて他ならない。そも勇者の素質とは聖剣を引き抜くことただ一つ。あの男はそれが出来なかつた時点で、勇者になることはありえない」

「けど、リージェは言っていました。『勇者の素質』とは、異なる世界……前世と呼ばれる場所で生きた記憶を持つことだと」

「それ自体はあまり意味を為さぬさ」

王は静かに書を開くと、書から湧き出た魔力が周囲の空間を捻じ曲げていく。

外界に存在する、王が望む対象以外。つまりは、王と私達を除く全ての対象が空間から弾かれ、私達は青い光が灯る空間へと閉じ込められる。

「これは、転移魔法？ いや空間魔法でしょうか。遙か昔に、こんな高度な魔法が組み込ま

れた書が既にあつただなんて……。製作者とぜひ一度会つてみたいですね」

「この光は、文字か？私の知る言語ではないようだが……。!?」

「おい、ジャステイ!?!」

ジャステイが空間中に存在する文字の一つを指でなぞつた瞬間、彼は頭を押さえる。

戦闘においても決して膝を折るまいと振舞つているジャステイが苦痛を感じているということは、それは余程の痛みなのだろう。

彼はゆつくりと息を吐きながら答える。

「……下手に文字に触るな、イヤル。おそらくこの文字は、世界の歴史そのものだ」

「ああ？なんだそりゃ」

「なるほど。過去視の魔法が、この文字一つ一つに込められているのですね？」

「はあ!?!」

魔法を用いたとしても、未来や過去に干渉するということは不可能だ。

しかし、干渉ではなく観測なら話は別だ。魔法を極めた魔法使いは未来視や過去視を行使することが出来、特に未来視は魔法の中でも最高位の術として伝えられている。

とはいっても、それほどの大魔法を使うには代償も安くはない。故に未来視を扱えるリージェも極力未来視の使用は避けるし、過去視とて必要な状況以外では使用を控える。

そんな大魔法が、この空間には何百、何千と浮かんでいる。

イヤルでなくとも思わず叫ぶ。難易度もそうだが、何より恐ろしいのは。

「この空間をつくるために、果たして何人高位の魔法使いが犠牲になったのでしょうか。それを考えると、少しワクワクしてしまいます」

「……ワクワクするの?」

「はい! 自身が残した歴史が後世に残る。そんな榮譽を死した魔法使いたちは得たのです。魔法使いの一人として、彼等の横に並び立ちたいと思うのは当然ですよ」

「僕には理解できそうにないなあ」

強力な魔法を使うには、代償が必要だ。

腕、足、果ては心臓。寿命や命、もしくは家族。魔法使いが人知を超越した力を扱う時、必ずそれらの内何かが失われる。過去視と未来視程の大魔法となれば、リージェですら内臓一つ犠牲にするほどのものだ。きつとここに歴史を残した魔法使いたちも命

を代償にしたのだろう。

僕にはそうやってできたこの文達が、どうにも血なまぐさいものと思えた。

「勇者よ。お主に見せねばならぬのは、勇者達の、そして魔王の歴史。なぜお主が勇者となったのか。そしてなぜ黒騎士が勇者になれなかったのか。それを知らねばならぬ時が来た」

「……」

王は一つの文字を指さした。

果たしてそれがどんな歴史なのかは、触ってみなければ分からない。けれど、見ただけでもなんとなく理解できる。あの歴史は、きつと。

闇に葬り去られたものなのだろうと。

一步、それに近付く。

早鐘のように心臓が鼓動する。

知りたいという想いと、理解してはならないと叫ぶ本能が拮抗する。

『知っていいのか?』

「知りたいんだ」

聞こえてきた誰かの声に背中を押される。

いや、違う。その声の言うことが気に入らなかつた。なぜかは分からないが、こいつのいうことには従いたくないと何かが訴えている。

二歩、それに手を伸ばす。

あとほんの一步で、僕の指はそれをなぞれる。

王は相も変わらず中身の無い笑みを浮かべて、仲間は心配そうに僕を見守る。大丈夫だ。そう仲間に伝えるため、笑みを浮かべてまた一步近づいた。

三歩。指がその文字をなぞってしまふ。

瞬間、脳内を駆け巡る魔力の奔流。自身がどこかに飛ばされるような僅かな浮遊感。気づけば、そこは。

「……ええ？」

見紛うことなどありえない。

忘れることなんてありはしない。

だって、この場所は、この光景は。

「エンヴァ、君？」

きつとそれは、私と会う前の彼だった。

私と出会い、そして私を救ってくれる前の彼の姿だった。

泣いていた。一度も涙を見せたことが無かった彼が、子供のように泣いていた。

泣きじやくる彼の前には、私以外の誰かがいた。

幼い日の彼が、一人の少女に抱かれている。

一見すれば微笑ましい光景。けれど、何故だ？

胸が軋む。それをしてはいけないと、無いはずの記憶が訴えかける。

少女は、どこまでも蠱惑的に、どこまでも墮落的に言葉を発する。

『ようやく見つけた、私の仲間。この世界で唯一の、私と同じ存在の人』

彼からは見えない、彼を抱きしめた後の女の顔は。

まるで悪魔のように、酷く酷く歪んでいた。

勇者の記憶

私が知らない彼を見る。^{エンヴァ}

泣き虫で弱気だけど、礼儀正しく行儀の良いかつての親友の姿を見る。

そして、私が知らない女の子に恋をしている彼を見た。

まるで絵本のように、エンヴァ君と彼女の日常が流れていく。

少女と少年、一見しただけではさほど年の差も無い。少女は少年の手を引いて、少年は少女の手を掴み顔を赤らめる。少女はそれを見ておかしそうに笑う。

まるで昔の私とエンヴァ君を見ているようだった。違いと言えば、手を引いているのがエンヴァ君では無く彼女であるということだ。

『な、なあグラトニカ！今日も遊びに行こう、ぜ！』

『ええ、勿論。口調も随分と男らしくなってきましたね？』

『お、おう！何せ俺は、勇者になる男だからな！』

私はこの時初めて、エンヴァ君が勇者になりたい理由を知った。

『俺が勇者になれば、グラトニカの夢を叶えられるんだろ?』

『ええ。あなたが勇者になり、私の父親である魔王を倒す。そして私が、彼の後を引き継ぐのです。そうすれば、この悲しい戦争は終わりを迎える、はずです』

『なら、俺もつと頑張るよ!グラトニカの夢が叶えられるよう、もつと!』

彼女、グラトニカと名乗る何者かがエンヴァ君に語ったことは思いのほか善良だった。彼女は父を殺し魔王となり、人類と魔族の戦争を終わらせようとしていると語った。

そして私が知らなかったこともいくつか明らかになった。

勇者と魔王というのは、遙か昔から転生者という存在しかたぬものらしい。そしてエンヴァ君は前世の記憶とやらを持つ転生者で、グラトニカと名乗る彼女もまた、転生者であるということ。

『フツッ!ありがとうございます、エンヴァ。そのためにも、もつともつと強くならなくてははいけませんね?お父様を倒せるくらいに、強くならないと』

『うん!あ、違った。おう!……ん、まだ慣れねえなあ、これ』

『まだ不自然かもしれないですね。あなたの身体に住み着いている、本来エンヴァアとなるはずだった少年の魂と、あなたの魂の融合は少しずつ進んでいますけど……まだ、完全にはできていないのでしょうか？』

『あー……なんか、まだダメって言われるんだ。グラトニカから、記憶を返してもらえっ
て』

『それは難しいですね。だってあの記憶があれば、あなたはまた弱いあなたに戻ってしま
う』

彼女はエンヴァア君の記憶……前世の記憶の一部を、喰らいつくしたこと。

魔王と勇者には、各代でそれぞれ常軌を逸した能力を与えられる。エンヴァア君の異常なまでの剣才もそれらしい。そして本来は魔王となるはずだった彼女の能力というのが、喰らう力……相手から何かを奪い、それを自身の物にできるといふものだった。

その力を持って、彼女はエンヴァア君の前世の記憶を喰らい、エンヴァア君に自信を取り戻させたという。彼の口調の変化もまた、変わったのではなく本来の物に戻っただけというこ
とらしい。

『そんなの不味い記憶、なの？』

『はい。とても凄惨な記憶ですし、必要のないものなんです。だから、どうかもう一人のあなたを説得してください、エンヴァ。二つの魂が合わさりようやく、勇者と魔王は完成するのです』

『グラトニカも、もう一つの魂つてやつと融合したのか？』

『……ええ。とても悲しかったです、そうしなければこの力を得られなかったのです』

『そっか。じゃあ頑張つて説得してみるよ！とりあえず今日はチャンバラごっこしようぜ！新しい必殺技作ったから、見てほしいんだ！』

そう言つて、彼はびよんびよんと飛び跳ね少女を急かす。少女は苦笑し、慣れた手つきで太い木の枝を持つて。彼と手を繋いで、森の奥へと足を踏み入れる。

吐き気がした。ここに至つてようやく私は気がついた。彼の不安定な精神の正体に。前世の記憶とやらを、彼は私と一緒にいる時殆ど表に出さなかった。そもそも、彼がそれを持つなら私とその違和感に気づかないわけもない。間違いない。

あの口調が、本来の物だと？ふざけている。

あれは幼くなつただけだ。人生経験が不自然に無くなつたが故に、歪に幼くなつていく。

昔彼の両親に聞いたことがあつた。ある時から、彼は元気になつたが少し行儀が悪く

なつたと。

二人は親に子供らしいところを見せてくれるようになった、と解釈していた。

けれど実際は、他人に無理やり退化させられてしまっただけだ。思えば、彼は知識が豊富なのにそれを感じさせない幼さを持つ、不思議な人間だった。

もし、彼がああ魔物に騙され良いように使われているのだとしたら――

「許せない」

直感的に理解する。あの女は、以前の戦闘で私達の前に姿を現したあいつだ。

姿形は変わっているが、性根や口調までは変わっちゃいない。まるで見下すかのよう
に私達と彼を見る、どこまでも濁り穢れたあの女の目だ。

ただ、あの時と違う点が一つだけあった。

エンヴァア君を見る目は、あの時と違いどこか情のようなものを感じさせた。

「……許せないはず、なのに」

きつとエンヴァア君にとって、彼女こそが光だったんだ。

私にとってのエンヴァ君のように、彼にとって彼女こそが唯一信じられるものなんだと、彼の笑顔を見て理解してしまう。そして笑顔を向けられる彼女もまた、悪い気はしていないらしい。

認めたくはないが、認めてしまう。

二人は愛し合っている。それが恋愛的吗、もしくは友愛かは分からないが。

少なくとも彼の方は、魔王の娘を名乗る彼女を愛してしまっているのだろう。

だからこそ、疑問が浮かぶ。

私と彼が出会ったあの時に。

彼女は何故、エンヴァ君の傍にいなかった？

場面が、変わる

『エンヴァ。明日、聖剣を抜きに行きましょう』

『え？』

その宣告は随分と急なようだった。

彼の成長具合から見て、彼女が来ておよそ一年程が経つたのだろう。明るくなった彼の周りには沢山の人が集まっていた。喧嘩の強さもそうだが、彼が見せる自信が溢れた姿に多くの子供達が惹かれていったのだろう。このころの彼は、あの村の子供達のリーダー格だった。

それでも彼は同年代の友人よりも、グラトニカを優先した。

魔物である彼女が他の人間に見つかからぬよう、森の奥地に立派な小屋を作つてそこに彼女を住まわせた。今や魔物どころか、見上げる程の木ですらも子供が使うような剣で斬れるのだ。知識的な面はグラトニカの方が担当したのもあって、人が住まうには十分な程の家だった。

時々現れる彼女を狙う魔物達も、彼はたやすく退治した。

蜘蛛の子を払うように並みいる魔物を追い返し、村を滅ぼしかねないような魔物すら倒せる程に強くなっていた。それが彼の自信を更に引き上げ、己が勇者になるのだと疑つてはいなかった。

けれど、未だ彼の中にいるもう一つの魂……エンヴァ君の身体の本来の持ち主は、まだ彼に力を託すことを拒んでいたようだ。

勇者と魔王にとって、本来あるはずだった魂とやらは融合することが出来なければ力を十全に発揮することは難しいらしい。何故なら、前世人間の魂は、この世界に産まれ

た者しか持ち合わせていない魔力を所持していないからだ。

魔王も勇者も、魔力が無ければ聖剣を振るえないし滅びの魔力も使えない。

勇者の場合は膨大な魔力量があつて初めて聖剣を抜けるようになるという。

それ故に、魔王の娘グラトニカはエンヴァ君がもう一つの魂を説得できるまで待つていたようなのだが……どうも、これ以上待つことは彼女にはできなかつたらしい。

『け、けど。まだあいつを……』

『おそらく、あなたの中にいるもう一人は自分が消えるのが怖いのでしょう。当然の話です。誰だつて死ぬのは恐ろしい。例え世界のためとは言え、そう簡単に己の命は投げだせません』

『……じゃあ、どうすれば』

『なので、私が説得を変わりましょう。私がその方を一度食べて、対話してみるので』
『そんなのできるのか!?!』

『できますよ。魂ごと生物を食べた場合、その魂は私の腹の中で生きることになります。この村から王都までは、真つすぐ行けば三か月程度で着くはずですよ。その間に私が説得を成功させ、あなたに返せば問題無く聖剣を抜けるはずですよ』

『……けど』

彼はその提案に渋る。きっと、彼は消したくはないのだろう。

もう一人のエンヴァ。本来生きるはずだった勇者の贄となる誰かを。

だってそれは、自分を大切にしてくれた二人を裏切ることになるのだから。

自分を息子だと思つて育ててくれた二人の本当の息子を、殺すことになるのだから。

『エンヴァ。どうか、お願いします。私は消えたもう一人の私のために。ソフィートと名付けられた彼女の犠牲のために、果たさなければならぬんです』

『……』

『私を信じてください。私は必ず、この世界を平和にし。あなたを勇者にしてみせます。どちらにしろ、本来エンヴァと呼ばれるはずだった彼は消えて行きます。あなたが大人になる前に』

『……けど』

ダメだ。領いちゃダメだ。そう言つて駆けだそうとしたのに、私の身体は動かない。

それをして無駄だと。無駄な体力は使うなど。感情よりも、効率が体を制御する。

自分達が何故忌子と言われてきたのか。その答えがこれだった。

いつもそうだった。彼が私の元から去る時も同じだった。

斬られることを受け入れていた？そんなわけがない。もし本当にそれを受け入れていたなら、私を一步前に踏み出すべきだった。けれど、身体はいつだって生き残るための最適解を選択した。

仲間が助けてくれるのを知っていた。彼が本当は斬れないことを知っていた。

眼球は冷静に、彼の剣筋が鈍っていることを確認した。彼が逃げることを知っていた。

何かに植え付けられた戦闘の経験が、私達の身体を突き動かす。

三代目の勇者が造り上げた、魔王達に対抗するための兵器である私達は。自分の感情を置き去りに、ただ勝つための最適解を選ぶのだ。

故に、忌子。

命じられるがままに戦い続け、その代の魔王亡き後も人同士に争いに利用され、多くの人間の命を奪った呪われた人間。感情を持たず、無慈悲に人を殺す魔物より恐ろしい兵器達。

その特性故に、私はいつまでも終われない。自らに刃を突き立てることもできない。

この光景を前に、意味が無かろうと動くことにすら、私の身体は承諾してはくれなかった。

「エンヴァ君……！」

それでも手を伸ばす。

これが過去の映像で、それを変えることはできないと知ったとしても。

親友として、幼馴染として、そして何より。何より……

プツン

そんな気の抜けた音と同時に、私の視界が切り替わる。

走っていた。森の中を駆け抜けた、どこかへと行くために走っていた。

果たして彼は誰で、どこに行くのだろうか？

転んだ拍子に見えた水たまり。そこに映る顔は、紛れも無く彼だった。

背筋が凍る。彼の目を見て、確信する。

「しょうが、ないんだ。そうしなきゃ、いけないんだ」

「そうしなきゃ、ずっと悲劇が起きるんだ。皆のためで、二人のためなんだ」
「だから——やらないじゃないんだ」

彼は、今。

全てを捨てて、彼女の手を握ろうとしているのだと。

☆○☆○☆

走る、走る、走る。

彼女のために。己のために。両親のために。

そう自分に言い聞かせて。走り続ける。

『あなたは、私を信じてくれますよね？』

断れなかった。

あの瞳を前にして、あの覚悟を前にして、断れるわけが無かった。

『私達は異物なんです。本来はこの世界にいてはいけない存在なんです』

その通りだった。

俺達は転生者で、別の世界の住人で、元いた誰かの人生を奪って生きている。そうまでして生き残り、行きつく未来は命を減らすだけの兵器になるだけだ。

『私の命を託したもう一人の私から、夢も託されたのです。どうか、こんなことがもう起こらない世界を造ってほしいと。私達には、それができるんです、エンヴァ』

彼女の理想は、彼女の夢は、俺にとって救いであった。

やがて消滅していくだけの彼のために、俺ができる唯一の行いなのだ。

記憶は無いけど、知っている。

自分がどれだけ薄汚れた人間で、誰かを不幸にしたか。

前世ではきつと、俺はどうしようも無い人間だったのだろう。

そんな俺が、そんな僕が。

本来生きるはずだった、誰かの命を奪ってまで生きる意味を見出^{みいだ}せた。
一体俺は、何を悩んでいるのだろうか。

『俺の分まで、たのしんで生きてほしい』

本来生きるはずだった彼の言葉が、脳裏を過る。

ようやく話せた彼が吐き出した、どこまでも優しい言葉が俺の足を重くする。

『そんな誰かの夢のためじゃなくて。お前自身のために、人生を送ってほしい』

『お前は良い奴だ。俺の友達になってくれた。俺を忘れないでくれた。俺を想ってくれた』

『だから。俺はお前が自分らしく生きる未来しか望まない』

『あんな女のために生きるんじゃないやねえ。お前自身のために生きると言ってくれ！』

「無理だよ」

出来るはずがないだろう。

どの面下げて、そんな未来を生きられるのだ。

実の息子を殺した男が、どうやって二人に顔を合わせられるのだ。

これは償いだ。

これは贖罪だ。

人を殺した俺が出来る、唯一の事だ。

「俺は、勇者になる」

子供の絵空事のようなそれを、決意のために口に出す。

「俺は、聖剣を抜く」

自分がやらねばならぬことを、確認するように音を吐く。

ずぶ濡れになった身体を引きずるように、脚を動かす。

「俺は、魔王を倒す」

絶対に誰にも譲らない、譲ってはならない。
そうしなければ。そうでなければ。

「じゃないと。エンヴァが死ぬ意味が無いッ！」

前へ進め。家はもうすぐだ。

今日は父さんと母さんはいない。二人にバレぬように出ていくんだ。

俺が戻ることは無いだろうけど。

それでも、次産まれる子供は、俺のような人間に殺されない。

親不孝者。そんな汚名をエンヴァに着せるのは、どうしようも無く歯がゆいけれど。

それでもしなくちゃならない。そうしなくちゃいけない。そうすべきなんだ。

絶対に、絶対に。

「……」

エンヴァの両親の家に辿り着く。

体にまとわりつく泥を叩き落とし、最後になるであろう家の門を潜る。

誰もいない。明かりも無い。当たり前だ、優しい二人はもうすぐ来るエンヴァの誕生日に向けて食材を買いに行っている。今頃は町にいるはずだし、帰ってくるのはもう少し後だ。

だから問題はない。二人に何も言わずに出ていくのは心苦しい。

それでも行かなくちゃならない。勇者にならなきゃならない。

エンヴァのような人間を、生まれる前に殺される人間を、作っちゃならない。

「いめんなさい」

みつともなく心の中で言い訳を並べ立て、自分の部屋にあった麻袋を持つ。

この日のために村の仕事を手伝って貯めておいた旅の資金。

雨風を凌ぐためのマントに、初めて自分の金で買った鉄の剣。

持っていくものはこれだけで十分だ。

後は、家を出てグラトニカと合流して——

「エンヴァ?」

思考が、凍った。

☆○☆○☆

「何をしているんだ、こんな夜中に。うわ、びしょぬれじゃないか！ 全く、少し早めに帰ってきてよかったよ」

「もー、何やってるの。ほら、拭いてあげるからこっちに来なさい？」

呆れて笑う母さんと父さん……否、エンヴァの父と母。

なんでもないように笑う二人だけれど、分かっているはずだ。

俺がこの家を出ようとしたことを。何も言わず、どこかへと行こうとしたことを。それを二人は、咎めようとしなかった。

父は蠟燭に明かりを付けて、いつものようにテーブルに食事が並べている。

母は優しく俺を抱き留め、自分のために買ってきたのであろう高い布で俺を拭く。

「……やめてくれ」

「ん？どうした、エンヴァ。そら、早く着替えて席に着きなさい」

「今日はエンヴァの誕生日なんだから。主役がいなきや始まらないわよ？」

「優しい言葉を、かけないでくれ」

絞り出すように声を出す。

限界だった。涙が零れ落ちた。罪悪感で吐きそうだった。

二人が誕生日を祝うべき人間は、エンヴァはもう俺の中にはいなかった。今彼は、グラトニカの腹の中にいる。彼女に説得されている。

この誕生日会は無意味なものだ。俺が受けるべきものではないものだ。

「いないんだよ。今日が誕生日の奴なんて」

「何を言っているんだ、お前は。目の前にいるだろ？」

「俺は、僕はエンヴァじゃない！」

吐き出した。吐き出してしまった。

二人は困惑したように俺を見ている。もう後戻りはできない。

けどもう無理だった。これ以上隠し通すなんてこと、俺にはできなかつた。

「俺、ほんととは別の世界で生きてたんだよ」

全てをぶちまけた。

この世界ではない別の世界のこと。俺がそこで生きていたこと。

俺が転生者であり、本来生きるべきだったエンヴァがいたことを。

「本当は、二人の息子は殺されてるんだよ」

自分は異物だ。二人の息子ではない。

歯が鳴る音を止められず、二人の顔が見れないほど涙が溢れ。

それでも、言わなければどうにかなってしまえばよかった。

もしくは、もうどうにかなってしまったか。

二人は何も言わない。ただ俺の言葉を待っている。

それとも絶句し、俺を睨んでいるのだろうか。

「……なんとなく、俺が変だって分かってたはずだろ？俺、転生者ってやつなんだ。別の世界で産まれて、死んで。その癖この世界であんた達の子供の身体を乗っ取って、生きてきたんだよ」

まだ十にもなっていない子供がするには、あまりに不可解なことばかりしていた。

最近では喧嘩を売ってきた大人を素手でぶちのめしたり、相手の方に非があることを証明するため他の子供や大人達と口裏合わせをしたりしていたか。

多分あの時から、村の人々の視線に恐怖のようなものが宿っていたのだろう。

子供にはあまりにも手際が良く、大人にしても大した教育を受けられないこの村では、金持ちの家の息子とは言えあまりにも計画的な行動だった。

二人だけはずっと同じように接してくれたが、今ではすっかり大人達から奇怪な目に向けられるようになっていた。ついてくるのは子供達だけで、その子供達も大人になる頃には違和感に気づくのだろう。そして、きつと離れていく。

全てを吐き出した。勇者と魔王のこと、転生者のこと、俺のこと。

そうして、それ以上は言葉を続けられずに、二人からの反応を待つ。

どうなるか考えるだけで息が荒くなった。

俺ならきつと、目の前の殺人者を殺している。

よくも自分の子供をと、ナイフを胸に突き立てるに違いない。
そうされるべきだ。

そうなるべきだ。

そうであるべきだというのに。

それでも、怖くてたまらなかつた。

「——ぶっ」

二人は、ほぼ同時に口を抑えて。

そして、同時に嘔き出した。

「ハッハッハッ！馬鹿なことを考えるなあ、この子は！」
「……へ？」

この世界に生まれて初めて見るくらい、二人は腹を抱えて笑っていた。

そこに悲壮感は一切ない。本当に、息子が馬鹿なことを言っているな、くらいの反応。

「し、信じてないのか!? 本当だ! 俺は……!」

「そんなものがあつたとしても、君はずっと僕らの子供さ」

二人は俺の言葉を信じていない、わけではなかった。

信じた上で、俺を息子だと言っているのだ、この二人は。

「……なん、で」

「ええ。だって大人ぶろうと背伸びしてる所や褒めてもらおうと頑張ってる所なんて、子供そのものだものね。それに幾ら言っても食事中にご飯こぼすし、注意したら不貞腐れるし」

「片付けも未だちゃんとして来ないしね。他の子よりも多少賢いかもしれないけど、僕らから見ればまだまだ子供だとも」

「それで悩んで、傷ついて。いたかも分からない誰かのために涙を流し続けたんだろう? 夜中にすすり泣く声がずっと聞こえて少し怖かったくらいだよ」

「そんな涙を流せる優しい子、他の誰かやあなたがなんと言おうと私達の息子に違いな
い。だって私の夫は、とっても優しい人で」

「僕の妻は、誰かのために涙を流せる人なんだから」

否定、すべきだった。

これを受け入れちゃダメなはずだった。

俺は、僕は、それを一度受けているんだ。

彼が受けるはずだったそれを、僕が横取りしてしまっているんだ。

「ち、がう。その言葉は、エンヴァに……！」

「何年君と一緒にいると思ってるんだい」

「もうとつくに、あなたを他人だと思えるような時間は過ぎてるのよ？」

だというのに。

向けられる優しい言葉は、僕の心にしがみついて放してくれない。

「けど、僕は偽物で」

「なら、君が僕らと暮らした十年間も偽物なのかい？」

「……けど」

「エンヴァ」

二人に優しく抱き留められて、頭を撫でられて。
ダメなのに、いけないのに。

「君はエンヴァだ。他の誰でもない、僕らの息子だ」

「私達の息子になってくれてありがとうがとね」

「——う、あ」

もう、限界だった。

☆○☆○☆

「……良かった」

泣きじやくるエンヴァ君を見て、涙を拭う。

大丈夫だ。少なくとも今の彼は、もう彼女の手を取らない。

「けど、じゃあなんで今更……」

「それを教えるために俺がいるわけだ」

背後から聞こえてきた声の主に、剣先を突きつける。

その声の主……エンヴァ君とそっくりな姿をした幼い男は、ニツと笑って私を見ていた。

「よう。やっと反応してくれて嬉しいよ、勇者様」

「……君は」

その声に聞き覚えがあった。その雰囲気に見覚えがあった。

ずっと無視していた。己の中にある幻聴だと思つて、ずっと聞かぬフリをしていた。

「初めまして。エンヴァの中にいた誰かです、つてな！」

そう言って、性格が悪いそいつは面白そうに両手を上げた。

勇者じゃなくなつた日

「……君は」

「とりあえず、見えるな？聞こえるな？よしよし、ようやくだ」

まるで時が止まったかのように静止するエンヴァ君とその両親二人。

それをしたのが目の前にいるこいつであることは明らかだ。

半透明のエンヴァ君に似たこの少年は、間違いなくこの空間を支配していた。

「あんだけヒントが出りや、幻聴だのなんだの言つて無視されることも無いらしい。安心したぜ勇者様。それでも目を逸らし続けるようならもうどうにもならん」

「……目を逸らしてたわけじゃないよ。幻聴と思う以外に選択肢が無かつただけだ」

「まー、そうだよな！普通頭の中でガンガン聞こえる声とか、幻聴以外の何物でもねえしなー」

うんうんと頷いて、そいつは以前のエンヴァ君のように快活に笑い。

「それはそれとして逆恨むわ！よくもずっと無視してくれたなこの野郎」

「散々僕をけなしし続けていた癖によくもまあそんなこと言えるね……」

「それ以外に何の反応も示さなかったお前が悪い。褒めても呼びかけても碌になんも反応しない癖に、あいつを引き合いに出しておちよくれば反応返してくれるんだもん。辛いんだよ、自分が誰からも認識されないってことは」

決定的に、こいつはエンヴァ君とは正反対の人間だった。

なんとというか、割り切っている。

自分も悪いが、相手も悪い。そう思える人間だ。

悪意をため込むようなことはせず、悪意を吐き出せる人間だ。

「それで。君の正体は？」

「別の世界からやってきたあいつが入った肉体、その元の持ち主さ。あー、一応言っておくが俺はそれに関して全く気にしちやいなからな？あいつが乗り移らない場合、俺死んでたし」

「何故？」

「知ってるだろ？ 魔力を持ちすぎるが故に患う奇病」

聞いたことはあつた。

人体が許容できない程の魔力を持つて生まれた子が患う、不治の病。発生する確率は極めて低いが、何十年かに一度だけ症例が見つかる病氣。

「本来なら、俺はそれにかかつて死んでいた。まあ何日かは生きれたかもしれないが、どっちにしろじきに衰弱して、両親の目の前で死ぬ。むしろ感謝してるんだよ。あいつがいなければ、俺は生きれなかったわけだしな」

「……君は」

「あんま俺については知る必要ねえよ」

僕の言葉を遮るように言い、彼は指先を淡く光らせ宙を走らせる。それが引き金になるように、三人は再び動き出す。

「お前が知るべきは、この後起こることだろう」

「……人のことは散々言っておいて、自分のことは隠すの？」

「うっせえよ。俺だつて隠したいことの二つや三つある。それにどうせもうすぐ消える。立つ鳥跡を濁さずつてやつさ」

「どういうこと？」

「あいつの故郷の言葉さ。意味は後で教えてやるよ。それ、動くぞ」

三人はしばらくの間、ささやかな誕生日会で料理に舌鼓を打った。

その後家族皆でベッドに包まり、夜が明けるのを待つ……とはならず、エンヴァ君は布団からもぞりと抜け出し、一度持つていくはずだった荷物に目を向けた後。

それには何の手も付けず、一本の剣だけ持つて、音をたてぬよう扉を開き駆けだした。

「これが見終わったら、お前がやるべきことを教えてやるよ」

「僕が、やるべきこと？」

彼はそれ以上何も言わず、エンヴァ君が走る先を見つめていた。

そこには、相も変わらず笑みを浮かべる、あの女が立っていた。

☆○☆○☆

「お帰りなさい、エンヴァ」

「グラトニカ」

彼女は俺の姿を見て、少し困ったように笑う。

「あら。荷物は持ってきてくれませんでした？」

「えっと、その」

「フフツ、気に病む必要はありませんよ。何か事情があつたのでしょうか？大丈夫、私も少しではありませんが保存食やお金は持ち合わせています」

そう言つて、「じゃーん」という可愛らしい声と共にお手製の鞆を開けて、金貨と食料を自慢げに見せてくる、この世界で出会つた初めての友達。

彼女はきつと、俺を信じて疑つていないのだろう。

『自分と同じ境遇』という一点のみで、俺をどこまでも信じてくれている。

それはどこまでも眩しくて……同時に、どこか不気味ですらあった。これまで彼女に抱いたことのない、不信感が僅かにあるのを自覚する。

「お友達だけに、苦勞をかけるわけには行かないでしょう？」

「……うん。ありがとう」

話したいことがあるはずなのに、切り出せない。

少女の笑顔を見て、いつものように立ち止まってしまう。

またいつものようにこうやって、自分の意思をさらけ出せない。

「じゃあ、行きましようエンヴァ。あなたならその辺の敵なんかには負けることはありません。たとえ剣が無かろうと、適当な杖を振るうだけで敵を倒せる力がある」

「ず、随分と評価高いな」

「当たり前でしょう？今まで見てきた中で、あなたは最高の剣士です。魔王すら遙かに凌ぐ剣才を持っている。その才能こそが、あなたの勇者としての力なのでしょう」

「……そっか」

褒められて嬉しくなると同時に、本当にこれでいいのかと考える。

自分達は異物だと、彼女は何度も言い聞かせてくれた。

けど、本当にそうなのだろうか？

ただ漠然と、不安を持っているだけだった。

エンヴァという一人の少年を殺した俺が、許されるはず無いと。

けれど、エンヴァを奪った見知らぬ他人のはずの俺を、二人は息子だと言ってくれた。

ここに居ていいんだと。自分達の息子でいてくれていいんだと、許してくれた。

「それじゃあ行きましょう。旅のルートは予め決めていきます。道に迷うこともなく、楽々と目的地に着くはずですよ」

「……すごいな。こんな細かい地形が載ってる地図、父さんや母さんでも使ってなかった」

「時間に関してはいくらでもありましたから。私の手書きのオリジナルですよ」

「これ、全部？」

「はい。これでもすごい長生きしてるので」

言い出せない。

「その、グラトニカ」

「どうしました？」

「……その。俺達の目的つてのは。人間を憎んでいる今の魔王を殺して、グラトニカを魔王にして人間と魔族同士の戦争をなくすこと、だよな？」

「はい、そうですよ。そのためにもあなたの力と、聖剣の力が必要なんです」

「あ、いや。ちよつと考えただけど……誰かに相談したりしないか？」

「……相談？」

本題は切り出せず、取り繕うように別の話題を出す。

突然こんなことを言われたグラトニカは、こてんと首を傾げて顎に指を乗せる。

まるで、俺が言っていることが理解できない、とでもいう風に。

「突然何を言っているんですか？そんなもの、あるわけないじゃないですか」

「けど、ほら。魔王が復活するつて他の大人に言えば、誰かが協力してくれるかもしれないだろ？何も俺達だけでやる必要ないんじゃないかって、思えてきて……」

「……何を言っているんですか？」

ああ、ダメだ。ここでビクついて恐れるから、俺はだめなんだ。

誰かに自分の考えを否定されるのが怖い。それも、初恋の人から言われるのは、とても。

それでも、言わなきゃダメなんだ。だって、今更だけど、どう考えても。

「なんでそんなに、二人だけでやりたがるの？僕達だけじゃ……子供の力でやれることなんて、たかが知れてると、思うんだけど……」

「馬鹿ですか？」

初めて聞く、彼女の冷たい声。

僕は初めて、彼女の出自を強く認識した。

この子は、魔王の娘なのだ。

「子供？あなたが？あなたは、この世界に来る前は何年生きてましたか？」

「いたっ……!?!」

俺の腕を強く掴み、彼女は無感情に問いかける。

まるで機械のような、虫のような目で。

「前世と合わせた年齢を言ってみてくださいよ。ねえ、あなた何歳ですか？自分が子供？アハッ。あなたが？」

かと思えば、まるで童女のようにおかしそうに。

どちらが本当の彼女なのか、分からなくなってくる。

「気色悪いなあ、子供のフリは楽しいか？自分がやるべきことを、子供だと騙して赤の他人にやらせるのは気分がいいですか？」

「グラト、ニカ？」

「ああ、もう馬鹿馬鹿しくなってきた。わざわざあなた好みの性格を演じてやったんですよ？好きなんですよ、こう言うの。自分が守らなきや生きていけないような夢い女の子。わざわざやる気出させるために、そういうキャラでいてやったのに」

腕を握る力が強くなり、爪が食い込んで血が流れる。

どうにか引き剥がそうとしても、彼女の普段の様子からは考えられないほどの力で捕まれ、引き剥がさない。

「あなたはまだ自分がどんな境遇なのが分かってないんですね？ あんなに丁寧に教えたのにまだ理解できてない。一向に成長しないガキ用に絵本でも書いてあげるべきでしたか？ あなたは産まれちゃいけないかったですよ」

「そんなこと……!？」

反論しようとして、首を掴まれる。

呼吸が止まる、息ができない。

彼女の手が不自然に大きくなって、形を変えていく。

「『そんなこと』？ 続きを言ってみろよ。何が違う？ 腹を痛めて産んだ子が、実際は血の繋がらない赤の他人だったんだぞ？ おぞましい気色悪い息をするなよ臭いんだよ」

首から手を離され、ゴミのように地面に放り投げられる。

咳き込んで酸素を確保し、僕を見下す彼女の目を見る。

嫌悪。

憎悪。

失望。

少し笑ってしまおう。

どうやら僕は、初恋の人のことすら碌に理解できちやいなかつたようだ。

「あなたにも分かりやすいように言うから、よく聞いてくださいね?」

聞き分けのない子供をあやすように、彼女は聖女のような笑みを浮かべて。

「あなたと私は、この世界のゴミなんです」

「違う」

一度目の否定。

空気が歪む。

「ゴミはゴミらしくしてなければいけないんです」

「違う」

二度目の否定。

劍の柄に手を当てる。

「私達は、産まれてきちゃいけなかつたんです」

「違う！」

三度目の否定。

恐怖で歯がガチガチと音を立てる。

それでも、それだけは否定しなきゃいけなかつた。

「何が違う？ 何故違う。私達は——」

「二人は僕を、それでも愛してゐるって言ってくれた！」

自分はたしかに、どうしようも無い人間かもしれない。

エンヴァという少年の人生を奪った僕に、こんなこと言う資格はないかもしれない。

だけど

「それでも、息子になってくれてありがとうって、言ってくれた！」

二人が言ってくれたことを、二人が僕を認めてくれたことを。
否定なんて、させたくない。

「だから——」

自分たち以外の誰かにも、頼ってみようよ。

そう、続けようとして。

「は??？」

——彼女の目が、紫色に光り輝いた

「……アハ。アハハハハ。そうなんですネ。すいませんエンヴァ。勘違いしました、私」

「え………？」

彼女は、枷が外れたように笑う。

何かが壊れたように、ケタケタと嗤う。

「最初から、異物だったのは私一人だけでした」

「グラトニカ？何を言ってる………!？」

咄嗟に剣を抜いた。

殺意が載った視覚外からの、背後からの一撃に剣を振るい、弾き飛ばす。

威力を殺しきれず地面を擦りながら、彼女のすぐ目の前まで後ずさってしまふ。

「ごめんなさい。差し出がましかつたですね！あなたを勝手に同類にして、ごめんなさい」

「待つて、待つてよ。グラトニカ、何を」

ギョツ、と抱きしめられる。

普段なら赤くなる顔が、今はひどく青ざめる。

「ズルい」

グチャリ。

彼女の腹が、まるで口を開くように割れた。

「ヒッ!？」

「何故あなただけが？」

恐怖し、彼女を突き飛ばすように離れる。

何の抵抗も無く彼女は尻もちをついて、腹の口はケタケタと騒音をまき散らす。

「一緒だって、思ってたのに」

恐ろしい大口の中には、何かが犇めいていた。

その正体を、僕は運の悪いことに察してしまった。

それらは全て、人間や魔物が忽然として笑みを浮かべる顔だった。

「あなたは私を裏切ったのね」

「グラトニカ、僕は……ッ！」

言葉を出そうとした途端に、再び不可視の攻撃が飛んでくる。

それを切り払い、僕は踵を返し逃げ出した。

このまま突っ立ってっっていれば、間違いなく殺される。

「ああ、逃げるのね。あなたなんて勇者になんかなれないわ、臆病者」

泣きそうになりながら、走る。

どうしてこうなったのだろうと考えても、何も分からない。

違う。答えを出すことすらからも逃げています。

木々が薙ぎ倒され、凄まじい轟音を響かせて倒れていく。

森の中を、恐ろしい怪物のような容貌の彼女が追ってくる。

不可視の攻撃の正体は、透明の物質でできたムチのような……いや、どちらかと言え

ば触手と言った方がいいのだろうか。

速度も早く、攻撃力があり、何より避けづらい。

理不尽とすら思える攻撃を、しかし体は勝手に対処する。

こんな形で、グラトニカとの修行の成果を確認したくなかった。

重い心とは裏腹に、天賦の才を秘めた肉体は最高のパフォーマンスを発揮する。

「ツツ……！」

「馬鹿ですね。今のあなたなら私なんて、いくらでも殺せるでしょうに。何もかもから逃げるしか能が無い」

攻勢に出れば、問題なく倒せるという確信はあった。

けど、俺はそれができなかった。

「アハハ。なら、殺しやすいようにいいことを教えてあげますね。なんで二人だけでやろうとするか、ですか？ 私は別に、人間と魔族の争いだとかには一切興味がないんです」

「じゃあ、どうして」

「可哀想じゃないですか」

可哀想？何が？

「私を産んじやった人はね。何度も何度も私に言っていましたよ。『娘を返して』って」

なんで

「なんで？だって私、本当の娘じゃないんですもん。夢の中で何度もあの子と出会いましたよ。とつてもかわいい子でしたよ。私にいつも笑顔でいてくれましたよ」

エンゾア
彼もそうだった

「私はあの子に体を明け渡すべきだったんです。けどあの子は優しいから、私なんかに体を与えるって言ってたんです。おかしいですよ？私達は本来いていいはずの魂じゃないのに、本来生きるべきだった子達は私達のために死ぬんですよ？間違っていますよね？」

そうかもしれない

「だから、私は持って生まれた力を使って、彼女の願いをかなえることにしたんです！」

それは

「私の中にいるあの子を食べました」

それは

「私のおなかの中って、一つの宇宙みたいなものらしいんですよ！ほら、見てください！皆私のおなかの中で、愛しい人と出会っているでしょう？お母さまとあの子が、一緒にいられるんですよ！？それってとっても素敵でしょ？」

「ダメだ、そんなこと」

口から言葉が漏れ出た。

「本来会えなかった二人が、会えたんですよ？その何がダメなんですか？だから、私の本当の目的はね、エンヴァ。お父様を、あの子と会わせてあげることなの！」

「そんなこと、間違ってる」

「あなたからすればそうでしょうね？」

彼女の憎悪が肌を撫でる。

「よかったじゃないですか。自分の存在が許されて。なんで私があなたを連れて行くこととしたか分かりますか？あなたがこの世界にいちやいけないゴミだからですよ？」

「ゴミだから……？」

「だって、この世界は間違ってるじゃないですか？なんでお腹を痛めて産んだ子どもが、別の人間に成り変わられてるんですか？なんでそんなことが許されているんですか？許されるわけがないのに。そんな悲劇、あつてはいけないのに」

彼女の言葉は止まらない。

溢れ出す水のように、彼女の吐露は僕の頭に流れ込んでくる。

「だから、魔王の力と勇者の力を手に入れて。この世界の生物全てを飲み込もうと思っ
たんです」

「……無茶だ」

「可能です。私にならできる。私のおなかの中なら、皆幸せに愛しい人と会えるんです。
新しい命が不純物に穢される心配も無いんです」

逃げながら問答をしている内に、少し開けた場所に出ていることに気づいた。

そこは、村の子供たちの遊び場だ。この時間であれば、皆そろそろ集まってくる。

「その世界に、あなたと私は不要でしょう？だって、たった二人の、いてはいけない存在
だから」

「……」

ああ、そうか。

彼女は。

「うわあああああああ!? 魔物だ!」

村の子供達の悲鳴が響き渡った。

「ああ。集まってきたんですね。ちょうどいいよ」

「何を……!?!」

叫び声をあげた子供に迫った殺意を切り払う。

どこから出たかも分からない触手はビチビチと撥ねる。

「こいつ、襲ってくるぞ!?!」

「エンヴァー!早くやつつけてくれよ!誰にも負けないんだろ!?!」

「助けてえ!殺される!」

待ってくれよ。

まだ、何も話し合いをできちゃいないんだ。

「何を悠長にしてるんですか?ほら、早くしないと子供が死にますよ」

「なんの意味があるんだよ、こんなことに!？」

「あなたに選択肢をあげるためですよ？」

笑顔と共に放たれた二撃目を、辛くも打ち払う。

これ以上は、守り切れるかどうか分からない。

「せん、たくし?」

「あなたは私の理想が気に入らないんでしょう? なら、ここで私を斬ればいい」

三撃目。

いや、四撃目か。それは二つ同時に放たれた。

二人を同時に狙うそれを、腕の痛みを代償に防御する。

血が噴き出る。

痛い、痛い、痛い。

「何やってんだよ!?! 早くそいつを倒してよ!」

「ずっと威張ってた癖に、こんな時くらい役に立てよ!」

煩い。

「私についてきてくれるのなら、この村を食べつくすのを見ててください」

「なんでそんな——！」

「分かりやすく言いませうか？」

実に楽しそうに、彼女は嗤った。

「あなたは私と、地獄に落ちてくれますか？」

それはきつと、最後の警告だったのだろう。

どちらかを選べという、情けない僕への最終通告。

自分を取るか。村を取るか。

初恋を取るか。家族を取るか。

僕は、それに。

「グラトニカ、君は——」

ザシュツ、という呆気ない音が響いた。

彼女は僕に気を取られ過ぎていた。

そして僕も、彼女しか目に写ってはいなかった。

村を襲う魔物に手を下したのは、忌子と恐れられていたあの少女で。

「大丈夫？」

善意であつたのだろう。

きっと僕を助けるために、手に持ったナイフを、振り下ろしてくれたのだろう。

誰にも気配を悟らせず、彼女の背後に回り込み、彼女の心臓にナイフを突き立てた彼女に。

「——ア」

僕は、俺は、何を血迷ったのか。

その手に持った剣を、彼女に振り下ろそうと一瞬考えて。

「……ああ、やっぱり」

彼女の、呆れたような笑いに動きを止めて。

「意気地なし」

血を流し、地面を倒れる怪物を目の前にして。
恋した人

僕の視界は、真っ黒になって。

「あなたなんて——」

彼女の手が、僕の頬を撫でて。

「世界で一番、大嫌い」

その日、僕は勇者となる資格を失った。

魔王討伐戦前夜

「……」

それまでの光景を見終えて、手にした聖剣を強く握る。
途切れ途切れの記憶の中でも、しっかりと理解した。

「そっか。あの時の魔物が、今のあいつか」

「ああ。この後のことは、お前も記憶に残っているはずだろう？」

『彼の代わりに、あなたがなって。魔王を殺せる最強の——』

それを忘れていた、というわけではない。

ただ、この時の悍ましい魔物と、あの魔族との姿があまりにも違い過ぎた。だからそ

の可能性を最初から排除していて、この時の言葉を魔物の戯言だと切り捨てた。

あの後エンヴァア君は叫び声をあげながら逃げて、それを見た子供たちは彼を見限り、そして一人ぼっち同士の交友が始まった。

魔物は完全には殺せておらず、もう一度あの場所に行くとき血の道を作って彼女はなくなっていた。仕留め損なつたが、あの傷では生きてはいられないだろうと踏んで追跡はしなかつた。

それがこんなことにつながるとは思つてはいなかつたが。

「なんでそいつは、お前を僕の体に入れたの？」

「魔王を殺す勇者が、聖剣を抜く人間が欲しかつたのさ。それがなければ魔王を倒せない。だけど、あいつが勇者になるのはいやだ。そんな理由だろうな、お前が勇者になつたのは」

「そんな理由で、僕は勇者に選ばれたんだね。彼女に刃を突き立てたのが、たまたま僕だった。それだけの理由で、僕が聖剣を抜いたのか」

なんてつまらない、そしてどうしようも無い理由だろうか。

人間性や能力なんて一切関係なく、ただ成り行きで僕は勇者になつたのだ。

「けど、僕には魔王を倒すだけの力はまだない」

「ああ。そうするためには、魔王の娘が言っていた通りの工程が必要だ」

つまりは。

「嫌そうな顔すんな、俺も嫌だわ。けどやらなきゃならねえだろ」

「分かってはいる、分かってはいるけどさ」

ただでさえ今まで煩わしかったそいつが、自分の一部になるのはなんか気持ちが悪い。
い。

まあそうも言っていられない状況だし、エンヴァ君を救うためにはやるべきだ。
本当にしかたなく、僕はそいつに手を伸ばす。

「一瞬で終わるから、先にあいつへの遺言を残させてくれ」

「聞くよ。君はエンヴァ君にとっては大事な人だったらしいから」

そいつは憎たらしくも太陽のように笑って、見慣れた顔を浮かべて。

「

それはそいつなりの、精一杯の激励だったのだろう。

一言一句、全て胸に刻み付け、僕はそいつから流れる力を受け止める。

「……対抗できなかつたわけだ」

無尽蔵ともいえる魔力が、過去の勇者たちの経験が、僕の体に吸い込まれていく。

幾万の戦いが、幾千の悲劇が、そして勇者の材料となつていった魂達が。

魔王を倒せと、それがお前の使命であると奮い立たせようとしてくる。

「煩いな」

そんなくだらない使命を切り捨てて、光が増していく聖剣を睨んだ。

こいつはただのシステムであり、ただの兵器であり、ただの剣だ。

何の想いも乗らないそれは、酷く軽い。

「……あの時の剣の方が、よほど重いや」

楽しかった思い出が脳裏を浮かべ、一瞬はにかみ剣を振るった。

空間が切り裂かれ、回想の世界は崩壊し、王が座す玉座の間にて口を開く。

「魔王を殺す準備は整いました」

「そうか。では行け、今代の勇者」

小さく礼をし、茫然とする仲間達の視線に一瞥して歩き去る。

もはや立ち止まる理由はない。後は全て切り伏せるだけ。

「お、おいコラ!!?何一人で納得してんだよルスト!俺らにも説明しろ!」

「そうですよ、何があつたんですかあそこで!!?魔力量がすごいことになってるし、聖剣もなんだか様変わりしてるし……!」

「落ち着け!勇者様が準備ができたといつたのだ。我らの役割はそれについていくこと

だけ。さあ、決着をつけに参りましょう勇者ルスト！」

「てめえは黙っとけ盲目ジャステイ！」

「なんだと貴様！」

騒がしい彼らの様子に、なんだか楽しくなってくる。

村の外に眼を向けてみれば、僕にだって友達はできたのだ。

本来の彼ならばきつと、もつと沢山の、素晴らしい友人達ができるはずだ。

「移動しながら話すさ。ほら、行くよ皆。最終決戦の始まりだ」

笑って、僕は彼との再会の地であろう都市セリティアの方角を眺める。

「待っててね、エンヴァ」

あなたに言いたいことなんて、まだまだ沢山あるのだから。

☆○☆○☆

「あら。目覚めましたね」

眼を開き、美しい宝石の髪を靡かせる彼女を見る。
まなこ

今の言葉が、俺の目覚めを告げるための言葉じゃないのは明白だ。

「ついに、ルストが」

「ええ。もはやあなたでも勝てるかどうか分からない、真の勇者へと覚醒しました」

以前から聞いていた話ではある。

ルストは未だ勇者として完全に覚醒してはならず、ある条件を満たし覚醒してしまえば、あいつはそれまでの数倍もの力を手に入れるであろうことは。

しかし、なるほど。

これは予想以上だ。

「こんなに遠くにいても、魔力が伝わってくる」

「魔術師形無しですね。流石は古代エルフが作り上げた人間兵器、その末裔。人類、いや魔族ですら、今の彼女の魔力量に敵う存在はいないでしょう。そして、それに伴う実力も」

ああ、そうだろう。あんなものであいつが終わるわけがない。

あいつは勇者だ。俺がなれなかった、最強の勇者なのだ。

そんなあいつが、負けっぱなしで終わるわけがないだろう！

「勝てますか?」

「勝ちます」

力を与えてくれたソフィートの信頼に応えるために。

俺があいつと対等であると証明するするために。

そして何より、あの約束を果たすため、に？

「……あれ？」

なんだっけ、約束って。

とても大事な、誰よりも愛しい人と、それをした気がするのに。

「どうしました？ エンヴァ」

「……いえ、失礼しました。なんでもありません。ただ」

「ただ？」

「何か、酷く大切なものを忘れていた気がただけです」

それが何なのかは、よく思い出せない。

大切な誰かと共に過ごした日々が、もう一つあつた気がするのだけれど。

「フツツ、変なエンヴァですね」

「も、申し訳ありません。こんな調子では行けませんね！ 剣の腕が鈍ってしまう」

「そこは心配していませんよ、エンヴァ」

ソフィート様は、何かを懐かしむように目を細めて。

「あなたはどんな状況でも、剣を振るえるなら最強です。どんなに傷を負っても、どんなに揺らいでいても。剣を振るう意思があるなら、あなたはこの世界で最も秀でた騎士でしょう」

「ありがとうございます、ソフィート様。その言葉だけで俺は——」
「剣を振るえれば、ですけどね？」

感涙しながら頭を下げようとした俺を諫めるように、彼女は俺の頭を撫でる。
硬いが、一切の角質が無い真珠のような手に触れられ、俺は思わず硬くなる。

「ソフィート様？」

「剣が振るえなければ、あなたはただの役立たずです。どうか私を失望させないでくださいね、エンヴァ。私についてきてくれるなら、その剣を振るえるはずですよね？」

「……え、ええ。勿論。何を当たり前のことを」

「ならよかった。信じていますからね？私の剣。私だけの騎士」

そうだと。

魔王も、あいつも、立ちふさがる者全てを倒し、己が最強だと唄う。

そうすることですか、俺はこの世界に産まれた意味を証明することができない。

与えられた剣の才能しかない俺には、それを振るうことにしか価値がない。

「あら、ウフフ。エンヴァ。お客さんですよ？」

「ええ。随分と数が多いようで。ソフィート様、どうか俺から離れぬように」

彼女を背に置き、彼女の左手で作られた宝石の剣を振るう。

魔王により差し向けられた魔族の軍勢が放つ魔法を一太刀で切り捨て、数百はいるであろう精鋭達に向かって、俺と主はゆっくりと前進する。

「少しだけ感謝しておこう」

久しぶりに、何の憂いも無い戦いができそうだ。

ずっと何かに縛られた戦いばかりだった。何かに悩んでばかりだった。分かりやすく相手が敵だと言うのなら——これ以上戦いやすいものはない。

「ギツ!？」

「貴様……!？」

背後から近づいてきていた二体の内一体の魔族の首を、返り血を彼女に当てぬよう斬り落とす。二体目はそこその手練れだったのであろう。一撃目を避け、反撃を行ってくる。

だが、遅い。

ルストと比べれば、あまりにも。

「あら。流石ですね」

心臓を一突き。体勢を崩した二体目は躲す余地も無く、命を落とす。

懐かしい感覚だった。旅をしてきた時と同じ、全能感にも似たそれは。

きつと前世において、殺戮、と呼ぶものなのだろう。

「彼、魔王軍でもそこそ腕の立つ方だと記憶していたのに」

「俺はあなたの剣ですから」

この程度であれば、問題なく。増してや、相手が魔族ならば猶更に。

今更引き返すつもりはない。どうせ俺に退路など存在しない。

彼女の手を取った時点で、俺は魔族にも人間にも居場所はない。

「かかってくるといい」

ゆっくりと前に進みながら、俺は自嘲する。

ああ、そうだ。己はたった一人の少女のために、否。

俺自身の欲望のために、こいつらを殺すのだ。

だから、せめて強くいてやろう。

お前達が、負けたのは、最強の剣士を相手にした故だと証明してやるために。

彼女と敵対してしまった事実こそが、何よりの悪手だったのだと証明してやるために。

「お前達に、最強の剣を見せてやろう」

その後のことは、言うまでも無い。
数百の屍が転がるだけだ。

なんともまあ、つまらない物語

『私の娘を返して』

私を産んでしまった人が最後に言っていた言葉。

己がどれだけ忌むべき生命かを、自覚させてくれた言葉。

そして、彼女の憎悪がどれほどだったかを表す言葉。

なんてことは無い。本当に、なんてことは無いのだ。

ただ、あの子の体を奪ったのが私で、今世の魔王は勇者と魔王のシステムを知っていた。だから私が本当の子供ではないのを理解してしまって、それをあの人知っただけ。

滑稽な話だ

それに気づくまで、随分と長い時間をかけてしまった。

二人に愛されようと、これは神様と彼女がくれた命だからと。

そんな浅はかな考えで、他人の人生を貪り食い、愚かしくも己の命を己のために使うとした。

馬鹿な女だ

『母を、食ったのか?』

絶望に彩られた顔で私に聞くあの人には、非常に申し訳なくなつた。

当然だ。まったく故知らぬ赤の他人に、己の最愛の妻を食われてしまったのだから。

すぐに彼も彼女と同じ世界に送るつもりだったのだが、世代が移り変わろうと流石は魔王。

その猛攻を前に、私はあの人を食う暇も無く地面に倒れ伏した。

『何故、あいつを食った』

そう問いかけるあの人に、私は返した。

『だって、自分が腹を痛めて産んだ娘に会えないなんて、可哀想じゃないですか』

長い間、本来生まれるはずであつた彼女と話してきた。

彼女はとつても優しく、かわいらしくて、純粹だつた。

だからこそ、とても悲しいことだつた。

彼女が、私なんかのために消えてしまうのが。

『ああ、哀れな女だ。哀れな子供だ。お前はそんなこと、全く考えちゃいないのさ』

彼は時々、私でも理解できないことを言う人だ。

そんなことを考えていない？ まさか。私は嘘なんて一つも吐いてない。

『すまなかつたな。貴様を愛してやれなくて。愛を教えてやれなくて。憎しみを教えてやれなくて。人を憎むという、当たり前前のことを教えてやれなくて』

何故そんなに、悲しそうな顔をするんだろうか？

一体この人は、何を言っているのだろうか。

『まだ貴様に食われてやるわけにはいかないな。ああ、そうだとも。せめて妻を食われた報復に付き合ってくれ。お前にそれが芽生えるまで、もう少しだけ生きていよう』

それが何なのかは、最後まで教えてはくれなかった。

這う這うの体で逃げ出しながら、私はあの人を食べるための手段を講じ続けた。

魔王を殺すには、勇者の力が必要だ。そして勇者は、私と同じ別世界から来た者だ。

それなら、きっと勇者を利用できると思っていた。

だつて自分と同じように、勇者もまた望まぬ生を受けたに違いない。

あまり認めたくはないのだけれど、私はどこか期待していた。

自分と同じ境遇の勇者なら、きっと私の考えにも賛同してくれる。

全てを平らげた後の世界で、最後に穏やかな時間を少しだけ過ごしてもいいかもしれない。

まあ、そんな考えは全て、私の思い込みに過ぎなかったわけなのだが。

『二人は僕を、それでも愛してるって言ってくれた!』

滑稽な話だ

ああ、私は本当に、何を期待してたんだろう？

息ができなくなるほど笑い転げたい気分だ。

何もできなくなるほどに、自分の愚かしさを嘲笑いたい気分だ。

何を期待してたんだろう。

今となつてはもう分からないし、理解しようとも思わない。

ただ分かるのは、私はこいつが。

「世界で一番、大嫌いですよ」

だから、お前を使いつぶしてやろう。

ああ、なんて滑稽な姿だろうか？まだ私との約束を心の奥底で引き摺っている。

あの子を勇者にしてよかった。お前の苦しむ顔がよく見える。

ああ、あいつの記憶を平らげておいて正解だった。

おかげでこの男は、また何も知らずに私に忠義を誓っている。

本当に愚かしい。学習能力がないらしい。私以上に滑稽で無様ではないか。

親友であつた勇者と殺し合い、楽しそうなそいつを見て不愉快になる。

もつと苦しんでほしいのに、この男は親友だつた勇者と戦うのが好きらしい。

忌々しい。もつともつと絶望して、最後にはみじめに死んでしまえばいい。

『お前にもようやくそれが芽生えたか』

ああ、まったく何のことだか分かりませんよお父様。

耳障りだ、入ってくるな。

『分かっているはずだろう？分かつていて目をそらしているだけだろう』

ああ、煩いな。何故急にそんなことを言うのですか？

自分の愛しい人を、家族も何人も殺されて、それでも笑っているのですか？

理解できない。この人は壊れてしまったのだろうか？

『貴様はもう、己が望んだ結末を辿ることは出来ぬ』

私の望んだ結末は――

☆○○☆☆

「ソフイート様。大将を残し、全員打ち取りました」

「ん。ご苦労様、エンヴァ」

両手足を斬られ、地面を這いずる彼女の腹違いの兄弟。

名前は……たしか、イブリスと言っただろうか。

呻き声を上げているイブリスは、ソフイート様を見上げ、睨んでいる。

「父上を、裏切ったか、出来損ないめ……！」

「裏切る？私ですか？」

クスクスと笑う彼女に、イブリスは罵声を浴びせる。

「実の母にも見捨てられ、それでも貴様を生かした父上の慈悲を蹴り、あまつさえ反逆だ
と!?やはり貴様は、あそこで殺されているべきだった!」

「落ち着いてください、兄さま。あまり怒られると、私の騎士が驚いてしまいます」

ソフィート様は、何を言われようと表情を変えない。

人形のようなその顔を歪ませることはなく、イブリスの顔が見えるよう屈みこむ。

「大丈夫。私の目的は、家族皆が暮らせる世界。そのために、イブリス兄さまの力も貸し
てもらいたいのです。お父様と戦うには、妥協は命取りですからね」

「何を——!?!」

「エンヴァ。少し恥ずかしいので、目を閉じていてくださいね?」

言われた通り己の目を閉じる。

数秒間の間、イブリスの悲鳴が周囲に響き渡る。

「もう開けていいですよ。用事は終わりましたから」

目を開ければ、イブリスが転がっていた場所には何も残ってはいない。彼女のもう一人の兄マモンの時や、他の強力な魔物を倒した時と同じだ。

「……」

「私がしていることが気になりますか？」

「いいえ。俺はあなたに、最後までついていくだけですから」

「あら、私に興味を持ってきていないのかしら？それはそれでかなしいですね」

「あ、いえ。そういうわけでは……」

「冗談です」、とクスクス笑う彼女に、俺もまた笑って返す。

気づいてはいる。俺はまず間違いなく、何か重要なことを見逃している。

本当なら気づけるはずのそれを、触れれば何が起きるかわかるから、それから逃げている。

「エンヴァ。あなたを誰よりも信頼していますよ」

甘い言葉だ。自分を甘やかしてくれる言葉だ。

俺に彼女の真意は分からない。彼女が俺をどう思ってるのかは分からない。

ただ、きつと言葉通りのことは思っていないのだろう。

きつと俺を使い潰すつもりなのだろう。

「ソフイート様」

「どうしました?」

「あなたは、グラトニカという少女を知っていますか?」

——ああ、目を細めた

彼女の嘘は、案外と分かりやすい。

あの時と同じように、彼女は自分すらも騙して嘘をつく。

目を細めて、笑顔を浮かべて、彼女は虚言を口に出す。

「知りませんね。急にどうしたのですか?」

「いえ。なら、いいんです」

「そうですか」

いいわけがない。

彼女がグラトニカであるなら、それについて問い詰めなければならぬ。

何故それを俺に言わなかったのだとか。何故今更、俺に会いに来たのだとか。

けれど、それを聞いてしまえば、彼女はまた俺の傍から離れてしまうだろう。

また俺は一人に戻る。親友も初恋も、再び得た最後の拠り所すら失ってしまうだろう。

(それが、どうしようもなく怖い)

「あと一時間ほど歩けば、お父様がいる都市につきます」

「決戦、ですね」

「ええ。あなたには存分に戦ってもらうことになります。けどその前に、今一度聞いておきますね？」

「あなたは勇者を倒せますか？」

「倒します」

それだけは、決して違えてはならない約束だ。

俺は必ず、あいつを倒し、唯一の価値を示さなければならぬ。

それさえできなければ、俺は俺の存在を許せなくなる。

最高の才能と、最高の肉体を、本来のエンヴァは持ち合わせていたのだ。

本来であればだれにも届き得ないそれを、俺は奪ってしまったのだ。

なら、それを奪った人間として、絶対にそこだけは譲れない。

「勇者を。最強の聖剣を倒すのは、あなたの魔剣とこの俺です」

「それを聞いて安心しました」

地獄に向かって進んでいく。

戻るための道は、とつくの昔に見失った。

いいや、己自身の決断で、それを塞いでしまったのだ。

「では。開戦の狼煙を上げましょう」

閉ざされた門を前にして、触れば砕けそうな水晶の刀身を鞘から抜く。

生前であれば絶対に不可能なその所業も、今の身体と才能であれば、容易く行える。

ズズン

人が二人通れる程度に斬りぬかれた扉が、前に倒れる。

それを踏みしめ、俺と彼女は魔王が座するその町に足を踏み入れる。

同時に聞こえる関の声。

俺達が今いる北門と、その反対側の南門。

二つの場所から、争いの音が響き渡る。

「あら、奇遇。あちら側も到着しているみたいですね？」

「そのようです。如何しますか？」

「どうせ目的は同じです。進みましょう。お父様は、あの建物の頂上にいるでしょうし」

本来ならば城砦が存在していた場所には、邪悪な気配を漂わせる城が堂々と建ってい

る。

おそらく、あそこで待っている者こそが、勇者が倒すべき敵にして、彼女の父親。あそこから放たれる重圧に比べれば、周囲に群がる魔物達や魔族など物の数にもならないだろう。今から戦う相手が魔王であると再認識し、思わず体を震わせる。

「怖気付きましたか？」

そんな俺の様子に気づいたのだろう。

彼女はクスクスと笑いながら問いかける。

「まさか。武者震いです」

「この世界に武者なんていませんけどね」

「……では、騎士震いと」

「フフツ、その様子なら大丈夫そうですね」

他愛も無い会話をしながら、剣を振るう。

魔族から放たれた雷撃や炎も、俺が剣を振るう前に彼女の体に阻まれる。

魔法も剣も、今の俺達には効きはしない。もし倒せる存在がいるとすれば、勇者か魔王。

倒すべき二人の存在を想い、思わず笑う。

「待っている、ルスト」

本題は魔王のはずなのに、どうしても先に彼の顔が浮かんでしまう。

完全に個人的な願望ではあるが、やはり俺はあいつに勝ちたい。

聖剣を抜き、勇者となったあいつの力は、俺が思っていたより遥かに強かった。

魔王にすら届きうる力を手に入れた今のお前の実力は、果たして一体どれほどだろう。

「お前にだけは、絶対に——」

だからこそ、必ず勝とう。

お前と対等であると証明するために、俺が勇者よりも強いと声高に証明するために。

そして何より、俺を救い上げてくれたこの人のために。

その道が、地獄に落ちていくものであっても。

父さんと母さんを悲しませてしまうものであっても。

あいつに、嫌われてしまうようなことであつたとしても。

『あなたは私と、地獄に落ちてくれますか?』

もう、選択すらできないことは嫌だから。

☆○☆○☆

「いくら何でも数が多すぎるだろこれ!!」

「一体どこにこんな数の魔物や魔族が隠れていたんでしょうね!」

「無駄話をするな貴様ら! 気を抜けば飲まれるぞ!」

予想以上の戦力だ。魔王も本気と言うことだろうか。

なだれ込むように迫ってくる敵の軍勢、しかもどれもこれもが強敵揃い。

オーガにサイクロプス、ケルベロスにスレイプニル。

どいつもこいつも、僕らでさえ数えるほどしか見たことの無い上級魔物。

ドラゴンのような図体のでかすぎる魔物はいないが、それでも二階建ての家の屋根ほどもある高さの魔物が、何匹もいるのは実に壯観だ。

そしてそれを相手にして尚、焦りはすれど押しつぶされない仲間も流石だ。

竜気を纏った拳が、聖なる輝きを帯びた刃が、鉄をも焼き尽くす業火が魔物を蹴散らす。

前哨戦にしては随分と豪華であるが、あまり問題は無さそうだ。

「つうかおい、ルスト！お前強くなりすぎだろ!?ズルだズル！」

「そんなこと言われても困るんだけど」

まあ、たしかに自分でもちよつとズルいとは思いますが。

少しの魔力を込めて剣を振るうだけで、数十の魔物が光の奔流に飲み込まれ消えてい

く。

大して魔力を込めているつもりは無いのだが、威力も範囲も桁違いだ。これが勇者の本当の力だとするなら、歴代の勇者が残したデタラメな伝説にも納得がいく。

「頼もしい限りではありませんが。ここまで凄まじいと、ちよつと妬きますね」

「これほどの力がなければ、魔王を倒せんということだろう。馬鹿なことを言つてないで手を……動かしてはいるようだが、勇者様の気を逸らすような無駄話はやめておけ」
「大丈夫。このくらいなら雑談しながらでも問題はない」

以前までの僕であれば、この時点でそれなりに消耗していた。

しかし今となつては、底をつく心配が無い魔力量によつていたずらに魔族と魔物の被害が増えていくだけとなっている。人海戦術も、こうも差があるとただの兵力の浪費だ。

「疲れたなら休んでおいて。一番重要な場面で息切れなんてしてほしくないしね」

「……ツチ。癩だけど、雑魚相手に本気出すのも馬鹿らしいしな。任せてやる！」

「素直に礼を言えイヤル！ 申し訳ありません、勇者様。あとはお願いします」

「一応魔法によるサポートは使っておきます。存分に無双してください、勇者様！」

リージェの支援魔法により軽くなった身体で、軽く跳躍し屋根の上に降り立ち、彼女から教えを受けて会得した遠見の魔法を詠唱する。

魔王軍に占拠されたと言っても、元は巨大な都市だ。

殆どが殺されるか逃げるかしているだろうが、制圧されてそう時間は経っていない。

家に立て籠もったり、魔物達に囚われている人間がまだ残っていると踏んでいたが……。

「広範囲の攻撃を行わせないための人質、かな？よく考えてる」

何度か見せた聖剣の最大出力を警戒しての人質なのだろう、この街の生き残り達は。

広範囲無差別攻撃なんて行ってしまえば民を巻き込んでしまう。王様の権威を下げてしまう恐れもあるし、何より僕自身が人を殺したくないので、確かに動きは制限される。

「なら、無差別じゃなけりゃいい」

笑って、聖剣の先端に黄金に輝く魔力を収束させ、それを幾本もの光線に分裂させ放つ。

不規則な軌道と共に、聖剣は特に目立つでかぶつの魔物達の頭部を破壊する。建築物の邪魔さえなければ、あと百は追加で討伐できたかもしれない。

「進もう」

人質も、魔法も、最も信頼していた己の肉体も。

全ての策を塵のように打ち砕かれ、戦意を喪失し一步後ろに下がる魔物と魔族達。恐怖で揺れる瞳には、血を一切浴びず流さず、そいつを見下している僕の姿。

敵目線で見ると、僕って結構怖いらしい。

「襲ってこなきゃ殺しはしないよ」

それを一瞥だけして、さっさと魔王が待つ城へと乗り込む。

魔王さえ倒せればこいつらは撤退するだろうし、無駄な戦闘を繰り返すべきではな

い。

何より、彼らに先を越されてしまえば、何が起きるか分からない。

「化け物め」

最後に聞こえてきた、負け惜しみのような魔族からの言葉。

今更過ぎて、少し笑ってしまう。当たり前だろう、ずっと前からそうだ。自分は正真正銘の化け物だ。実の両親を殺した怪物だ。

「それでも、できることはある」

僕を初めて人間として見てくれた彼と、決着をつけないならならぬ。

魔王を倒すまでは共闘してくれるかもしれないが、その先はきつと敵だ。

「待っててね、エンヴァア君」

彼に伝えたい想いは山ほどあるのだ。

そのためにも、絶対に彼を二人の元に連れていく。

そして説教をしてもらい、またあの二人から頭を撫でてもらうのだ。

「絶対に、助け出す」

覚悟を決めて、仲間と共に一步を踏み出した。

あなたが無くても生きていけます

「もうすぐですね」

「……はい」

もうすぐだ。

もうすぐで、この戦いに決着がつく。

「この先にいるのが、私の父であり、この世界を脅かす、魔王」

「本来であれば、勇者が倒すべき存在」

聖剣が在って、ようやく同じステージに立つことができる超越存在。それ以外の人間には決して歯が立たぬはずの、不条理の化身の一つ。まるで世界にそう在れと願われたような、圧倒的なる個の生物。

「タイムリミットはそう長くはありませんね」

「はい。ルスト達も、すぐに来ます」

戦力は勇者とその仲間達の方に集中している。

タイムリミットは、ルスト達が魔王の待つ玉座に到着するまでだ。

それまでの間に、俺は魔王を殺さなければならない。

「証明する時です、エンヴァ。あなたが勇者であると。聖剣なんて無くても、魔王を倒せると」

「……必ず、ソフイート様の信頼に応えます」

言葉は短く、鉄門を切り伏せ踏み込んだ。

あり得ないほど広い部屋は、おそらくは空間を伸ばす魔法で作られたのだろう。

その奥、禍々しい玉座に座する男は、以前見た時と同じように、おどろおどろしい魔力を垂れ流し、俺とソフイート様を一瞥する。

「来たか」

「はい。約束を果たしに参りました、お父様」

不自然に感じるほど、魔王は冷静だった。

怒るも、嘆きも浮かべずに、ただ嬉しそうに笑い杖を手に取る。

「ようやくだ」

「心待ちにしてくださいましたか？」

「そうだな。していたとも。さあ、始めようグラトニカ」

一瞬、空気が歪んだ。

「私の名は、ソフィートです」

「やめておけ。虚しいだけだ。あの日にソフィートは死んだ」

「死んでなんかいませんよ。生きています。私の中で、彼女は――」

「もう、いい子ぶるのはやめておけ」

何故だろうか？

魔王と、恐怖の象徴と対峙しているはずなのに。

何故だか、とても懐かしいような、暖かいような何かを感じるのは。

「そんなもの。お前には似合わんさ」

その声色は、まるで。

親が子を諭すように、穏やかで。

「始めよう」

「ッ!？」

——その次の瞬間には、俺は吹き飛ばされていた

「テレポート……!？」

「否。単純に移動しただけだ」

あり得ない。

初めて戦った時は遊びだったのか？

視覚が、聴覚が、五感の全てがその速さに追いつけない。

剣才による先読みと、ソフィート様の剣による魔力消滅。

その二つが無ければ、俺は最初の時点で死んでいた。

「お父様の力を弱める太陽が無い以上。彼はその力を万全に振るうことができます」

魔力の剣を、降り注ぐ滅びの雨を、当たり前のように放たれる不可避の攻撃を。それら全てを捌き、背を伝う汗の感触を必死に無視して、彼女の言葉に耳を傾ける。

「滅びの魔力を推進力とし、人智を超越した速度を出す。それがお父様の本来の戦い方。歴代の魔王の中でも最も速度とパワーに優れた、最強の魔王」

攻撃する隙が無い。ただのゴリ押しだと言うのに、手も足も出ない。

魔王の戦い方を見誤った。脳筋だ。こいつ凄い脳筋だ。

「エンヴァ。残り時間はそうありませんよ?」

初めて彼女を少し恨んだ。戦い方を知ってるなら先に言っておいてほしい。強い。ただ強い。馬鹿らしいほどに強い。シンプルに、単純に、明快に。これが魔王。これが最強。これが魔の頂点。

「さあ。どうにか、倒してくださいね?」

「……了解、しました!!」

俺にはそれが、『死ぬ』と言っているようにしか聞こえなかった。

☆☆☆☆☆

「……戦闘音?」

「エンヴァ君だ」

凄まじい轟音が上の階から響いてくる。

魔物は未だ湧き続けているが、そろそろ数も少なくなってきたようだ。

魔力も十全。魔王が相手だろうと、彼が相手だろうと、戦う準備はできている。

「急ごう」

「ああ？お前の言うことが確かなら、あの野郎が魔王と戦ってんだろ？なら決着がついた後に、消耗した魔王をやりやいいんじゃねえか？」

「それじゃ遅い」

もう時間は無い。戦いが始まった以上、そう長くない時間で決着はつく。

勝敗は決まっている。問題はその後だ。

「詳しく説明してる時間は無いけど、遅れたら最悪の事態になる」

「……それは、あなたにとって、ですか？」

「僕を含めて、だよ。エンヴァ君がどうこうの問題じゃない」

そうとも。どうなるかは分かり切っている。

あいつの狙いは、僕が来る前に全ての準備を終わらせることだ。そうなれば、僕でも勝てるかどうかかわからない。

「何が何だか分からんが。とりあえず上に行きやいんだな!？」

「それで合ってるよ。ジャステイ。リージエ。イヤル。お願い」

「よっしゃあ! 任された!!」

「おい待て、まずは作戦を……!」

イヤルの放った竜気が天上をぶち破る。

なるほど、いちいち階段を上がったりするより遥かに効率的だ。

ただし、そんなことをすれば当然、この巨大な建築物のバランスは大きく崩れるわけ
で。

「この馬鹿が!!」

崩れ、降り注いでくる瓦礫や崩壊に巻き込まれた魔物をジャスティの結界が弾き返す。

聖なる祝福を帯びた盾は、聖剣の力や魔王の力を除き凡そ全ての力を防ぐ。

最も、これだけではただ単に城の一部破壊しただけで、魔王の間には行けないのだが。

「飛びます！衝撃注意！」

リージエの帽子から飛び出した絨毯が、僕らを乗せて上へ上へと飛翔する。

流石は頼れる仲間達。指示してからの対応が実にスムーズだ。

最短距離、最大効率、消費する労力も最小限に。

まあ最も、予測されている現象の当てが外れれば、ただの間抜けなのだが……。

「よし、大丈夫っぽいね」

「だろ？へへっ、やっぱ俺の勘は良く当たるぜ」

「外れていればとんでも無いことになったんだぞ馬鹿め！クソ、覚えていろよ……」

僕らが通り抜けた穴は、一秒もかからずに、時が巻き戻るように塞がっていく。

魔王の居城だ、おそらくは防壁魔法と再生魔法くらいかけているだろうと思つてはいた。本当ならリージェがそこらへんを解析してから始めるのが最善手だったのだが、今回はそれをする時間すら惜しいのでショートカット。

「もし再生魔法がかかかっていなければ、今頃城が倒れて街がおじゃんでしたね」

「そうなりそうだったら城ごと消し飛ばすから問題は無いさ」

「そーそー。多少のことならこいつのゴリ押しでどうにかなるって！」

「勇者様の消耗を少しは考えんか貴様……！」

いやまあ、それくらいなら大して疲れないし問題は無いのだけれど。

多分言ったら「甘やかすな」とか言われるし口を噤んでおこう。

こんなことを考えられるようになった自分に、少し笑ってしまう。

あの頃と比べれば、随分と彼等に気を許してしまったものだ。

「突っ込むよ。捕まっておいて」

「え？勇者様、何を——」

光を纏う。

聖剣から溢れる魔力をとめどなく放出し、それを出力に強引に扉をぶち壊す。多分音とかいろいろ置き去りにしたが、流石私の仲間達。

滅茶苦茶青ざめた顔をしているが、なんだかんだで振り下ろされてはいない。まあ数秒ほど光の世界にいただけだ、これくらいなら大丈夫だろう。

「……ハハ、ハハハ」

ああ、そうだ。こうなることは予想できていた。

最強の魔王？ 聖剣の資格がない？ くっだららない。

彼が、僕の親友が。誰かに負けるはずなんてないだろう。

「エンヴァ君」

「……どうだ。どうだ、どうだどうだ！ 見たか、ルスト！」

いつも無茶ばかりだ。片腕を無くし、呼吸も虫の羽音のようにか細い。

だと言うのに、彼は膝を折らない。きっと彼の勝利は絶望的だ。

それでも、きっと彼は勝利を譲らない。

「おい。あれ……」

「あり得ません」

リージエが驚嘆の声を上げる。

そりやそうだ、数百年続く常識が、今日の前で壊れているのだ。

「聖剣を持たぬ者が魔王を倒すなど、前例がない！」

魔王の首は、今地に落ちた。

「なら、今日から俺がその前例だ！」

心の中で、リージエに感謝する。きっと彼は、そういわれることを期待していた。

昔から、人より凄いことをするといつもあの二人に胸を張っていた彼だ。

根っこは結局変わらない。褒められたがりの、彼のまま。

「見ただろ、ルスト。聖剣なんぞ、無くても。魔王は倒せるんだよ」

「知ってたよ。君が最高にかっこいいことなんて、昔から知っていた」

本当なら、今すぐにも彼に駆け寄りたい。

『よくやったね』って、『凄い』って、昔みたいに彼と一緒に喜びたい。けれど。それをするのは、これが終わった後だと決めていた。

「決着をつけよう」

聖剣の光は、魔王の娘を。

否。

新たな魔王を指し示す。

「魔王グラトニカ」

暴食の魔王は嗤う。

「お前を、殺しに来たぞ」

「はい。お待ちしておりました、勇者様」

☆☆☆☆

勝った。勝った？

本当に勝ったのか？

俺の錯覚かもしれない。

あんな化け物みたいなやつに、俺は勝った？

「……ハハ、ハ」

心臓を刺し貫かれた魔王は笑う。

心底おかしそうに、俺の顔を見て笑う。

「ああ、まったく。長生きはするものだ。ようやく、心残りを晴らすことができる」
何のことだ？こいつは何を言っている？

「すまん、若造。我が娘の、最初で最後の我儘に。最後まで、付き合っつけてくれ」
崩れ落ちた魔王の身体。

ソフィート様は俺の方をみて微笑んだ。

「よくやってくれましたね、エンヴァ。想像以上です、あなたの力は」
「……」

褒められているのに、何故だろう。胸に刺さった何か、どうにも気持ち悪い。
魔王の最後の言葉が原因か？

違う気がする。

多分これは、とつくに気づいていたはずの違和感だ。

「エンヴァ。あなたは今、真の勇者になったのです」

俺の目的は果たされた。聖剣なんて無くても、魔王を殺せるなんだと証明できた。

『エンヴァ君』

「……ハハ、ハハハ」

そうだ。見ろルスト。俺は魔王を倒したぞ！

お前がまだできていないことを、俺は成し遂げてやった！

『聖剣を持たぬ者が魔王を倒すなど、前例がない！』

そうだと。俺が初めて、魔王を聖剣無しで打ち取った！

全部俺が願った通り。全部思い通りに進んでる。何も問題なんて無い！

そんなわけ無いだろ。

『知ってたよ。君が最高にかっこいいことなんて、昔から知っていた』

やめろ。

なんで俺じゃなくて、彼女を見るんだよ。

お前が戦うべき敵は、俺のはずだろ？

『決着をつけよう』

知ってるよ。

その剣が、俺に向かないことなんて。

あいつが、本当の魔王じゃないなんて。

とつくとつくの、とつくの昔に知ってたんだよ。

『魔王グラトニカ』

うん。やっぱり馬鹿だな、僕。

「お疲れ様でした」

魔王の右手は砕かれた。

魔力殺しの剣は、当たり前のように俺の手から離れた。

当然だろう。知ってるよ。なんで知ってて、その手を取ったんだろうな？

分かってるよ。後悔だ。

初めて恋した人から嫌われたくなくて、結局彼女に縋りついたんだ。

選べなかったあの選択を、やり直せた気になってたんだ。

笑わせる。

彼女にとってあの過去は、とっくに覆せないものなのに。

「あなたのおかげで、魔王の力を我が物にできました。これで夢を叶えられます」

知ってるよ。あなたが俺を、その夢の先に連れて行ってくれないことを。ずつと仕込んでいたんだろう？

ルストに勇者の力を渡したのも、この瞬間のためなんだろう？

「あなたのおかげで、世界一嫌いな男の死に様を見れました！」

理解してるよ。その男って僕なんだろう？

自分を選ばず、自分を裏切り。

一人ぼっちの君に、手を差し出さなかった俺を恨んでるんだろう？

「用済みです。死んでください。もう私は、あなたが無くても生きれます」

彼女の身体が肉を帯びる。宝石の身体は、最初から借り物だった。殺し食らったソフもう一人の彼女フィットが持つ、たった一つの才能だった。

「一人寂しく朽ち果てろ。私の世界にお前はいらない」

彼女の手刀は、俺の腹に穴を空ける。

まあ当然、俺の身体にそれを耐える余裕なんてない。

多分死ぬな。何もできず、結局死ぬんだな。

「あなたなんて、世界で一番大嫌いだ」

彼女の腕から伝わってくる憎悪と殺意を感じながら。

俺はゆっくと、目を閉じた。

楽しそうに笑いましたよ

『お前、うざいんだよ』

そんな理由で、何度も叩かれた。

『見下されてるようで、気色悪い』

そんな理由で、遊びに入れてもらえなかった。

『あなたと一緒にいるのは、もううんざりだもん』

しょうがない、と諦めようとしても、やっぱり納得ではできなかった。だって、お母さんもお父さんも言っていた。

嫌いな人でも、いじめたり無視するのは良くないことだつて。

人間は皆仲良くすべきだつて、子供の頃からずつと言われてきた。

『なんであの子達は、私と仲良くしてくれないの?』

そんな疑問を投げかけても、二人は仲良くしなさいとしか言ってくれなかった。

だから私はいつも笑顔でいたし、二人が言う正しいことを、いつだって心掛けてきた。

二人が我慢しなさいと言えば我慢したし、二人が頑張りなさいって言うなら頑張った。

だから、二人が『一緒に死のう』って言った時も、嫌だけど領いた。

死ぬ時は苦しくて、気持ち悪くて、変な感覚がして。

それでも、言う通りにしたらほめてもらえるから、頑張った。

ねえ、お母さん、お父さん。

私、言う通りにしてるよね? 二人の言いつけ、守ってるよね?

『グラトニカはさ、我儘の一つでも吐いた方がいいよ』

私の中にいるもう一人の子のソフィートは、とつてもとつてもいい子ちゃん。いつも私のことを心配してくれて、いつも私と他愛も無い話をしてくれる。最初は怖かったけど、暫くしてすぐに初めてのお友達になつてくれた。

『なんであんなこと言われて素直に頷いちやうかな。消えるのが怖くないの?』
『怖いですけど、あなたの方が明るい子ですし。それに、お母様はあなたのことが好きなんだもの。だから仕方ないの。我儘言つちや、二人を困らせてしまいますから』

勇者と魔王は、二つの魂を一つの肉体に秘めて生まれらしい。

幼い精神では体に秘めた力に耐えきれず、魂が崩壊してしまうからだとか。だから、私みたいな存在を別世界から連れてこられてしまうんだとか。

迷惑だな、と思うけど、初めての友達を作れたことには感謝している。魔法というのを使うのは楽しいし、ソフィートはとつてもいい子だし、私を仲間外れにするような子もない。

だから、私達を産んだ今世の両親が、私に変えてくれた頼んだことも、悲しくはあるけど受け入れるつもりだ。そう思えるほど、私はこの世界で楽しい人生を送れたのだから。

ら。

『私はそんなの、納得できないよ』

『ソフィートは優しいですね』

『グラトニカ、逃げちゃおうよ。魔王を継ぐ必要なんて無い。勇者と戦う必要なんてない。遙か昔の、顔も知らないようなご先祖様達の因縁に、私たちが巻き込まれる必要なんて無い』

『我儘言っちゃダメですよ、ソフィート』

ふくれっ面の彼女を夢の中で諫めて、いよいよ私が消えることになった時。ふと、彼女はあの一つの疑問を投げかけた。

『グラトニカは、何かしたいことはある?』

『したいこと?』

無い。そう答えようとして、けれど一つだけ思い浮かぶものがあった。

ずっと納得できず、今でも分からない彼等彼女等のこと。

なんであんなことをするのか、何が目的なのか、何度聞いても分からなかった。二人は、理解しなくてもいいなんて言っていたけど。

『……一つだけ、知りたいことがありますね』

『へえ、なにになに？』

『私は——』

私の代わりに、あの子が消えた日のことだ。

だから、今この時だけはあなたに感謝してあげる。

ようやく、あの子達が言っていたことが理解できたのだもの。

「ずっと目障りでした」

「いない子のはずなのに、親に愛されているあなたが目障りだった。同じ境遇なら、きっと皆そうなると思っていた希望が打ち砕かれた。」

「見下されているようで、気色が悪かったです」

世界のせいだ、私のせいじゃない。

そう叫ぶことが、言い訳みたいになるのが嫌だった。

『なんで彼はできているのに、あなたはできないの？』 って言われるようで。

「あなたと一緒にいるのは、もううんざりだ」

倒れ伏したそいつに、意味も無い言葉を投げかける。

ようやく、私の一つ目の願いが叶った。

そっか。こんな気分なんだ、嫌いな奴を叩くのつて。

こんなことなら、もっと早くにやっておいた方がよかったのかもしれない。

「私は——おっと」

ギイン、という鈍く鋭い音が鳴り響いた。

咄嗟に水晶の身体から、己が食べた肉体の中で最も強靱な体へと変化し、その刃を受け止める。

彼女の魔法無効は強力ではあるのだが、その代償となる肉体の脆弱化が今は致命傷だ。

砕けた元の右腕の代わりに、ズルリと新たな腕を生やして、その感触を確かめる。

予想はできていた。

無様に転がっている何者でもないあれに、今代の勇者はご執心だ。

それが殺されたとなれば、巨大な殺意が私に向くのは容易に想像できていた。

「イヤル、彼をお願い。まだ助かる」

「……おう、任せとけ」

「ジャステイ、リージエ。援護お願い」

「了解です」「承知しました」

予想外だったのは、思いのほか彼女が冷静だったことだ。

獣のような殺意を溢れさせると思っていたが、存外にその眼は冷たく鋭い。

怒りはしているが、予想外ではないと言った風だった。

「驚きました。てつきり、もう少し怒るのかと——」

言葉を言い終える前に、二振り目の刃が私の喉元の寸前で止まっていた。指で刃を止める、というのは初めてやってみたが、実際にやると少しキツイ。滅びの魔力を纏わせてはいるが、本気の勇者相手には若干押されがちになる。

「訂正します。凄く怒ってますね」

「予想はできていたよ。できていたからこそ、残念だ。君の考えが変わらなくて」「あら、知ってて放っておいたんですか？ますますあれが惨めで哀れですね」

おそらくは、彼女に与えた本物のエンヴァが伝えたのだろう。

不本意ではあるが、あれは私の心をよく見ていた。

結局懐柔には失敗したし、挙句の果てに酷いことを沢山言われてしまった。早々に新しい受け渡し先ができたのは、案外運が良かったかもしれない。

「惨めなもの、哀れなものもお前だ、新たな魔王。己の父親を喰らったか」

「父親と言っているいいかもわかりませんがね。今の私はソフィートではなくグラトニカ。優しい彼女の皮を被った役者ではなく、醜いありのままの姿を見せる、ただのおせっかいな部外者です」

新たに手に入れた力を、本物の滅びの魔力を剣の形に変え振るう。

あれが振るっていた剣技の真似事だが、それでも魔王が振るえば、それは最早災害だ。壁が修復すら間に合わず分解され、消滅し、何の形も残さずに消えていく。

彼女が振るった光の剣で相殺されて威力の大部分が無くなってもこの破壊力。

今代の勇者はおそらく歴代一の魔力を持っているが、私はおそらく歴代一の手数を持っている。

出力勝負ならば、彼女が私の一歩先に行く。

だが、絡め手がありならば、いくらでもやりようはある。

「ツツ!?!」

「姑息ですが有用でしょう?」

かつて喰らったアルラウネの力を使い、彼女の足に生やした蔦を絡まらせる。

一瞬の停滞は、その命を刈り取るには有り余るほどの時間がある。まあ、そう簡単にはいかないのだが。

「炎よ!!」

勇者ごと焼き尽くす業火によって、拘束が解かれ直前で避けられる。

魔力を纏わせている勇者にあの程度の炎は効かないのだろうが、思い切りがよいことだ。

幾つもの死線を潜り抜けてきただけはある。

「ありがとう、リージェ」

「お安い御用です」

あの男を連れ部屋から脱出した竜人は、パーティーの回復役を一手に担っていたのだろう。

となれば、一番に狙うべきは最も頭が回るエルフの魔法使いなのだが……。

「そのような小手先だけの技で、押し切れるとは思わぬことだ！」
「ありがとうございます、ジャステイ」

完全に死角を突いたはずの魔法も、大盾を持った人間の騎士に防がれる。

滅びの魔力で押せば容易く崩れるだろうが、勇者を相手取りながらは厳しいだろう。

分かつてはいたが、かなり連携の完成度が高い。

勇者が主力となり、魔法使いが支援を行い、狙われやすい魔法使いを騎士が守る。

それに加えて、フルメンバーなら回復役もいる。

「万全ですね。けど……」

所詮、警戒に値すべきは勇者のみ。

魔力を纏わせた、私本来のメインウエポンである触手を振るう。

海の魔物であつたこの世界での母から受け継いだ、変幻自在の万能武器。

それを勇者が受け止め、押し返すと同時に空気が軋み、音を上げる。

やはり下手に武器なんかを使うより、こっちの方が肌が合う。

まあ、私がこれを使って勝てたことなんて殆ど無いのだが……。

今だけは別だ。

「どこまで持ち堪えられますか？」

「それは、君もだろ！」

あちらは魔力は無尽蔵でも、体力には限界がある。

こちらは魔力は有限でも、腐っても魔族だ。体力は人間より上。

普通にやれば消耗戦だ。頭のいい方が、戦いが上手い方が勝つ。

だが、彼の剣技の才と同じく、私にも一つだけ、許されざる理不尽を持つ。

「獲ったー！」

騎士の剣が、勇者との剣戟の合間を縫って私の右腕を斬り落とす。

痛みはあるが、慣れたものだ。右手となれば猶更に。

先ほどよりも出力の落ちた滅びの魔力、やはり魔力量の差は歴然だ。

本来ならば、このまま魔力の出力で押し負け、真つ二つにされていただろう。

「いいえ。私は別です」

触手の一つが、地面を喰らう。

それだけで私の右腕は再び再生し、弱った魔力は勢いを増す。

「なっ……!?!」

「気色悪い能力してますねえ……っとお!?!」

「人に悪口を言っただけじゃないけません、と学ばなかったのですか?」

「どの口が言うんですかね!?!」

なんとなくエルフの魔法使いの言葉に苛立って、無駄に攻撃を行う。

まあ、母親からも散々言われていたので、別に今更気にしないのだが。

「というか、何が狙いなんですかあなたは。何故わざわざ魔王を倒させ、黒騎士を裏切っ

たのですか。やることなすこと意味が分からず、一貫性がありません!」

「あら、すっかり夢に向かって突き進んでいるんですよ?」

「どこがですか。私には、あなたが無計画に進んでいるようにしか見えない。端的に言

えば、無駄に大物ぶってる馬鹿にしか見えません！」

ズバズバ言うな、このエルフ。

「あなたの目的は、なんなんですか！」

「世界を綺麗にしたいんです」

「はい？」

しまった、脈絡が無かっただろうか？

あの男がこういうノリの方が乗ってくるので、毎回こんな喋り方になってしまふ。もう少し分かりやすいよう、されど短く済むような表現を考えて。

「だって、おかしくありませんか？勇者と魔王が、別の世界で死んだ人間が、他の赤ん坊の身体を乗っ取って、生まれてくるんですよ？気持ち悪いじゃないですか」

ああ、そうだった。たしかそんな感じだったはずだ。

寄生虫のような、惑いはそれ以上に害悪で、気色が悪い最低なシステム。

一体この世界を作った神様は、何を思っこんな存在を生み出したのだろうか。うん、だいたいそんな感じだったはず。

「しかも、理不尽なくらいの才能や能力を持って」

何度か考えたことがある。

なんで私達みたいなのが産まれたのだろうか、って。

その度に、結局何回も同じ結論に達してしまう。

「争いを産むだけだ。産まれる意味なんて無い。正真正銘の欠陥品です」

ああ、そうだった。

忘れちゃいけない、私はそのためにここまで頑張ってきたのだ。

一秒たりとも傍にいたくない男と共にいた地獄のような時間もそのためだ。

「そんな私達を産んでしまったこの世界は、きつとどこかで間違ってしまったんです」

「ここが正しい世界なら、私じゃなくてあの子が消えてしまうわけがない。

この世界が間違っていないなら、あの子のお母さんがあんな顔するわけがない。産まれた意味があるのなら、世界はもっと輝いているはずだ。」

「だから、間違いがない世界に皆さんを連れていきたいんです！」

「そうだ、それをお父様に打ち明けて、私は殺されかけたんだった。」

「殺される直前で、何故か見逃されたけど、ようやくお父様を倒して、力を奪えた。」

「私は真の魔王となった。正真正銘、最強に近い力を手に入れることができた。」

「あの人を食べて、私気が付いたんです。私に食べられた人達は、私のお腹の中で、ずっとずーっと生きてるんだって。」

「ほら、今も声が聞こえる。」

「最初に食べたあの人の、何かの声が聞こえてくる。」

「何を言っているかは分からないけど、お父様も入ってきたし、多分きつと幸せだ。」

「本物の娘も、愛した夫も、ついでにお兄様達やお姉様達もいる。」

私が死なない限りは外敵に悩まされることは無いし、私はその世界にはいないのだ。

「皆を私のおなかの中に入れてあげれば、もう悲しいことなんて無くて済むのです」

なんて幸せな世界だろうか。

「だから、どうかお願いします。私の邪魔をしないでくださいますか？」

産まれは間違っているかもしれないけれど、正しいことはしてるでしょ？

「私は、皆を優しい世界に導きたいんです！」

今度はどうだろうか？

さつきよりは、もう少し事細かに、私の願いを説明できたと思うのだけど。

「……」

反応は返ってこない。多分絶句しているのだろうか？

まあ、予想はしていた。あまり他人から賛同を得られるような夢でも無い。だが、それでも共感してくれるかもしれない存在は一人いる。

「あなたも、多少は私の考えを理解できるのではないのでしょうか？勇者ルスト」

彼女もまた、私と同じように、産まれながらに両親から見限られていた人間だ。

そんな彼女ならば少しはわかってくれるはずだ、この世界の間違いに。

私は彼女に笑顔を向け、その返答を待ちわびて――。

「ごめん、ちよつとよく分からない……」

「え？」

——本気のトーンで、あからさまに困った顔で、首を横に振られた

「……ああ、なるほど。やはりあなたも彼と同じように——」

「悪いけど、そういうのじゃないんだ。本気で、君の言っていることが理解できない。産まれてくる意味だとかなんだとかを僕に言われても……その、困る。そういうのは、リージェの役割だし」

否定されるでも無く、怒るでも無く、ただ単純に困惑と疑問があつた。

私の伝えたいことが、何一つ伝わっていないようであつた。

ついでに言えば、他の二人もなんだか渋い顔をしている。

とても最終決戦の顔とは思えない。

「私に言われても困りますよ。ただ、そうですね。ある程度考察混じりになりますが、なりに解釈して彼女の言っていることを整理します。よろしいですか？」

「お、おいリージェ……！」

「うん、お願い」

なんだろうか。何故だか、酷い既視感を覚えてしまう。
まるで前世と同じような、いたたまれなくて、嫌な気分だ。

「まず、彼女は『産まれた意味』とやらをいちいち言っていましたね。これはおそらく、人間は剣やペンのような道具と同じように、作られた以上何かの役目がある、と解釈しているでしょう。そしてその意味を持たぬものは、不良品であると考えているようですよ」

「なるほど」

なるほど、じゃないが。

あまりの事態に口を閉ざしてしまおう。

なんで、こういうことになっている？

「そんな考え故に、己達のような不良品を生み出す世界が悪い、という結論に至ったようですね。彼女の主張をまとめると、こんな感じですよ」

「なんでそこで世界が悪いってことになるの？」

「単なる責任転嫁かと。勇者様は知らないと思いますが、世の中には自分の不幸を全部世界のせいにするような奴が多いですからね。あれもその一人なのでしょう」

乗るな。これはただの挑発だ。

勇者の方とはともかく、あの魔法使いは明らかに頭に血を登らせようとしている。

何も聞かずに、ただあいつを殺して、黙らせてやればいい。

「……何も知らない人が、口を挟まないでくれませんか？」

「あなたにも分かりやすく言いましょうか？不幸自慢は他所でやってください」

「不幸自慢？私が？ふざけるな、何も知らない癖に」

「知りませんし、知りたくもありませんよ。だいたいあなたは、何を当たり前のことを言っているんですか？」

当たり前？何が？

「世界が間違っているなんて、とつくの昔に誰もかれもが諦めてることです。神を信仰している者達ですら、神が正しいことしかしないなんて考えちゃいません。不満なんて

山ほどあるけど、それでも生きているんですよ」

……ああ、嫌だ。

なんだか酷く、憂鬱になる。

「まあ、そうだな。……たしかに、世界は、神は全てを拾い上げてくれるようなお方ではない。だがそれでも、だからこそ我々は神に仕えている。神ですら間違うことがある世界を、少しでも正しくするために。それを自分勝手に諦めて、ひとくくりにするのはやめてくれ」

苛立たしい。

すぐに口を閉じてほしい。

なのに、私は反論を口にする。

感情が脳を通らずに、そのまま口から吐き出されていく。

「あなた達がそんなことを言うるのは、あなた達が特別だからでしょう？きつと、この世界に絶望してる人は沢山います。その人達を見捨てることを、あなた達は正しいことだ

と言えますか？」

「言えますよ」

「何故」

「絶望して、それでも立ち上がった人を見てきましたからね」

そういつて、二人は聖剣を携えた少女を見やる。

ああ、ムカつく。なんでこんなにむかむかするんだろうか。

そうだ。あの時と同じだからだ。

あいつが私を裏切った、あの時と同じだからだ。

「……君は、仲間が欲しかったんだね」

知った風な口を利くな。

「だから、彼から奪った勇者の資格を、もう一人のエンヴァを。僕の身体に混ぜ込んだ。多分、僕が君を斬ったあの時に」

私を蔑んだ目で見ろな。

「なんでそんなことをしたのかずつと分からなかったけど。今ようやく理解できた。自分の弱さを肯定してくれる人が欲しかったんだ。だからエンヴァ君に近づいた」

そんな目で私を見るな。

「けど、僕は君が思うより幸せだ。僕を実の子供のように育ててくれた人達がいた。僕を支えてくれる仲間達がいた。こんな僕でも、救える命があつたんだ。そして何より、僕を救ってくれる、大好きな人がいてくれた」

ああ、やっぱりあなたも同じなんですね。

「自分勝手なその願望に、僕らの明日を巻き込むな。優しい世界に行きたいのなら、一人で勝手に落ちている。我儘な戯言に付き合つてあげるほど、僕らは暇じゃない！」

ズルい。

『ソフイートはかわいいわね』

ズルい。

『私、あなたと一緒にいて幸せだった！』

ズルい。

『二人は僕を、それでも愛してるって言うてくれた！』

ズルいよ。

『くだらぬ。お前は誰かを救おうなどとは考えてなどいない。お前はただ、私達が憎いだけだ。己を愛してくれない他人が憎いだけだ。それを憎しみと認識できていない。だから、心の底から嬉しく思う。ようやく成長できたじゃないか、なあ？』

『ああ、なんて哀れな子。あなたは別に、同情されるような子じゃないわ。私の子供を食

なんでそこに、私はいないの？

「ツ避ける、リージェ!!」

「えっ?……は?」

一人目。

赤い染みが壁に広がる。

エルフの血も赤いらしい。

「ジャステイ!!」

「ぐっ、う!？」

二人目。

足が千切れて、床を汚す。

息はあるが戦闘不能。

「急に、速く……!?!」

三人目。

防がれた。流星に強い。

光の奔流が上半分を消し飛ばす。

すぐに生える。問題なし。

「お前……!」

「ズルいです」

最初からこれでよかったや。

「なんで、あなたやエンヴァは幸せなんですか？」

「何を……!」

「私は今、こんなに辛いのに」

なんで私だけ、子供として認められていないの？

なんで私だけ、皆から責められるの？
答えなんてとつくに知ってるけど。

「あなた達は正しいですね」

「そう思うなら、なんでこんなことを続けてるんだ!!」

「なんででしょうか」

なんでだろうか？

どうでもいいよ、とても気分がいい。

気分がいいから、しょうがない。

「けど、なんだかとっても楽しいんです」

勇者の敵意に溢れる視線を受けて。

私は、ようやく満面の笑みを浮かべることができた。

結構楽しかった

身体が、動かない。

何故こんなことになってしまったんだろうか？

分かり切ったことを、何度も頭の中で問いかける。

「心臓潰されてんのによく生きてられんなあ。どういう体してんだお前」

「……ア」

目覚めてすぐに見たは物は、俺の身体に淡い緑色の光を押し当て、傷口を塞いでいる
竜人だ。なんとも気色悪いものを見るような目で俺を見ている。

「ルストの、仲間……？」

「もう喋れるのかよ。とりあえず完治するまで動くなよ？別に前が死んでも俺は悲し

くないが、ルストの奴がお前にお熱だからな。まったく、こんな奴のどこがいいんだか」

あの方の姿はない。ということは、俺はどこかに運ばれたらしい。

すぐに追いかける必要と立ち上がろうとし、まともに動けず再び倒れる。

「動くなつて言つてんだろうが！馬鹿かお前は！」

「行かなきゃ、ならない。あの方を、助けなければ……！」

「知るかなもん！さっさと治される間抜け！」

押さえつけられ、再び暖かい光を胸部に当てられ、傷を治されていく。

非常にありがたいことだが、今は一分、一秒でも時間が惜しい。

こうしている間にも、あの子がルストに倒されているかもしれない。

俺が行かなければいけない。俺が。

俺が役に立つと、証明しなければ。

「つうかお前はまずルストの心配をしろや！なに訳の分からない女ばかり守ろうとしてんだ!?親友なんだろルストとお前！」

「……」

ルストを、心配。今更、何を言ってるんだ。

俺があいつを心配する資格なんぞ、もう無いだろ。

「なんで俺が、あいつを心配するんだよ」

「今あいつが戦ってる魔王の娘は、もう魔王を取り込みまっつてヤバイくらい強くなつてんだよ！このままじゃルストが危ない、俺もさっさと助けに行かなきゃならねえ！なのになんでお前は、あの女のことばっか考えてやがる！親友なんだろうお前ら！」

「……あいつなら。ルストと聖剣の力があれば、どんな奴だつて倒せるはずだ。だから、心配する必要なんて、無い」

「ぶち殺すぞお前！」

顔を凄まじい力で殴られ、吹き飛ぶ。

言葉の割には、殺意はなくてただ怒気を込め振るわれた拳だった。

「そもそもなんだ!?!お前結局どつちの味方だはつきりしてねえな！元主人に裏切られた

「先にお前！ならさつきと割り切って、復讐なりなんなりすりやいい！」

「先に裏切ったのは、俺だ」

きつと再会した時から、俺は薄々と分かっていたのだろう。あの子の目的が狂った末の結論であることに。

そして、そうしてしまった元凶は、自分自身であることに。

「最後まで、一緒にいてあげべきだったんだ」

俺は結局、あの時両親を取ったのだ。

彼女の手ではなく、二人からもらった愛情を選んできました。

だから彼女の手を取れず、俺は彼女を一人にしました。

「だから、今度こそは」

「じゃああいつはどうなるんだよー」

今度は腹を思い切り蹴り飛ばされる。

器用なことに、打撃を与えながら癒しの力を行使しているようだ。痛みと衝撃は感じるが、身体の傷は癒えていく。

「あいつはずつと、お前が敵になった時も！お前なんかのことをずつと心配して、どうにかしようと考えてきたんだぞ!？」

目を逸らしていた事実を、彼は捲し立てるように俺に向けた。

「魔物なんかにつき従ってるお前と出会って、あいつはそれでも喜んでたんだぞ！ようやく会えたつて。これでまた、一緒になれるつて。それを、女一人に誑かされた程度で捨てるのか。一緒にいた時間を、そんな簡単に投げ捨てんのか!？」

「お前に、何が」

「知らねえよお前の事情なんぞ！だがなあ！お前があの子を見捨てて、裏切ったつて言うんなら！お前はまた同じことをルストの奴にしてるんだよ！」

空っぽの建前が、ガラガラと崩れていく音がした。

彼の言葉は、どこまでも当たり前なことだった。

「結局お前は、何がしてえんだよ！」

俺が、何をしたかったか？

決まっている、俺は――。

「勇者に、なりたかった」

ずっと、俺のなりたいものは決まっていた。

「あの子との約束を、果たしたかった。ルストが期待してたように、聖剣を抜いて。本当の勇者になって、かつこよく魔王を倒して」

どこまでも、子供のような夢だった。

「ルストに、両親に、皆に。あの子に、褒めてもらいたかった」

どこまでも、自分勝手な願いだった。

「あいつが俺の先に行っちゃうのが、どうしようも無く悔しかった」

だから結局、俺は勇者にはなれなかった。

それはきつと、当たり前のことだったのだ。

俺はあの子を斬れなくて、あいつはあの子を斬れた。

俺は両親を捨てられなくて、あいつは両親を捨てられた。

俺は自分のために戦って、あいつは俺のために戦ってる。

何も斬れず、何も捨てられず、ただ自暴自棄になってる俺と。

世界のために、皆を守るために、ずっと聖剣を振るい続けているあいつ。

「あの子が求めてた勇者は。あいつの方だった」

それが、どうしようもなく、悔しくて。

だから、あいつより俺が勇者に相応しいんだと証明したくて。それでも、あの子は僕の方を見ちゃくれなくて。

「俺じゃ、やっぱり無理だった」

チャンスを与えられて。それも失敗して。

結局、あの子からゴミのように捨てられて。

「俺は、勇者にはなれなかった」

「んなことは聞いちゃいねえよ!!」

「ぐあっ」

また蹴り飛ばされ、壁にぶつかる。

気が付けば、俺の身体はほぼ完治していた。

噂には聞いていたが、凄まじい治癒能力だ。

「俺はお前の愚痴を聞きたいわけじゃねえんだよ！どつちに付くか、を聞きたいんだよ！」

「……」

「お前がほんとにルストの親友なら、俺と一緒にあいつと戦え。そうすりや王様も、お前に恩赦をくれる。お前の罪も多少はましになる。俺としちや、これが一番楽だ」

彼は、どこまでも真つすぐに俺を怒鳴り散らす。

「お前がまだあいつに着くつて言うんなら、俺は今ここでお前を潰す。ルストが何を言おうと、もう容赦はしない。あいつの想いを踏みにじるなら、俺はお前を許しはしない」

彼は、ルストのために気力を振り絞っている。

「お前は、どうする」

その問いに、俺は。

☆○☆○☆

「……想定以上、だなあ」

技量もクソも無い、力任せに膨大な魔力と食い集めた能力を無造作に振るう。

それだけのことで、私達をいとも容易くここまで追い詰めた。

傷が無いのは聖剣だけで、自分自身が受けた傷はとうに数十を超えている。

「アハッ」

狂ったような笑い声と共に放たれる、血のように赤く染まった触手。

それを切り払い、打ち落とし、魔力による推進力を頼りに新たなる魔王に近づく。

「聖劍よ——」

「お父様」

聖劍の魔力と滅びの魔力がぶつかり合う。

出力自体はほぼ互角、技術を加味すれば十分押し切れる。

しかし、それを補う厄介な能力が、新たな魔王には備わっていた。

赤い魔力を打ち払い、刀身を魔力形成し、彼女の右腕を目掛け振るう。

首を狙うこともできたが、それをしても意味が無いのは散々分からされた。

しかし、結局はそれも左腕で受けられ、聖劍の魔力を霧散される。

「ソフィート」

「厄介な……!」

魔力を無効化する、水晶でできた肉体。

彼女は右腕以外をそれに変化させることで、聖劍の魔力に対抗している。

僕に魔王の肉体を魔力なしで斬るほどの力は無く、技術も足りない。

例え魔力が無尽蔵だとしても、相手に効かなければ意味はない。

「お母さま」

「ツツ！」

反撃に差し向けられた無数の触手を避けきれず、肉を抉られ血が噴き出る。聖剣の魔力を肉を焼き、無理やり止血して応急処置をしているが……。

「やっぱり、一人じゃキツイなあ……！」

仲間の重要さが骨身に染みる。

急激な戦い方の変化についていけなかった自分のミスだ。

回復役のイヤルが戻ってきてくれれば、かなりマシになるのだが。

「あとどれくらい、持ち堪えられるかな」

聖剣は確かに強力な兵器だが、魔王を殺すにはやはりそれだけでは足りない。ただ魔力があるだけでは、彼女のもう一つの力に対抗することはできない。

おそらくは、あの水晶体がエンヴァ君にとっての剣術のようなものだろう。

「偽物じゃ、こんなものか！」

聖剣の出力を上げ、迫りくる攻撃をいなし続ける。

一歩ずつ、着実に追いつめられている。

それでもまだ倒れるわけにはいかないと、一歩踏み出そうとして。

「——あつ」

ポトリ、と。

鎧が砕けたことで、懐から地面に落ちたそれに手を伸ばす。

彼との思い出の象徴。あの楽しかった旅の、唯一の残り香。

生死を賭けた死闘の最中だと言うのに、それが壊れるのが嫌で。

その隙を、見逃されるはずは無かった。

迫る一撃、回避は不可能、防御は間に合わず、受ければ勝ちの目はつぶれる。

最悪の判断ミスだ、大事なものならどこか安全な場所に保管しておくべきだった。

せめて一矢報いようと、痛みを耐えるために眼を瞑り、歯を食いしばり。

「……？」

来ない痛み疑問を抱き、目を開ける。

そこには、ずっと求めていた彼がいた。

本物よりずっと大事な、玩具の聖剣を手にとつて。

呆れたように、けれどどこかうれしそうな顔で笑う彼。

「まだこんな持ってたのか、お前」

「エンヴァ、君」

傷は治つていても、魔王との闘いによる疲労は蓄積しているはずだ。

だと言うのに、彼の剣技は色あせることなく、触手の猛攻を片手に持ったクリスタルの剣で容易く捌き切り、僕を背負って駆け抜ける。

「借りは返すぞ！ルストの仲間！」

「えっ、ちょよ!？」

ゴウツ、という音が出そうな勢いで、僕の身体は宙に投げ飛ばされる。

一瞬の浮遊感の後、誰かにキャッチされる感覚。

見慣れた顔と、鱗がついた尾。

「イヤル!」

「すぐ治す! ちょよと待ってる!」

イヤルがここにいる、ということとはつまり。

彼は、どうやら僕を選んでくれたらしい。

「……イヤル、僕の治療は後でいい。あの二人を先にお願ひ」

「何言ってるんだ、そんな傷だらけで! いいからおとなしく」

「ずっと、待ってたんだ」

イヤルは引き留めようとして、しかしすぐに無駄だと分かったのだろう。

致命傷に強い光を浴びせた後、バンと背中を叩いて僕に発破をかけてくれる。

「絶対、生きて帰れ」

「ありがと。僕は本当に、良い仲間を持ったよ」

聖剣に光を灯し、新たなる魔王に向かい突撃する。

不思議と、先ほどまで感じていた倦怠感はどうに消え失せていた。

今はただ、彼と共に魔王に挑める高揚感が、僕の胸を満たしていた。

「ようやく、夢が叶う」

彼の背後に立ち、背中合わせに剣を構える。

負ける気はしなかった。

☆○☆○☆

『やはり殺しきれていなかったか』

『お前はいつも詰めが甘いんだ、グラトニカ』

あいつを殺せてはいなかった。

目障りだったあの男は、まだ生きて私の前に立ちほだかる。

自分だけ幸せになってる男は、私の右腕を振るい私を追いつめる。

砕けた剣は、どうやらあの竜人によって回復されたようだ。

元は己の右腕だ、回復能力が作用するのは不自然な話ではない。

「なんでまだ、生きてるんですか」

理不尽な問いかけを行いながら、母から受け継いだ触手を振るう。

ソフィートの特長能力である魔法無効化は、右腕のみ無くなっている。

聖剣の魔力を右腕に受けるわけにもいかない。

それでも有利に立っていたのに、強さだけは一級品の裏切者の参戦だ。

勝ちの目は限りなく細くなってしまった。

『裏切ったのはお前からは？』

「煩い！」

腹の中から聞こえる煩わしい声にそう返し、滅びの魔力で槍を作り出し放つ。

本来ならば容易く碎けるはずの、薄氷のような水晶の剣。

あいつは馬鹿みたいな剣術でそれを受け流し、ヒビ一つ入れることなくそれを扱う。

「理不尽じゃないですか……！」

『自業自得だろう』

『とつとと死のう、グラトニカ。もう私達の負けだよ』

「まだ、負けていませんよ！」

そういつて、まだ足掻こうとして。

「グラトニカ」

いつの間にか目の前に迫っていた彼に、私の名を呼ばれる。ずっと記憶に蓋をしていた癖に、今更その名で呼ぶ彼に、無性に腹が立つ。

「俺は、君に教えてほしいことがあってここに立っている」
「はあ？」

この男、まさかこの期に及んで、まだ私に何か未練でもあるのだろうか？
だとすれば大馬鹿だ。救いようがない。

「君の本当の目的を教えてください」

本当の目的？

くだらない、そんなもの。

「目的なんて、ありませんよ」

ただ、不公平だと思っただけだ。

自分だけがこんなつらい思いをして、彼だけが受け入れられているのが。私だけ二人に突き放されて、彼には優しい両親がいるのが。

「あなたが苦しむ顔を見たかった。堕ちていく姿が見たかった」

思ったより、自分でも分からなかった本音がスラスラと出るものだ。

「だって。私と同じように苦しむ人なんて、この世界にあなたしかいないじゃない」

なんで皆、当たり前のようにこんな世界で生きていける？

「なんで魔物なんていう存在が、当たり前のようにいるんですか。なんで魔法なんていう危ないものが、さも当然みたいに使われてるんですか。道端を歩いていたら、それだけで死ぬような世界で。なんで皆、それでも生きていこうなんて言えるんですか」

前世もクソだったけど、この世界もクソじゃないか。

生ぬるい世界を地獄だと思っていたら、もつと地獄みたいな世界に放り込まれて。

それでも頑張つて生きて、生きて、生きて、生きて、まともに生きようとして。
それで最後は、本当にいた誰かのために死ねと言われて。

「なんでそんな世界で、あなたは生きていけてるんですか」

ずっとずっとずっと、彼等の旅を見ていた。

力の大半を失い、未来の勇者から受けた傷を癒しながら。

彼らの楽しそうな冒険を、一生の思い出になるような旅を、眺め続けた。

「最初は私と同じように、泣いてくれる人だったのに。なんで、両親から愛されてるんですか。なんで、また立ち上がってるんですか」

こんな世界で、それでも強く生きてる人達を見て、自分がどれほど弱いかを思い知つて。

死にたくないって考えながら、あの子から貰った命の意味を探して、あそこに辿り着いて。

私と同じように、この世界で泣いているあなたを見つけて。

「私の味方なら、私と同じでいてくださいよ」

お父様が怖かった。あの人は絶対私を恨んで、殺しに来るだろうと思ってた。

お母さまが怖かった。自分の子供を殺されて、死んでもきつと化けて出るだろうか
ら。

この世界が怖かった。いるべきではない自分はきつと、いつか世界に殺されるから。

「私のためにお父様を殺して、怖いもの皆壊して。私を幸せにしてくださいよ」

こんな世界で、幸せなんて見つけれられるはずないって分かってて。

自分が幸せじゃないのは、自分のせいだってとづくに分かってて。

それでも、中途半端に受け入れてくれるあなたが大好きで、大好きで。

「私を置いて、自分だけ幸せにならないでくださいよ」

自分でももう、何がなんだか分からなくなつて。

「私を、連れて行ってくださいよ」

剣閃が舞う。

私を殺す刃が、近づいてくる。

聖剣の光が、滅びの魔力を押し返す。

動かなければ、死んでしまうのに。

なのに、何故だか動く気になれなくて。

「私を、逃がしてくださいよ」

「ごめん」

彼は、あの時のような、泣きそうな顔で私を見て。その手に握った彼女の腕を、私の胸に突き当てて。

「あの時に、俺がこうするべきだった」

「そう、ですよ。全部全部、あなたのせいだ」

不思議と、それほど悪い気はしなかった。

ずっと生きたいと願っていた癖に、抵抗しようとは思わなかった。

「何が、勇者ですか。あなたなんて、何もできない半端者です」

「……………めん」

「もう、いいですよ」

血は出なかった。

痛みはなかった。

それでも、自分は死ぬんだろう。

心地いい眠気に身をゆだねてしまうのだろう。

「君のことが、あの時から大好きでした」

「あなたのことが、あの時から大嫌いでした」

もういいだろう。

暴れまわって、満足できた。

私は碌に罪を背負わず、このまま勝ち逃げできて。

こいつは私に付き合われた罪を、この先ずっと背負うんだ。

「けど」

ああ、けど。

「あなたと過ごした時間だけは」

認めるのは、癪だけど。

「結構、楽しかったです」

それはきつと、私の求めていたものだ。

後始末

「……グラトニカ」

随分長いこと、彼女の願いを先延ばしにしてしまっていた。

両親の願いを取った時点で、俺はあの子の願いを既に裏切っていたというのに。ズルズルと、あの日失ったものを取り戻そうとして、結局はこうなった。

結局のところ、全部俺の自業自得だ。

俺がエンヴァという少年の人生を奪い。

彼女を殺す選択肢を取れず、されど二人を捨てることも出来なかった。

だから俺は、聖剣を抜けず、勇者になれなかった。

そうして、いろんな人に迷惑をかけて、沢山の命を散らせた。

それは決して、許されるべきことではないのだろう。

「……終わったね」

「そうだな」

サラサラと、砂のように消えていく、朽ち果てた彼女の身体。

最後まで、俺を救ってくれた彼女に対し、何も恩を返せなかった。

それどころか、俺は彼女にトドメを刺した。

「その……ありがとう、エンヴァア君」

「何がだ？」

「彼女を倒すのに協力してくれたこと。……もしかしたら、最後まで敵かもしれない、つて。ちよつとだけ、心配してたんだ」

ルストはふにやり、と昔のような笑みを浮かべる。

大人っぽくなったと思つたが、俺と同じであまり変わつちやいなかった。

それに少し安心すると同時に、これから行うことに少しの罪悪感が湧く。

それをごまかすように、俺もあの時のように笑いかける。

聖剣を目指して王都まで旅をした、楽しかったあの日々のように。

「あの子のことを想うなら、きつとこうするべきなんだって思ったからさ。……それが分からず、ただあの子に褒められたくて、何も考えず動いて。ようやく、あの子のことがちよつとだけ分かった。彼女はきつと、罪悪感に耐えきれなかったんだ」

最初にグラトニカと出会って、救われる前の俺のように。

誰も助けてくれる人がおらず、ずつと鉛のようにそれを背負ってきた。

もし誰かが救うべきだったとすれば、それはきつと俺だった。

結局、それは叶わなかった。

「彼女のこと、好きだったの？」

「ずつと前から、好きだったんだと思う」

「そっか。……けど、エンヴァ君が生きててよかった」

彼女のいた場所を眺め続ける俺に、ルストは右手を差し出した。

それを見て、ルストに治療を施した童人が彼女の傍を離れる。

律儀な奴だ。約束は果たしてくれるらしい。

「帰ろ、エンヴァ君。おばさんも、おじさんも。君のことを待ってるよ」

ルストは当たり前のように、俺を連れて日常に帰ろうとしていた。

あいつの目的が竜人の言っていた通りなら、それも当然だ。

こいつはずっと、俺を連れ戻すために勇者をしていたらしいのだから。

「聖剣を抜いた日に言ったこと。お前、覚えてるか？」

「……え？」

色褪せ、今や大した力も残っていない彼女の右腕から作られた剣を抜く。聖剣に対抗しうる力は既に失われているが、それでも残滓は残っている。今から始まる後始末には、十分すぎる程の力だ。

「エンヴァ、君？」

「聖剣。抜けよ、ルスト」

けじめはつけるべきなのだ。

誰もかれにも迷惑をかけた俺と彼女の罪は、きつと許されることはない。二人纏めて、地獄の業火で焼かれてしまうのがオチだろう。

「何を、言ってるの？もう戦う必要なんで、無いんだよ」

「俺にはあるんだよ」

そして、何よりも。

俺自身の願いで。

「俺は本気のお前と、聖剣に。この手で打ち勝ちたい」

あの時抱いた嫉妬と劣等感は、今になっても残り続けている。全てが終わった今でも、俺はこいつに勝てる気がしなかった。間近で見た聖剣の極光は、俺が想像するよりも凄まじかった。結局のところ、俺は。

最後の最後まで、性根が変わったりなんかしなかった。

「エンヴァ君、なんで。僕はもう、君と殺し合いたくなんて——ッ!？」

「それじゃ、俺は納得しない」

「……エンヴァ、君？」

あの時の焼き直しのようだ。

いや、きっと、俺はあの時の続きをしようとしているんだ。

俺の顔を、否。最後に残った、彼女の形見となった剣を見て。

ルストはようやく、俺のやろうとしたことを理解したようだった。

「なんで」

「やろうぜ、ルスト」

輝きを失った青い剣閃が、聖光を纏う勇者の剣と激突する。

ずっと続けたかった、あの時の続きだ。

☆○☆○☆

あの時のような邪魔は入らなかった。

あの時のように、ルストは俺の攻撃を無防備に受け入れようとはしなかった。

きつとこいつにも、生きて守りたいものができたのだろう。

だから、俺に殺されるわけにもいかなくて、剣を振るっけてくれている。

「どうしたよ、ルスト。お前の實力は、こんなもんじゃないはずだろうが!!」

魔力を完全に消せずとも、少し弱めてくれるだけで充分だった。

彼女に再会した時に飲み込んだ、彼女の小さな欠片。

本来ならば何の意味も持たぬ、儀式的なそれは、しかし。

その体の主であるグラトニカが死んだ後も、彼女の残した剣に僅かな力を与える楔と
なった。

「なんで、こんなことー!」

「前も言っただろ。剣でだけは、お前に負けたく無かったって」

魔王という障害を排除し、最早俺達が戦う理由は無くなった。

ルストの言う通り、この戦いに意味は無く、こんなことする必要はない。

「それに、彼女と約束したことが。もう一つだけ残ってる」

「何を——」

「この剣で、勇者の聖剣に勝つって約束が！」

勇者に対抗する力が、たしかにその剣には宿っていた。

色を失い、硬さも徐々に落ちていくが、それでも魔力を打ち払う力は残っている。ならば以前と同じだ。俺にとっては、どうとでもなるようなハンデだ。

「あれはもう死んだだろ！」

「そうだな。俺が殺した」

「ならもう、そんなの守る必要なんか無いじゃないか！」

叫びながらも、ルストは冷静に俺への対処を実行していた。

俺から距離を取り、聖剣から放たれる光の輪で俺の四肢を拘束しようと、四方八方から逃げ場を作らぬように俺を追いつめようとする。

それをほぼ同時に繰り出した剣閃で打ち払い、たった一步の踏み込みで、ルストの体に剣が届きうる距離まで跳んで、俺の有利な間合いまで持つていく。

もし彼女以外と結んだ約束なら、破つてもあまり気にしなかつたかもしれない。

こんな無駄なことをやる必要なんて無く、笑いながら魔王を討つたことを喜べた。

けれど、もうダメだ。俺がやってきたことのケジメは、付けなきやならない。

それに、何よりも。

「俺はやっぱり。お前に勝ちたい」

「……」

ルストは本当に、凄い奴だ。

たった一人で俺とあいつが来るまで持ち堪え、仲間を守り切った。

最後までその信念を曲げず、勇者としての使命を全うし、魔王を討つた。

文句なんてつけようがない、まさに俺がなりたかつた勇者そのものだ。

あの子との約束から生まれた、勇者になるという願いは。

それでも、今となっても本物で、未だそれを引きずっている。

決着を付けられるタイミングは、もうこの瞬間しか存在しない。

「これが終わったら。もう、全部終わりなんだよね」

「ああ。約束する。これが、俺の最後の我儘だ」

「……最初からずっと、我儘ばつかだったじゃないか。あの時から、迷惑をかけられ続けた。僕じゃなきゃもう、君のこと嫌いになってるよ」

「むしろお前、まだ俺が嫌いじゃなかったのかよ。グラトニカと戦ってる時も、『何を今更味方面してるんだ』って後ろから斬られるかと思ってたぜ？」

「それ、エンヴァ君が言う？なんであんなことされてまで、あの女の約束を律儀に守って未練がましくしてるんだか。さっさと忘れちゃえばいいのに」

「そう言われると返す言葉もねえや。お互い様だな、ほんと」

笑って、己の体が悲鳴を上げるのも無視して、剣速を更に上げる。

まだあの傷も完治していないはずだが、それでも俺の体は実に軽やかだ。

魔王に、グラトニカ。そして今は、最高のコンディションの勇者を相手にしてる。

こんな凄い連戦したの、多分世界中で俺一人じやなからうか？
剣戟に混じり、ルストが見たことも無い魔法を使ったりもしてる。
瞬間移動やら、体を浮かす魔法やら、あとはおそらく未来予知とかか？
潤沢な魔力を使つての魔法を上手く織り交ぜ、戦闘の底上げをしてる。

「ほんと。昔から凄い奴だよ、ルストは」

「君を目標にしてきたからね。そりや凄くもなるさ」

「昔の俺は、かつこいい男だったからな！」

「今もそうだよ」

「……」

真顔で言うなよ、恥ずかしくなるだろ。

ほんと、昔っからこいつは、底抜けいい奴だ。

そんな奴だから、勇者になれたのだろうけど。

「ああ、畜生」

ほんと、考えれば考えるほど、ルストこそが勇者に相応しい。

俺みたいな半端者よりも、こんな男の方が、きつと魔王を討つにふさわしい。そう認める度に、悔しくて悔しくて、そして同時にそれが誇らしい。

「お前は、ほんと。俺じゃ相応しくなくらい」

俺はただ、斬って進むくらいしかできやしない。

彼女に褒めてもらった、たった一つの長所でしか、お前とまともにやり合えない。

「どれくらいの数斬り合った？」

「さあ。もう千は超えてるんじゃないかな」

「なら、そろそろ終わらせるか」

「……うん」

お互いに、もうこれ以上の戦闘は難しい。

ならば、お互いが最高の力を出せる状態で終わりにしよう。

言葉には出さずとも、なんとなくでお互いが全力を出すことにした。

「なあ、ルスト」

「なに？ エンヴァ君」

目の前の親友がやろうとすることなんて、とつくに分かつてる。だから、最高にかっこいいキメ顔で言つてやることにした。

「楽しかったな」

剣を振るう。

全てを切り裂き、全てを終わらせるために。

己の全力を、全霊を、その刃に乗せ放つ。

勇者の聖剣が光り輝く。

黄金色の魔力は、巨大な刃となり振るわれる。

真正正銘、最大最強の一撃だろう。

そして、確信する。

勝つのは俺だ。

俺の刃は、彼女の右腕は、勇者の全霊に打ち勝った。

その切っ先が、ルストを捉えた。

「大好きだよ、エンヴァア君」

その結末も、きつとルストは分かっていたんだろう。

笑って、光を失った聖剣を俺に向ける。

苦し紛れの抵抗、最後の悪あがき。

当たるはずも無い、殺せるはずも無い、諦観の刃。

「は？」

だからまあ、きつとルストも、予想できないだろうなって考えてたけど。大当たりだった。赤い血が、聖剣の刀身を染め上げる。

「……え。なん、そんな、わけ」
「すまん」

自分で勝手に満足して、ルストをこんなことに付き合わせて。まったく、本当に酷くて、醜い人生だ。

それでも、お前に討たれたことは、俺にとつての誇りになるさ。

「なんで、避けなかったんだー」

聖剣は、俺の胸を刺し貫いた。

☆○☆○☆

体が揺らされる。俺をどうにか引き戻そうと、ルストは必至に血を止めようとする。けどまあ、無駄だ。この出血じゃ、奇跡でも起きない限り間に合いつこ無い。涙で顔が濡れる。いやほんと、こいつには迷惑かけた。

「ほんと、ごめんな」

「何を謝ってるんだよ！一緒に、帰るんだろ!?二人とも、君の帰りを待ってる！」

「……親不孝者になっちまうなあ」

「そうだよ！だから、早く血を止めなきや——ッ!？」

ルストは、俺から流れ出る血の異変に、ようやく気が付いたのだろう。

顔を蒼白にして、青く濁った俺の血を茫然と眺めている。

「なに、これ」

「グラトニカが、最後に残したものだ」

あの子を殺した時点で、俺の末路は既に決まっていたのだろう。

俺の身体に残った彼女の欠片は、彼女が死んだことで呪いへと変貌した。

魔王の欠片は、魔王を殺した俺を地獄に落とすため、その力を十全に発揮する。

「最後っ屁ってやつか？いやー、俺も驚いた。お前とあそこまでやれたのは、奇跡だな。

最後に、いい経験ができた」

「なに、言ってるんだよ。これで終わりだって。そう、言ったじゃないか」
「これで終わりさ。後に残るのは、魔王とその手下を倒した勇者達だけさ」

酷く身勝手だと分かっている。

ルストが悲しむであろうことも、分かっている。

それでも、俺は彼女が呪いを残したことが、なんだか無性に嬉しくて。

「ようやく。最初の約束を、守れるなあ」

随分と、約束を守るまでの時間は遅くなってしまったが。

あの子と一緒に、地獄の果てまで迎えるようだ。

「ふざけるな!!そんなの、認められるか!イヤル!治療を——」

「無理だ」

竜人の彼にも、辛い役目を押し付けてしまった。

「そいつはもう、助からん」

「なんで！」

「傷を塞いでも。呪いの毒は身体中を巡りまわる。……苦しんで死ぬだけだ」

見事なまでに、俺は生物として詰んでいた。

体を鞭打ち、最後にやるべきことを終わらせて。

気が抜けて、もう一度立つための気概すら失った。

「なあ、ルスト」

「やめてよ。行かないでよ。全部、終わったじゃないか」

「お前はさ。ほんと、凄いな奴だよ」

「全部、上手く行ったじゃないか!!」

呼吸が、段々と苦しくなる。

「お前は、勇者に相応しい、最高の男だ」

「違うよ……違うんだよ。僕は、君に」

「最後に、俺の我儘に付き合わせちゃって、ごめんな」

うん、これは死ぬな。

前の時と同じ感覚、自分の魂が体から流れてる感じ。

随分と懐かしく、今はどこか心地よい、死の感触。

「俺。お前と親友で、良かった」

泣きじやくるルストの涙を、少しだけ拭って。

「お前が勇者で。お前が聖剣を抜いてくれて」

そうして、俺はようやく、全部から解放されて。

「……ごめん、やっぱ」

で、最後にかっこつけようとして、失敗して。

「聖剣は、俺が抜きたかったや」

惨めに最後を迎える。

なんともまあ、俺らしい終わり方だった。

なんか生きてた

ようやくあるべき場所に帰ったのだと、その景色を見て理解した。

白い大地に、真つ黒な宙。驚くほど何も無い、けれどなんでもある空間。地上には沢山の誰かがいて、その中には死んだはずの見知った顔もいて。つまりは、この場所は死後の世界というやつなのだろう。

ならばきつと、彼女もここにいるはずだ。

地上に降りて、走り出す。

彼女にはまだまだ、言いたいことが沢山ある。

そうしてようやく、彼女を見つけ出した。

一人ぼっちで座っている、初めて恋をしたあの子。

「グラトニカ」

そんな僕の呼びかけに、彼女は振り向いてくれて。

ゆつくりとした歩みで、僕の方に近づいてきてくれて。

「あの時。もっと早く言えなくてごめん」

あの時に言えていれば、きつと別の道もあった。

あの時に彼女を選んでいれば、二人で生きる道もあったのだろう。

僕はそれができずに、こうして二人揃ってここにきてしまった。

けれどようやく、あの時決められなかった選択を、決めることができそうだ。

「僕は、君とお!？」

飛び蹴りされた。

顔面にいいのを一発喰らった瞬間に、僕の身体が色を取り戻していく。

「え、ちよ、なに!？」

彼女は、満面の笑顔を浮かべて、僕に、俺に見えるよう親指を思い切り下に向け。

困ったように笑う、いつの間にか現れていた彼女そっくりの少女を抱きしめ。蚊帳の外の俺に、今まで見たことないくらいうれしそうに言うのであった。

「汚らわしいので、こっちは来ないでくれますか。私は楽しくやってるので！」

なんとも、まあ。

楽しそうに、心地よさそうに言うものだから。

「あなたなんて、大っ嫌いですからーずっとこっちに来ないでくださいね！」

もう一発蹴られて、俺はどっかに吹っ飛んで。

気が付けば、冷たい地下のような場所で目を覚ましたのだった。



彼が死んでから、一ヶ月が経った。

イヤルが懸命に治療してくれたけど、それでも間に合いはしなかった。

心臓の鼓動は止まり、彼は帰らぬ人となった。

魔王を倒した勇者の名は、瞬く間に世界中に広がった。

新たに魔王を倒した勇者の一人として、僕の名前は広がった。

歴史上で初めて、忌子が魔王を討ったという実例ができた。

これで今後、少しは忌子に対する差別も無くなっていくだろう。

「しっかし、珍しいね嬢ちゃん。こんな時期に、あんな田舎に行こうだなんて」

「あはは……僕の故郷なんです。全部が終わったなら、帰ろうと考えてましたから」

「はー、なるほど。久しぶりの里帰りかい。なら、ゆつくりと休んでいくといい。何もな

い村だが、自然が豊かで村人も人が良い。いい村だよ、あそこは」

「ええ。よく知っていますよ」

エンヴァ君の遺体は、魔王討伐の騒動が終わった後、彼の両親に預けることにした。

僕が今こうして、馬車に乗って移動しているのも、彼の死をあの人二人に伝える為だ。

いつそ罵倒してくれたら、なんてあり得もしないことを考えながら、かつて彼と共に

旅をした景色を、馬車の中で揺られながら一人で見返している。

「次に魔王が出るのは、何百年後になるかねえ」

「さあ。けどきつとまた、次の勇者が倒してくれますよ」

「ハハハ、それもそうだな！今は生き残れたことを喜ぼう！」

後悔も、未練もある。

それでも、僕は彼の分まで生きなければならぬ。

何時までも彼のことを引きずって、何もできないなんてのは。

「君に、呆れられちゃうよなあ」

僕は聖剣を引き抜き、勇者になった。

なら、彼が目指した夢に恥じない人間にならなきゃならない。

「そろそろ着くぜ。お疲れさん」

「ありがとうございます」

そうして僕は、随分と久しぶりに、故郷の村へと降り立った。



「おお、ルストちゃんじゃないか！」

「久しぶりねえ。元気にしてた？」

相変わらず、二人は太陽のように眩い笑顔で、忌子の私を歓迎してくれる。実の両親を殺した私を、まるで自分の子供のように良く接してくれた二人。

「まったく、エンヴァ共々どこ行ってたのか不安だったんだぞ？それで、どこ行ってきたんだい。エンヴァは、勇者になりに行くって書置きを残して行ったが」

「昔っからやんちゃなんだから。ルストちゃんが一緒に居てなければ、無理やりにも引き戻しに行ってたわよ。あの子、あなたが居ないとずっつとうじうじしてるんだもの」

二人は、以前と変わらずに、僕に接してくれている。

それがどうしようも無く、僕の心を重くする。

「……それで、その。ルストちゃん、もしかしてだけど」

「エンヴァと、喧嘩でもしたのかい？ なんだか、顔色が悪いようだ」

「……エンヴァ、君は」

彼と、もう一度喧嘩がしたかった。

彼と、もつと沢山のことを話したかった。

それはきつと、僕なんかよりは、この二人こそが想うべきことだ。

だから、泣く資格なんて、僕にはないはずなのに。

「ちよ、ルストちゃん!?! どうしたんだ、いきなり泣き出して!」

「あの子、貴女に何したの!?! ほら、何があったか言ってちょうだい? 黙ってたら、何も分からないわよ? 喧嘩したなら、私達があの子にガツン!と言ってあげるから、ね?」

二人は何故かクローゼットの方を見ながら、慌てて背中をさすってくれる。

僕はようやくやく意を決して、二人に残酷な真実を伝えるため、口を開く。

「エンヴァ君は。僕が、殺しました」

「……………うん？」

ポロポロと情けなく涙を流し、俯きながらそう言う。

二人は理解できない、とでも言う風に揃って首を傾げる。

「待て、待て待て。なんでそんなことになってるんだ？」

「えーと、ルストちゃん？事情を説明してくれると、助かるんだけど……………」

僕はどうにか涙を堪え、二人に今までの経緯を説明する。

一言一句、嘘は吐かない。

それが今の僕にできる、最大限の誠意だった。

「……………」

「……………」

二人は顔を見合わせる。

思ったよりも冷静で、なんだか困ったような顔をしていた。おそらくは、彼の死に感情が追いついていないのだろう。

「ねえ、あなた。どう思う？」

「……ん。いやー、これは。息子と言えど……」

二人の反応を待っていると、ふと頭の中に直接声が届けられた。何度か体験したことのある、リージエの念話魔法の感覚だ。

『勇者様、聞こえますか？ちよつと、一大事が発生して』

『リージエ。悪いけど、今は待ってくれ。……エンヴァ君のことを、彼の両親に——』

『あ、いえ。その彼のことなんですけど』

二人は突然立ち上がり、クローゼットの方まで歩いていく。

クローゼットはまるで震えるようにガタガタと動き出す。

突然の行動に面喰らう僕を他所に、事態は何故か動いていく。

『脱走しました』

『……ん？』

『死体のはずの彼が、昨晚城から脱走したのを確認できました』

何を言っているんだろうか。

錯乱でもしたのだろうか。

「待つて！待つてくれ母さん！頼む、ほんとに頼む！今更あいつと顔合わせられないんだよ！滅茶苦茶迷惑かけた挙句こんな再会無理だつて！ほんと頼むから！」

「ルストちゃん泣かしておいて何言ってるんだいあんたは！ほら、さっさと出てきな！」
「父さん助けてえ！」

「ちゃんとお話ししなさい、エンヴァア」

「畜生逃げ道がない！」

僕は今、幻聴でも聞いているのだろうか？

なんで、こんな場所で、彼の声が聞こえるのだろうか。

『奇跡、としか言いようがないのですが』

「うー(ああ!?)」

クローゼットの戸が開かれ、中から一人の少年がゴロンと転がり出てくる。それは死んだはずの親友と瓜二つで。

好きだけ暴れて、自分勝手に去って行ったはずの彼そのもので。

「……ハ、ハハハ……」

頭を掻き、顔を青ざめさせ、僕の泣きはらした目を見て。

彼は、非常に気まずそうに口を開いて。

「ごめん、俺生きてたわ!」

僕は初めて、親友を本気で殴った。



参った、いやうん。とても参った。

俺だって想定外だよ、なんで生きてるんだほんと。

あんなに血を吐き出して、あんなに死ななきゃならないみたいなの霧囲気出して。なんで生きてるんだよ俺、ご都合主義にも程がある。

『あとは二人だけでごゆっくり』

『ちゃんと話し合うのよ』

そんなことを言っ出て行つた、珍しく厳しい両親を恨む。

いやまあ、俺がやったことを想えば全然マシな対応なのだろうが。

「生きてたんだね」

「……まあ、うん。なんか生きてた」

ぐしゃぐしゃになった顔を手で擦りながら、ようやくルストは口を開いた。

ほんと生きててすいません、絶対死ぬと思つたんです。

「それで？なんで隠れてたの？」

「……いや、だつて。お前に散々迷惑かけた挙句、あんなに死ぬ死ぬ言つてたのに生きてるつて、ほら……ダサいし……」

「もう一発殴つていいよね？」

「オツケー待とう。他の件で殴られるならともかく、これで殴られるのはなんか精神的にとても辛いから待とうルスト。せめてお前を裏切つた件に関してで頼む」

「僕が怒つてるのは。僕から隠れようとしてたことなんだけど？」

「すいません」

速やかに土下座に移行する。

畜生、久しぶりに見たぞルストのガチギレモード。

初めて娼館に行つて、歳のせいで追い出されたことルストにバレた時以来だ。やっぱ後ろめたいことやってもすぐばれるだけなんだな。

「それで。なんであんなことしたの？」

「あんなこと、つていうのは……」

「僕に殺されようとしたこと。なんで？」

「……あー、その」

ヤバイな、もう俺が泣きそうだ。

あんな無駄に壮大に心臓停まって生きてるとかある？

ないだろ。今からでもいいから助けてくれ神様、死神でもいいから。

「どうせ死ぬなら。せめてお前の手で死にたいな………つて」

「………なんで」

「いや、だって。俺、子供の頃からお前に迷惑ばっかかけたし。その癖、偉そうにしてたし。勇者になるんだってイキつてた癖に、結局お前が勇者だったし」

俺が威張ってたのって、自分が勇者になれるっていう根拠のない自信があったからで。それが無くなれば当然、俺みたいな奴が、なんでもできるルストに勝てるわけも無くて。

唯一残った剣の腕も、結局は聖剣ビームブツパでやられるのだし。

「せめて、死ぬのなら憧れた聖剣と、親友のお前に殺されたいなうって……」

「すいません」

無言の圧力が怖い。

「ていうか、ほんと。実際には、絶対死ぬはずだったんだよ……」

実際には死ななかつたわけだが、絶対死ぬって確信したのはあの竜人という時だ。傷は癒えたというのに、一向に重くなるばかりの肉体に違和感を抱いて。

そして己から流れる血に混ざった、蒼い欠片を見て理解した。

彼女と最初にあつた時に飲み込んだあの欠片は、首輪であつたということ。

彼女は最初から、俺を利用した後は殺すつもりだった。

もし不意打ちで殺せなかつた時のために保険を用意するのは当然だ。

その保険というのが、彼女の意思一つで人体を殺す毒に代わる彼女の身体。

「生きてたのは、多分」

「多分？」

「……その」

一番言いたくはないことが、それだった。

こんなもん、恥ずかしくて言えるはずも無いのだが。

「あの子に嫌われちゃったらしくて。あの世から追い返された……」

「……そっか」

彼女の身体の毒なのだから、そりゃ彼女の望んだままに消えるのだろうか。

もしそうなら、もうちよい早い段階で消してほしかったと思う。

というか毒が消えた程度で生き返る俺の身体もかなりあれだな。

やっぱり転生者パワーってすげー。

「僕が怒ってるのは分かるよね？」

「はい」

「じゃあ、怒りを鎮めるためには何をすればいいか分かる？」

「……腹を切ってお詫びを」

「怒るよ」

「ごめんなさい」

何をどうやって詫びればいんだろうか、これは。

俺の命だけでどうにかできるもんじゃないだろうし。

「というか別に、エンヴァ君僕に斬りかかったただけで、それ以外に変なことしてないじゃん。魔王を倒したのも、魔王の娘を倒したのもエンヴァ君じゃん」

「いや、まあ、そうなるのか……?」

「そうなるよ。だからエンヴァ君は、僕達にしたこと以外は何も罪に問われない」

「そうなのか……」

「そうだよ。けど僕は怒ってるので、ちゃんと贖罪はしてもらいます」

正直もう死ぬ気満々だったわけだから、これからのこととかなんも分からんのだが。起きた時も、何がなんだか分からず結局二人のとこまで逃げ帰ったし。

幸いにもまだ転移石があったので、すぐに帰ってくることはできた。

二人はいつも通り出迎えてくれたし、黙って出て行ったのは許してくれたのだが。うん、まあ、ルストを泣かせたことについては許してくれるはずも無く。

「何をすればいいんでしょうか……」

「忌子と呼ばれた子達を育てる、孤児院を造ったから。そこで一緒に働いてほしいかな」
「そんな凄いいもん作ったのかお前」

毎度のことながら、その行動力と正しさに思わず眩暈が起きそうだ。

俺があの子に蹴られてる間、こいつはとづくに世界のために働いてた。

「僕だけじゃ上手く行かないから、エンヴァ君にも協力してほしいんだ」

「俺が協力して、なんとかなるもんなのか？」

「なるよ。君の凄さは、僕が保証する」

やっぱりこいつは、凄い奴だ。

俺には勿体ないくらい親友だ。

「だから。また一緒に来てほしい」

「……やめといた方がいいとは思うぞ？俺、面倒くさい奴だし」
「それは知ってる」

ルストは笑って、俺の手を取った。

「それでも、僕には君が必要だ」

「……やっぱ、聖剣抜いた奴ってすげえんだなあ」

「いつまで気にしてるのさ。それ」

今でもまだ、ルストが聖剣を抜いたという事実は悔しいけれど。

それでも、ようやく俺もまた一歩、歩み出すことができそうだった。
全部が全部ルスト任せというのが、実に情けなくはあるが。

「あ、それと」

「うん？」

ルストは忘れていた、とでもいうように笑って。
俺の背中に手を回し、ぎゅっと抱きついてきて。

でかくなっても変わらないなと笑おうとして、ふと。

俺の胸に当たっている、腹筋にしては柔らかいそれに気づいて。

「……うん？」

「勝手に死なれる前に、言っておこうと思つてさ」

それに混乱している間に、初めて唇を奪われて。

呆然とする俺に、ルストは悪戯っぽく笑つて。

「大好きだよ、エンヴァア君」

聖剣を抜いた俺の親友は。

どうやら、女の子だったらしい。